
米英戦争 ～レッド計画～

キプロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

米英戦争 〜レッド計画〜

【Nコード】

N0027M

【作者名】

キプロス

【あらすじ】

ダ・ヴィンチの人力ヘリコプターから端を発し、爆発的に航空技術が発展している異世界。ヒトラーの死、米英間における関係の悪さ、ドイツの衰退、アメリカの飛躍的發展から勃発する米英間の大規模戦争。英国軍によるボストン強襲後、肥大化する戦線維持を図る為、アメリカは日本への軍事支援を依頼する……。史実と違う、もう一つの第二次世界大戦、太平洋戦争の末に、日本はまったく違う未来を辿る事になるのだが……。

ブローグ

1490年代、万能人レオナルド・ダ・ヴィンチにより、世界初の人力ヘリコプターの飛行が成功。一躍ヨーロッパ各地でダヴィンチの触発を受けた錬金術師達が飛行機開発に着手し始める。

ローマカトリック教会は飛行機を「悪魔の異形」として弾圧を開始し、錬金術師達はより飛行機開発を進め始めた。

1660年代になると、イギリスの頭脳の結晶『ロンドン王立協会』でロバート・ボイルを主とした科学者達により、次世代型航空機開発に着手し、その後、アイザック・ニュートン、ベンジャミン・フランクリンらによって原動機^{エンジン}が造られ、ヘリコプターに搭載された。

1775年。アメリカ東海岸で勃発した独立戦争に初めてヘリコプター『ダヴィンチの翼』が投入され、大陸軍を勝利に導く要素となった。主に給水や食料配達、ペスト菌撒布攻撃を行い、大きく評価された。

独立戦争終結後、建国されたアメリカ合衆国に発足した米陸軍・海軍に『ダヴィンチの翼』を主要とした戦略部隊『航空部隊』が編成され、第二次独立戦争時には英国軍を打ち破り、カナダ領の一部を掌握化。イギリスとの関係悪化の要因となってしまうのだった。

1853年には、日本に黒船が来航し、その時にもダヴィンチの翼が偵察目的に利用させ、一般民を驚愕させ、明治政府発足時には既に米国から数機ほど買い付けており、陸軍等に導入された。

1889年、ドイツ人オットー・リリエントールにより、世界初

の固定翼機が開発され、飛行に成功する。『ダヴィンチの翼』と王立協会の航空技術論文による触発を受けていたリリエントールは当時進めていたオーニソプター開発を中断しており、ライト兄弟の開発した固定翼機に似た構造の機体開発を成功させ、一躍脚光を浴びる事となるのだった。その結果、史実では1896年に起きた墜落事故が起きず、ドイツ軍部が注目し、技術開発を担う事となる。

第一次世界大戦の勃発——無事に終結。
ドイツが被る多額の賠償金。

航空技術の爆発的發展は歴史にほとんど影響を与えず、史実通りに事が進みつつあった。ドイツは航空技術を發展させていたが、それもまったくの無駄となったのだ。

多額の賠償金を被ったドイツでは、1920年代に発生した世界恐慌により、激しいインフレが起こり、経済は酷いものになり、ナチスの台頭を進める事となるはずだった。

しかし第一次大戦時、ダヴィンチの翼から落とされた爆弾により、ヒトラーは即死していた。象徴——指導者——英雄たるヒトラーが居なかっただけでなく、イギリスの介入によってナチスの前身であるドイツ労働者党は壊滅させられ、ドイツは事実上イギリスにより支配された。

1941年——遂に……第二次世界大戦が勃発す。

プロローグ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

夜明けの刻

1941年10月2日

イングランドの南岸に位置する軍港町。ポーツマス。煉瓦造りの居住棟とほのかな白熱灯が立ち並ぶ渚の内に、荘厳たる艦艇が黒き茫洋の海原を浮標していた。幾数もの艦艇の甲板へと水兵達が上つて行く。

空母『イラストリアス』、『インドミタブル』、『アーク・ロイヤル』、『ヴィクトリアス』は本国艦隊の主力空母として、旗艦『ネルソン』や巡洋戦艦『フッド』と共に、英国の威信を懸けた戦いへとその身を投じようとしていた。

本国艦隊司令長官のジョン・トーヴィーは、空母イラストリアスの艦橋から、全てを見据えていた。僅か数日前に突然昇格し、大將となり本国艦隊の司令長官となったトーヴィーは、まさかこの大舞台を任されるとは夢にも思っていなかった。

トーヴィーの前に置かれた無線機が鳴り、重々しい表情を浮かべながらスイッチを入れた。相手は第一海軍卿という役職に着き、英国海軍の頂点に君臨する男。ダドリー・パウンド元帥だ。

『作戦開始だ』

ざらついたパウンドの声が無線機越しに響き、トーヴィーは凍り付いた。遂に戦いが始まるのだ。

「了解しました」トーヴィーは言った。震える手を抑えながら。

『兵力は？』

「十分です。別艦隊も動き始めている以上、我々はボストンへ全力を傾けます」

『早く見たいものだ……米国人の冷め切った顔色をな』パウンドはそう告げると、唐突にも無線を切断した。

トーヴィーは艦橋からポーツマスの港を一瞥した。ネルソンの四十五口径砲の重厚な姿と、その隣に連なっている20隻にも及ぶ三個駆逐艦戦隊が見え、その背部には七隻の潜水艦が水面に顔を出していた。

正直言つて、トーヴィーはパウンドの事を信用していなかった。これまでもいくらか衝突しており、パウンドのやり方に、トーヴィーは苛立ちすら覚えていた。

1941年、史実では日本により、真珠湾が奇襲に遭った訳だが、もう一つの世界では訳が違った。対立する米英間の溝は深く、貿易関係も決裂寸前だった。ドイツへの介入以来、イギリスは多額の負債を抱え込み、ヒトラーの居ないドイツの悪の芽を引き抜き続け、ヨーロッパでの戦争は回避された。

しかし、イギリスでは国民の非難が政府へと集中し、各所でストライキが勃発。多数の抵抗運動が英国内だけではなく、事実上支配体制にあるドイツでも起こっていた。

チャーチルは事態の收拾に励んでいたが、国内における政府の評価はもはや世界恐慌の引き金となり、独立戦争以来から最も憎き敵たるアメリカを植民地化する事だけになり、結果として大規模な戦争へと陥ることになったのだ。

空母主体の大部隊は、まずボストンの海軍基地を無力化する事から始まる。そしてカナダの海軍港を拠点として東海岸への大規模な上陸作戦を敢行。一気にニューヨーク・ボストン・ワシントンを制圧し、国家機能を衰退させる事が第一目標だった。

戦力の大半は対日本戦の為、ハワイに集結しているので司令部は楽勝の戦いだと豪語し、チャーチルはラジオや議会で説いた。それがより戦争誘発を促進し、戦いに至る事となった。

結果として、日本がアメリカを攻撃する前に、イギリスが大規模な奇襲を実行する。

けたたましいラッパの音が鳴り響くと共に、エンジンが動き出す。低く単調な音を立てながら、空母イラストリアスが船首を微少に揺らし、海面にさざ波を立てていく。

大量の重油がボイラーへと注ぎ込まれ、強烈な熱風を吹き散らす。士官下士官関係なく、互い互いが顔を見合わせ、笑顔を見せたり握手をし合う。そして疾風にはためく国旗に目を向け、戦いに向けて気持ちを高める。

漆黒の闇が海を包み込む中、一筋の光が地平線から立ち昇る。曙光がイラストリアスの船首から漆黒を拭い取る中、トーヴィーは比類なき眼光で水平線の向こう側を見据え、こう呟いた。

“夜明けの刻だ”

夜明けの刻（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ボストン強襲

燦々と輝くイラストリアス。

雲間から唐突に現れる戦闘機の機体。

その全てが、米国にとつての脅威であり畏怖であつた。大西洋上に展開する本国艦隊は、空母イラストリアスを中心に、戦艦ネルソンとフッドにより守られている。

茜色に染まる大空には、漆黒の翼で入道雲を切り裂く戦闘機『モスキート』が木製の機体を震わせながら、編隊飛行で飛び続けた。夕刻の空を埋め尽くす赤蜻蛉が如く、大量のモスキートが漆黒の身体で飛んでいた。

その一つ、モスキート爆撃編隊の前方には、より速く飛行する飛行機が居た。英国の新鋭ジェット機『グロスター・サンダーボルト』だ。

米国の大手航空会社、エジソン・エアロ社の雷撃型ターボジェットエンジンを改良した物が搭載されており、その速度は瞬間的に非装備のモスキートを抜く事もある。実用型ジェット戦闘機を採用化しているのは、アメリカ・日本に続き、イギリスを含めた三国のみであつた。

サンダーボルトは太陽の光を受けて煌々と輝きながら、アメリカ領空を突っ切る。独特のエンジン音が耳に通り、パイロットのアーロン・マクベイン少尉は思わず苦い表情を浮かべた。外観は思わず見とれる程壮麗なものだったが、内装は驚くほど実用的で、アメリカ製レーダーや英国製機器が軒を連ね、あらゆる障壁を測定し補足する。

100機にも及ぶ航空機が空母から飛び立ち、全てが始まった。

ジョン・トーヴィー大將は、戦争という中での生の実感を噛み締めていた。

階級関係無く、戦争においてはいずれの者も命の灯が吹き消されるのは誰でも承知の事だった。だが、今宵はまた違う感触をトーヴィーは覚えていた。死との隣り合わせは、より命の何たるかを教えてくれる。自殺を望む者でさえ、一度戦争を体験すれば多くの者が考え直すだろう。

強く握り締められた手を解き、トーヴィーは無線機に手を伸ばした。おもむろにスイッチを入れると、鳴り響いていたザーザーという乾いた音が消え、無の世界が広がる。

トーヴィーは険しい顔を浮かべながら言う。「……こちらはトーヴィーだ。状況は？」

『全部隊、出撃完了し、ボストン沿岸に到達しています』

「了解した。軍港及び沿岸住宅地に爆撃を開始せよ」トーヴィーは声を潜めるようにして、眉を顰めながら相手へと告げた。もう戦いは終わらない。

トーヴィーを乗せる空母イラストリアスは、最新鋭の空母だった。初めて格納庫に装甲が施された艦であり、最新のダメージコントロール理論の元に設計されている。

史実では第二次世界大戦を生き残り、日本の特攻でさえ耐え抜いている。

イラストリアス中心の本国艦隊は、ボストンへの爆撃が主要任務であり、別部隊と同時に作戦を遂行する事が命令となっていた。今回の奇襲作戦はボストンのみならず、東海岸最大の工業都市ノーフォークと、ニューヨークへの爆撃も行いう事となっていた。作戦終了後はカナダへと向かい、次の指示を待つ予定だった。

成功の暁には、東海岸において展開する合衆国艦隊と、東海岸の軍事工業力を衰退させる要因となり、東海岸戦線における主導権を握る事が出来るのだ。

上空を駆け抜けるモスキート編隊は、サンダーボルトに防衛されながら、首尾良くボストン上空へと到達していた。編隊の眼下には、合衆国艦隊の艦艇群が軒を連ねて並ぶドックと、煉瓦造りの家々が広がっている。

マクベイン少尉は、背部から響くジェットタービンエンジンの低く単調な音を聞き入れながら、操縦桿を強く握り締めていた。高速で駆け抜けるサンダーボルトの姿は、優美としかいい様がなかった。マクベインの視線の先には米国の空母『レキシントン』の壮麗なる姿が映り込み、凝視するばかりだった。

現実における世界とは関係もまったく違うイギリスに対して、アメリカが怠る事は無かった。合衆国艦隊を急遽編成し、東海岸に置いていた。そして第二次独立戦争以来から、ボストンの海軍港が非常に重要な意味を持っており、比較的発展を続けていたのだ。

結果として東海岸における戦力の大半はボストンに集中し、英国最初の標的となる。

高揚と畏怖を同時に覚えながら、マクベインは操縦桿を右へと大きく切った。漆黒の両翼は茜の空を色濃く切り裂き、機銃砲身が空母の甲板へと口を向ける。刹那、モスキートは大きく下降し、空母レキシントンから300メートルの位置まで近づく。500ポンド爆弾が日光に煌き、ひたすらその姿を見せ付けた。

執行の時は来た。

マクベイン少尉は操縦桿を痛い程握り締めながら呟いた。口元に据えられた煙草を右手で掴み取り、機体の壁に擦り付けて消し去る。キャノピーが異質な振動に震い叩かれ、ひた揺れる。

レーダーには虚空が広がり、何も無い。

機銃の銃口は、なおもレキシントンに向き続けた。

よく訓練していたマクベインだったが、必要に胸へと十字架を切り、主に祈りを唱えていた。それぐらいしないと精神が安定しない。

「主よ……我々に幸があらんことを……」マクベインは唱えた。

後ろから機銃手の息伝いがつたわってきた。そして、マクベインの心臓の鼓動が高ぶっていく。

その瞬間の事、唐突にも眼下に爆炎が立ち昇り、炎片が宙を舞う。マクベインの背後から機銃の乾いた銃音が響き渡り、光跡が形成され、弾道を曲げながら弾丸が空を駆け抜けた。海の彼方からは英軍機『ソードフィッシュ』が高速で駆け抜けると、空母レキシントンの寸前の海原に魚雷を投下し、海にさざ波が出来上がっていく。

魚雷の到達とともに船尾に衝撃が通り、爆炎が舞い上がった。レキシントンは轟音を立てながら、海へと沈んで行った。

モスキートの編隊は任務をやり遂げた。

空母から軽巡洋艦まで、合衆国艦隊の大半は沈没し、茫洋なる海に沈む。ボストンの町は業火に包まれ、炎獄さながらの光景がマクベインの目に焼き付いた。

海の彼方には、誇らしげに停泊する本国艦隊の姿がある。

こうして、ボストン急襲は成功した。

ボストン強襲（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

レッド計画修正

アメリカ合衆国ワシントンD.C.

ペンシルベニア通り1600番地には、世界屈指に力を持つ人間が住んでいる。まるで昔の写真から抜き出たようなセピア色の建物は、“Executive Mansion”——— 行政府官邸と呼ばれている。いわゆる——— ホワイトハウスだ。

元々、ホワイトハウスは行政府官邸が正式名称だった。しかし、第二次独立戦争時にイギリスによって焼き討ちを受けた行政府官邸は黒く焼け焦げ、それを隠す為に白い塗料が使われた事が名称の由来となっている。

しかし、この世界ではイギリスの猛攻をはねのけており、ホワイトハウスとしての名称で呼ばれてはいない。そして1941年においても、正式な名称で呼ばれ続けている。

大統領執務室『オーバル・オフィス』には、國務長官のコーデル・ハルと海軍長官ウィリアム・フランク・ノックス。そしてアーネスト・キング大將が緊急召集されていた。3人は外窓を見据えるフランクリン・ルーズベルト大統領の右側に立ち、重い空気の中を耐え抜いていた。

「……呼んだ理由は分かるな？」ルーズベルトは辛辣な視線を3人に向けながら言った。ただただ3人は頷き、憤りの募った大統領の顔を見るしかなかった。

ルーズベルトの冷やかな口調に、キングは耐えかねず口を開いた。

「英国艦隊の件でしょうか？」

「そうだよ大將。まさにその通りだ」ルーズベルトは言った。

「大統領。すぐに避難なさった方が……」ハルは深刻そうな表情を浮かべながら告げたが、ルーズベルトは頑としてその場を動かず、力強い眼差しを3人に向けるのみだった。

「いずれな。 国務長官」

「しかし——」

ハルは言葉を続けようとしたが、ルーズベルトは手を上げて静止させた。

「今回の失態に関し、諸君らの意見が聞きたい」ルーズベルトはそう告げた。

時間が経たない内、キングが口を開いた。「明らかな奇襲と計画的虐殺は許され難い事態で想定外のものでした。すぐに失態を打開する為、防衛線を張ってカナダと東海岸からの進攻を限界まで阻止し、太平洋艦隊を待つのが妥当かと……」

ルーズベルトはにこやかな表情を浮かべた。「なるほどな大将。それで何とかなるかとはかくとしてだがね」

いままで口を開いていなかったノックスが唐突にも告げた。「キーンメルが更迭され、降格となった。次の合衆国艦隊司令長官は君だ」指の差されたキングは、驚きと不安から気が動転していた。キングの視線がルーズベルトに向くと、ルーズベルトは顔色を変えず、ただ頷いた。ノックスは微動だにせず、そこに立ち尽くす。

「では大将、イギリス人に一発食らわせてくれ」ルーズベルトは言った。

合衆国司令長官として、最初の仕事は“レッド計画”の修正だった。1920年代頃から軍部によって作成されたレッド計画は対英戦争作戦計画だ。イギリスを“赤”^{レッド}として呼び、カナダを主戦場として作成されている。

しかし、それは時代遅れの作戦案だった。以前よりも航空技術は爆発的に進歩し、ジェット機やレシプロ機、そして輸送・攻撃型ヘリコプターが空を舞っており、それは過去では想像し難い技術革新だった。

作戦内には対空中戦闘を考慮したものも含まれてはいるが、当時はイギリスの航空技術はそれほど進んでおらず、軍部は陸上戦闘を

主として作成されていた。また、大西洋における海戦シミュレーションもほとんど想定されていない。

キングはこの作戦に、発展した航空技術と大規模な海洋戦力、海岸からの本土上陸を想定して計画案を大きく修正させた。

まず、カナダの湾岸都市ハリファックスへの毒ガス攻撃を空爆に変更し、英国本国艦隊の艦艇の居座る軍港を破壊し、陸上戦力によってハリファックスを制圧する。これによって本国艦隊に甚大なダメージを与えられれば、修理の為に別のドックへと向かわなければならず、本土防衛が容易となるのが狙いの一つにあった。また、セント・マーガレッツ湾からの上陸作戦も計画されている。

だが、現在の国家戦力では限界があり、防衛すら不可能かもしれないとキングは感じつつあった。

レッド計画修正（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

Operation: Black Dragon (黒騎士作戦)

1941年11月

カナダ、ノバスコシア州ロング・アイランド島に位置するハリファックス。そこには、イギリス本国艦隊の米東海岸戦線の拠点、ハリファックス海軍港が存在する。

合衆国艦隊司令長官となったキング大将にとって、最初の任務がハリファックス海軍施設の空爆による拠点撃破であった。キングはこの攻撃作戦を『オペレーション・ブラックドラゴン（黒騎士作戦）』と命名し、東海岸に展開する軍事施設に伝えた。

作戦はまず、五大湖周域に位置する米空軍基地から爆撃編隊と米陸軍第82空挺師団のダヴィンチの翼を飛ばしてハリファックスへの陸上進攻地点の対空兵器と敵兵を排除。それと同時に待機させておいた第1機甲師団を都市中心部まで前進させる。海上からは戦艦『ニューヨーク』を中心とした艦隊による艦砲射撃と米海軍主力ジエット戦闘機『ライトニング』による爆撃を海軍施設に向け開始。一挙に停泊している艦艇を撃破し、瞬時に畳み掛けてしまうという寸法であった。

しかし、この作戦は最初から問題点が多かった。ニューヨークやフィラデルフィア、ワシントンといった都市にある海軍工廠にあった艦艇の大半を投入していることから、海軍上層部はキングの指揮能力を疑問視し始め、陸軍と空軍との連携は乏しいものだった。

『エジソンエアロ・ライトニング』は、米海軍の主力戦闘機の一つだ。エジソン・エアロ社は、かの有名な発明王トーマス・エジソンによって創設された航空機メーカーである。

幼い頃から、エジソンはいかなるモノを疑問に思い、常に教師へと尋ねていたというが、その中でも最も疑問だったのが「何故鳥は空を飛んでいるのか？」であった。そんな謎は小学校を中退してから徐々に分かっていく所となっていく。独立戦争以来、アメリカでは有名な存在である『ダヴィンチの翼』がその要因の一つであり、エジソンは初期に簡易的な航空知識を用いてグライダーを作り、失敗するがより空への好奇心を掻き立てていった。

白熱電球の発明以降の1910年代、自身の研究室に『航空部門』を設立し、ヘンリー・フォードとの共同出資により試作型レシプロ機を開発、飛行に成功する。

その後、『エジソン・エアロ社』を設立、イギリスによる民衆弾圧を見かねてドイツからアメリカへと亡命していたオットー・リリエンタール、アルベルト・アインシュタインを招き、日本機を基とした垂直離着陸ヘリコプター『イーグル』を完成させ、一躍米軍から脚光を浴び、200機が米空軍から発注される。

一方の『ライトニング』は30年代に完成したジェット機で、その高性能と耐久性は高く評価されており、米海軍の主力機として太平洋・大西洋の米海軍基地に配備されており、その総数は1000機近くにも上る。

大西洋艦隊参謀長のレイモンド・スプルーアンスは、再編された合衆国艦隊の大西洋方面参謀長として急遽職務に就くことになり、ブルックリンの海軍工廠から戦艦『ニューヨーク』に乗艦し、将旗を上げて漆黒に染まるハリファックスの沿岸に居座っていた。

関係の悪いイギリスの脅威を考えての事から、大西洋方面を見張る東海岸には史実以上の戦力が集まっており、スプルーアンスはその結果として、大西洋艦隊参謀長に抜擢されワシントンに居たのだが、黒騎士作戦の為に優秀な人材をなんとかかき集めていたキングが過去にスプルーアンスと面識があり、今に至る。

かつてはフランク・フレッチャーの旗艦であったニューヨークも、誰も起こると信じて疑わなかった近代的対英戦争用の予備戦力として何十年かの間、ブルックリンに埋もれていたが、その強さは変わらなかった。スプルーアンスは正直、ワシントンの頃は海軍生活にがっかりしていたものの、この戦争勃発の直後、合衆国艦隊参謀長に就任してから生きる気力とも思えるものを感じ取っていた。

空母『サラトガ』から、ジェット機ライトニングが銀翼を力強く広げながら、冬の冷たい外気を切り裂く。2基の雷撃型ジェットタービンからは鈍く単調な音が響き渡り、パイロットの頭蓋骨を震わせる。

両翼には、漆黒に染まり消えた固定機銃と、独特の光沢を放つロケット弾が搭載されていた。

パイロットのティム・ボウルズは、きつく締められたベージュ色の頭巾を緩め、キャノピーの先を見据えた。チヨコレート色の闇の先には、空を貫く五十万カンデラのサーチライトが一筋の光道を形成していた。

——黒騎士達の行進が始まる。

O p e r a t i o n : B l a c k D r a g o o n (黒 騎 士 作 戦) (後 書 き)

ご意見・ご感想お待ちしております。

弾嵐の夜

1941年11月

B-17フライングフォートレスのパイロット、マイク・オルセンはカナダ国境を越え、ハリファックス近郊まで近付いていた。眼下には米陸軍の『エジソンエアロ・イーグル』がM3榴弾砲を堅牢なロープにくくりつけ、10人の兵員を乗せながら低空で編隊飛行を続けている。

地上では、第1機甲師団のM3戦車が鈍い唸りを轟かせながら、ハーフトラックと歩兵を引き連れてハリファックスへと激進していた。

B-17は沿岸防御用の要塞を爆撃する事が多かった事からフライングフォートレス——“空飛ぶ要塞”という異名を持ち、第二次大戦ではヨーロッパや太平洋戦線で比類なき力を見せていた。爆撃機のイメージや能力を一新させ、現代の軍事技術の先駆的存在である。

だが、現実的には本土防衛用の爆撃機であり、第二次大戦前の米国会議ではある意味での“注目的”として知られていた。今回のような本土に近い拠点を攻撃する場合において、この機よりも優れているものは存在しない。

マイクの所属する爆撃中隊は、ハリファックス近郊の米陸軍上陸予定地『セント・マーガレッツ湾』と海軍基地の爆撃が主な任務であり、それはあらゆる部隊よりも過酷なものであった。

ハリファックス沿岸では、戦艦『ニューヨーク』が射撃体勢を取り、攻撃待機していた。スプルーアンスは艦橋から見える英軍のサーチライトから放たれる光の道筋に目を睜り、眼下に置かれた無線機を見やっていた。

攻撃合図は『行進』。ワシントンの司令部にいるキングから幾つかの経由で滞りなく運ばれ、漆黒の海洋に浮標する艦艇は第1攻撃を開始するという手筈であった。

B-17は重い体を震わせて、ハリファックスの上空を飛び、その周りにはライトニングが護衛を任されて守りを固めている。

唐突に鳴り響く無線機のさざめきに、スプルーアンスはハンドマイクを手に取り、耳へと強く押し付けた。不気味な静寂と頭上を響かすジェット機の単調な音。それらが絡み合う中、一つの尖った声色がスプルーアンスの耳を迸った。

『……“行進”。繰り返す……行進だ』

スプルーアンスは無線機から響く指令を聞き取り、隣に居た兵士に顔をやった。ハンドマイクを置き、人差し指を向けて合図を送った。

手振りから攻撃開始だと察した兵士は頷き、慌てた様子で立ち去っていった。

暗黒の世界に響き渡る乾いた砲撃音。

咆哮が轟き、35・6cm砲の砲弾が漆黒の衣を切り裂きながら空を飛ぶ。

「撃てえええ!!」スプルーアンスの声色とともに、艦砲が唸りを上げ、水面下を滑空し、ハリファックスの港に爆炎を上げる。

煌々と照らすサーチライトの矛先は黒き海原に光を灯し、弾丸が飛び盛る。

上空を飛んでいたB-17フライングフォートレスは、搭載しているライトR-1820サイクロン-97エンジンが低く単調な音を轟かせつつ、1000ポンド爆弾とノルデン式爆撃照準機を用いて行われる精密爆撃を開始すると、海軍施設の空に閃光が迸り、黒煙が立ち昇っていった。

普段の訓練とは違い、マイクは両手に痺れのようなものを感じていた。背後から響く轟音と、左右を守るライトニング。そして炎獄と化すハリファックスの大地を見るとより痺れが疼いた。

夜空を彩るのは対空砲火と五十万カンデラの光筋。そして慌てて空を飛び立つた英国主力戦闘機『サンダーボルト』だった。サーチライトに輝くロケット弾と、漆黒の機銃からは無数の弾丸が飛び盛り、上空を旋回するB-17へと襲い掛かった。背後を取られたマイクは操縦桿を限界まで上に引きあげ、高度を上昇させ、回避運動を取る。機銃手のブローニング12.7mm機関銃が咆哮を上げ、迫り来るサンダーボルトに弾丸を食らわせた。

迫るサンダーボルトのジェットタービンから黒煙が立ち上がり、速度が落ちる。その背後では、友軍のライトニングが機銃の照準を合わせ始めていた。

「くそッ！」

サンダーボルトのパイロットは苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべ、襲い掛かる現実に悪態を吐けた。背後ではライトニングがサーチライトに当たり、機体が煌々と輝いていく。

二度もチャンスは無い。

地上では、QF3インチ20cwt対空砲の砲撃手が心の中に呟きながら、閃光によって露になった米軍のライトニングに照準を合わせていた。B-17が攻撃を受ける直後に砲撃手はライトニングへと攻撃を仕掛けていたのだが、一度はその速さから撃墜に失敗していた。しかし、その体勢といったあらゆる条件において、砲撃手にとって絶好のチャンスであった。

QF3インチ20cwt対空砲が火を噴き、唸りを轟かす。

刹那、ライトニングから爆炎が立ち昇った。

「うおっ!？」マイクは眼前に現れた火達磨のライトニングに目を睜り、操縦桿を大きく右に切る。B-17は巨軀を曲げて、弾丸飛び交う大空をかい潜った。

セント・マーガレッツ湾では、米海軍の巡洋艦や空母が集結しつつあった。その一つの艦艇から、水陸両用トラクター『LTV-1』と、垂直離着陸ヘリコプター『イーグル』が発射し、湾岸への上陸を試みていた。LTV-1は、軽装の兵器として防御力は皆無に近かったが、その高い機動性を活かし、上陸のみに特化している。

LTV-1の一つに搭乗していた兵士の1人は、剥き出しの装甲と気持ち程度に付けられた増加装甲に深い不満を募らせていた。

——まさに物扱いだな。兵士は心の中で呟いた。

ブローニングM1919重機関銃を手に持ち、空を駆け抜けるイーグルからの爆風を肌を感じ、時折中へと入る海水の塩辛さに口を顰めつつ、兵士は眉を上げた。

突然響いた銃撃。

それは海岸に設置された要塞からの攻撃だった。装甲板に当たる銃弾の鈍い振動が、不気味にも車内へと響き渡り、頭上を飛ぶイーグルから野太い叫び声が降り注ぐ。イーグルは慌てた様子で右へと回避行動を取りつつ、搭載されている機銃で要塞陣を銃撃していた。

虚しくも響く銃声の中には、敵兵の悲鳴は含まれていなかった。

弾嵐の夜（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

稲妻VS雷電

ハリファックス沿岸部では、戦艦『ニューヨーク』を主力とした援護部隊が展開していた。空母『サラトガ』の周域には、駆逐艦『キング』と重巡洋艦『ヒューストン』が守りを固め、サラトガの第2飛行部隊の発進を防衛していた。

ニューヨーク艦橋では、スプルーアンスが不気味な振動を放つ無線機に耳を当てつつ、ハリファックスに展開した大規模な友軍の前線戦況を聞き、時折歯軋りと悪態を吐いていた。

特にスプルーアンスを苛立たせたのが、セント・マーガレッツ湾の上陸部隊だ。

「まだ上陸出来ていないのか？」

スプルーアンスは辛辣な声で無線機越しに告げた。唐突に訪れる英軍のサーチライトに目を瞬かせ、戸惑いを覚えながらやって来る士官達を上手に受け流す。ニューヨークの35.6cm砲から放たれる乾いた砲撃音が耳鳴りを与え、空を舞う敵軍機にいつ攻撃されるかという時に、スプルーアンスは誰よりも冷静を保ち、陣頭指揮を取った。

ニューヨークの左翼に展開するサラトガの甲板上には、真紅の点が2つ漆黒の闇を浮標していた。やがて点は4つとなり、8となる。甲板が光に照らされた時、それは明かされた。

幾数ものライトニングが列を成し、飛翔の時を待っていたのだ。銀白の翼が煌々と輝きを放つ中、ライトニングは雷撃型エンジンを轟かせ、白煙が空へと立ち昇って行く。

兵士達の野太い声が響き、ライトニングは体をブルブルと震わせると、まるで猪が如く猛スピードで甲板を一直線に駆け抜けけると、その翼を大きく羽ばたかせて飛び立った。

ライトニングの操縦手ドナルド・ストーン中尉は、コックピット

の堅い座椅子に腰をうずめて、眼前に広がるチョコレート色の闇を凝視していた。真紅の点光はやがて闇の中に消え去り、サラトガのおぼろげな輪郭のみが辛うじて見えた。

『ライトニング中隊、接近中の敵編隊を迎撃せよ』

唐突に響いた機械音にストーンは目を見開き、操縦桿を堅く握り締める。漆黒の世界の先に、忌わしきシルエットが見え隠れしている事に、ストーンは気付いていた。

くそッ……。サンダーボルトか……。

心の中で、ストーンは叫んだ。口の奥深くに何かが詰まったかのような感覚に襲われたかと思うと、やがて酷い耳鳴りに苛まれ始めた。

ライトニングとサンダーボルトの性能に関しては、サンダーボルトの方が若干高い。雷撃型エンジンの改良型と、変更された機体装甲は速度上昇に繋がってはいるが、それは同時に薄い装甲を使用している事からパイロットへの安全性を低下させている。結果、サンダーボルトの方が性能は良いものの、経験次第ではカバー出来る程度だ。

ライトニング編隊はその速度を上げ、大きく下降し始めた。サンダーボルト編隊は鋭利な機銃口を向け、ライトニングに照準を合わせる。

まったく闇の中から、くぐもった轟音が響き渡る。

サンダーボルトの雷撃は左翼に展開していたライトニング編隊の数機に甚大なダメージを与え、大きく旋回した。

「なんて奴らだ！」

ストーンはキャノピーに拳を打ちつけながら、声を張り上げて叫んだ。操縦桿を大きく右に切り、逃げ切ろうとするサンダーボルトの1機を追い詰めていく。

サンダーボルトが猛々しいエンジン音を上げる中、もう一つの爆音が突然響き渡る。左翼に大きな穴が開き、ジェットタービンが黒

煙を漏らしているのだ。同時にサンダーボルトの速度が低下し、高度を落としていった。

「これで終わりだ！」

ストーンは照準を合わせ、機銃を掃射する。

乾いた銃撃音がキャノピー越しに響く中、サンダーボルトは業火に包まれ、漆黒の世界を煌々と照らしながら、深き海洋へと堕ちていった。

「次だ。覚悟しろよ！」

操縦桿を大きく左へと切るストーンの視線に、巨大な鋼鉄の巨躯が姿を現した。そこには、空母サラトガへ攻撃を仕掛けようとする1機のサンダーボルトが低空で飛行していた。

ライトニングのジェットタービンが唸りを上げて、速度を増していく。

背後を突いたストーンは、サンダーボルトの機体に機銃の先端を突きつけ、激しい銃撃を轟かす。唐突に響いた轟音に堪らず、サンダーボルトは大きく下降し、漆黒の闇へと身を竄した。

「居たぞ！」

サラトガの観測手がサンダーボルトの存在に気付き、艦の投光器を暗黒の海へと向けた。すると、海面を上手く飛行するサンダーボルトの姿が露となってしまった。光に照らされたサンダーボルトの存在に気付いたストーンは、ライトニングを下降させる。

イスパノ・スイザHS・404の銃口が轟き、弾丸が海面にさざめきを立ち上がらせる。

サンダーボルトが轟きの中。炎を上げて叫ぶ。

光源がサンダーボルトから離れた時、既に敵の機体は業火の中に包まれ、黒き海洋に身を投じていた。ストーンの乗るライトニングは高度を上げて、サラトガの上を飛び去る。

サンダーボルトの魔の手から、艦隊は救われた。

しかし、その結果を生む為に犯した被害は甚大なものであった。

ライトニング中隊は半分以上が撃墜され、駆逐艦キングの艦首からは黒煙が立ち昇っていた。

『ライトニング中隊。見事だ』

賞賛の声が無線機から響き渡り、ストーンはそれを黙々と聞いていた。感謝はいいが、まだ戦いは終わっていない。

『……セント・マーガレッツ湾への攻撃を続けてくれ』

ストーンは無線を切り、操縦桿を握ると、漆黒の闇へと身を投じた。遥かなる静寂と闇が続く中、ライトニングは飛び続けた。

やがて、一つの光筋が闇の彼方におぼろげながら見えると、ライトニングは高度を落とす。

その光筋が照らしていたのは、上陸部隊だった。

稲妻VS雷電（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

煉獄

幼鳥が囀りを上げる。

そこが銃弾飛び交う危険地帯——であるとは予想だにしないだろう。セント・マーガレッツ湾の浜辺では、石造りの強固な要塞から轟く重機関銃の咆哮が、海より迫りし水陸両用車『LTV-1』と垂直離着陸ヘリコプター『イーグル』に襲い掛かった。

「伏せるおおッ!!」

LTVの頭上を飛んでいたイーグルから誰かの甲高い叫び声が響き、鈍い衝撃音が連続してこだまする。

やがて、イーグルから苦々しい悲鳴が放たれると、黒煙が立ち昇り始めた。LTVに搭乗していた兵士はヘルメットを頭にきつく被り、衝撃に備えた。

——刹那、爆音が轟く。

イーグルは悲鳴を上げると、そのまま海へと突入した。

まったき闇に包まれた漆黒の海が大きく舞い上がり、激しいさざめきを引き起こし、LTVの車体を激しく揺さぶった。まるで人魚か何かが海底へ引きずり込もうとしているようだと思えた。兵士は感じた。

車内から、巨大な鉄の塊が炎上し、海に沈む光景が兵士の視線に映りこんだ。その恐怖の光景を目を丸くして兵士は見つめるばかりだったが、そんな感覚は瞬時に崩壊した。

大きなさざ波が浜辺を打ちつけ、砂を飲み込む。

銃声と、怒鳴り声と、もどろしい足音を除けば静寂な浜辺に、新たな衝撃が迸る。鋼鉄の巨躯が黒き茫洋の海原から身を乗り上げると、轟く銃声は一層激しくなった。

「Go!Go!Go!!!!」

上官の怒鳴り声と同時に、兵士達はLTVから身を乗り出す。兵士が車載されたブローニングM1919重機関銃を握り締め、無数

の銃弾を自らの姿を露見せしめんとする光源に向けて撃ちまくった。温かな光はやがておぼろげなものとなり、パチパチと点滅し始めると完全に消えた。

LTVは敵の凶弾から何とか上陸部隊を守つてはいたが、時には車内に弾丸が貫通して反対側へと駆け抜けた。

ブローニングM1919から手を離し、兵士は座席に置かれたM1ガーランドライフルを手に取り、LTVから飛び降りる。兵士の足に柔らかな砂浜の感触が进り、やがて重荷ともなる。泥濘のように足場が不安定だった為に、簡単には進む事は出来なかった。

さらに事態は悪化する。

唐突にも兵士の眼前に爆炎が舞い上がり、砂埃が宙を浮遊している。英国軍の投光器から漏れる僅かな光源から、不気味なシルエツトが露になっていた。

それは、巡洋戦車Mk.1だった。主砲のQF2ポンド砲が不気味な軋みを上げながら、上陸部隊のLTVに砲口を向けた。

LTV操縦手は愕然とした。

近くに居た兵士はとっさに屈み、砂浜に突つ伏した。

乾いた音とともに、砲弾が砂浜を滑空す。

そして――爆音と衝撃が浜を轟かした。LTVは鈍いエンジン音を放ちながら、その車体を大きく右へと傾けた。砲弾は車体を反れ、すぐ近くの砂浜が爆発した。低い軋音がLTVから響き、それがやがて車体の甚大な被害を露見する。

「援護しろ！」

上官の叫び声がこだまし、地面に突つ伏していた兵士は起き上がった。耳には劈くような残り香があったものの、そんなものを気にしている暇は無かった。M1ガーランドを握り締め、兵士は震える足を奮い立たせる。

闇の中に浮かび上がるMk.1の輪郭に目を瞠る兵士。既に主砲は攻撃準備を済ませている。砲塔では敵兵がヴィッカーズの銃口を米陸軍の上陸部隊に向けて、照準を合わせていた。

自分は死ぬ。

新たなパニックに襲われ、兵士は一瞬フリーズしてしまっていた。

英国軍のMk・1巡洋戦車は、今や戦況を完全に掌握していた。ろくな対戦車兵器を持たない上陸部隊にとって、この状況は最悪の極みであった。有刺鉄線と地雷に覆われた砂浜には隠れる場所も無く、どうしようもなかった。

「友軍機だ！」

米兵達の歓喜は、やがて掻き消された。米空軍のB-17爆撃編隊の精密爆撃により、一瞬にして海岸の要塞を粉碎してしまった。

「よし！いいぞ！」

歓喜が舞い上がり、絶望の淵から上陸部隊は脱していた。

しかし、爆撃を逃れたMk・1は、LTVに主砲照準を合わせていた。

まるで良い夢がいきなり悪夢に変貌したかのような感覚に兵士は陥り、愕然とした。悪夢はまだ終わらないのか……。

銃声が轟音を立てて砂粒を舞い上げ、冬の冷たい空気を切り裂く。兵士は覚悟したかのように歯を食い縛った。兵士の頭上に白い光が差し込み、鈍い振動で頭が震える。その瞬間天国への扉が開いたのかと兵士は思い込んだ。

……何も感じない。あるのは静寂だけだ。

確かに自分は死んだはず……だった。しかし、その割には痛みを感じなかった。まさか感じない程一瞬にして死んでしまったのか？

塞いだ目蓋を引き上げて、兵士は悟った。全てを知った。

炎上するMk・1。天空を切り裂いて飛ぶライトニング戦闘機。突き刺さる。焼け爛れる。引き千切れる。折れる。そんな衝撃に兵士が襲われなかったのは、ライトニング飛行中隊による働きだ。

——ありがとう。

兵士の胸に浮かび上がったのは、その言葉だった。

煉獄（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

海軍基地進攻

カナダ。ノバスコシア州セント・マーガレッツ湾。

水平線の彼方より朝陽の眩い曙光が差し込む中、米軍上陸部隊は既に貨物の積み降ろしを終えていた。夜間に行われた大規模な上陸は昔の話。戦闘に参入していたあのＬＴＶ搭乗兵士は、揚陸艇から大量のコーンフレークが入った木箱を浜へと降ろしながら、イーグルの爆風に仰がれる。

「二等兵、出発の時だ」

唐突に背後から響いた声に振り返ると、上官が直立不動の体勢で待っていた。兵士はＭ１ガーランドライフルを背負い、暖機離陸態勢に入ったイーグルヘリコプターへと歩を進めた。

ハリファックス沿岸部。

戦艦『ニューヨーク』には、随時制圧と撃破の報告が入ってきていた。

スプルーアンスは満身な笑顔を漏らし、艦橋の窓から差し込む曙光に目を瞬かせた。軍帽を一度脱ぐと、再び被り直し、並べられた海図と地図に目を丸くして凝視する。時折ため息を吐きながらも。

艦砲射撃と爆撃を受けて、ハリファックスの海軍施設が炎上している光景がスプルーアンスの視界に入る。時折やって来るサンダーボルト編隊は五十六口径４０mm対空機関砲で軽くあしらった。

このまま行けば、楽に事を進ませられるだろう……。

スプルーアンスは心の中で呟いた。ただ、その胸の奥には漠然と広がる巨大な不安も募っていた。ハリファックス制圧をこの日の内に済ませ、完全なる防衛陣営を敷かなければ、カナダ軍と英国軍の増援がやって来て、瞬時に艦隊が滅ぼされる事は理解出来ていた。そもそも、この作戦自体にも大きな不安点が多く、元々の作戦目標

も『本土上陸艦隊の壊滅と太平洋戦力到着までの時間稼ぎ』である。ハリファックスで騒動を起こせば、カナダにおける敵戦力の目に付き、ハワイに展開する太平洋艦隊が東海岸の防衛線を構築するまでいくらかは英国軍本土上陸戦力を削ぐ事が出来るからだ。

——その為にも、ハリファックス制圧は重要目標なのだ。スプルーアンスは自分に言い聞かせ、背を真つ直ぐと奮い立たせた。

ハリファックス上空。

米海軍主力ジェット戦闘機『ライトニング』飛行中隊のストーン中尉は、集結する陸軍勢力の援護を行う為、海軍施設へと接近していた。

市街地周辺には、M3榴弾砲の砲撃部隊が展開し、市内にはM3戦車の大隊が進入。上空にはイーグル飛行編隊がカナダ国境を抜けてきた空挺部隊と、セント・マーガレッツ湾からの上陸部隊。計600人以上の兵員を乗せ、ハリファックスの制圧準備を始める。

『全隊、友軍よりサンダーボルト編隊の存在が確認された。早期撃墜せよ』

唐突に漏れた無線からの声に、ストーンは計器を確認し、蒼き空に浮標する入道雲の合間から湾岸の海軍施設を見下ろした。施設からは黒煙が立ち昇り、今もなお燃え盛る敵艦の炎がはつきりと視認出来る。ストーンは操縦桿を下へと大きく倒し、大きく下降させた。著しく下降するライトニング。激しい風圧がキャノピーを震わせ、機体を揺るがす。

急転直下。

物事を迅速に解決する為にも、空の力が必要となる。

ライトニングは鈍い唸りを放ちながら、うねりをあげて雲間から飛び出す。純白のベールに包まれたストーンの視界は、やがて断ち

切れて紺碧の海と黒き煙が果てし無く広がっていた。

「ボウルズ。準備は？」 ストーンは無線機越しに告げた。

『……OKです。中尉』 ライトニング中隊に所属するティム・ボウルズ軍曹は、間を置きながら上官へと返答した。夜間からハリフアックス第1攻撃部隊に所属していたボウルズは、激しい戦闘から奇跡的に生き残ったたたか者であり、壊滅した自部隊から急遽ストーンに所属する中隊へと転属していた。

ライトニングは編隊を組み、蒼々たる天空を銀翼で切り裂きながら突き進む。その先には、英軍主力ジェット戦闘機サンダーボルトが編隊を組んで待ち構えていた。

「接触まで5秒……4……3……2……1……」

ストーンの声と轟音が迸り、銃弾が飛び盛る。ライトニングとサンダーボルトのロケット弾やイスパノ・スイザHS・404が同時に咆哮し、爆音が轟いた。銃声の中には絶叫と高揚からの歓喜も立ち上がり、両機はほぼ同じ数が撃墜されて堕ちた。

ジェットタービンが低く単調な音を上げていたが、それは加速し、スピードを上げた。

『中尉！敵機が背後に』

その事をストーンは理解していた。背後に纏わりついたサンダーボルトの機銃は何時でも咆哮を放つ事が出来る。ストーンは操縦桿を大きく左に切り、旋回をした。背後のサンダーボルトは無数の銃弾を放っており、それを何とかしてライトニングの機体に当たらないよう、ストーンは限界までの操縦技術を使い通した。

くそッ。離れない。

ストーンは何とかして背後の敵機から逃れようとしたが、サンダーボルトはなおも纏わる。

激しい銃声がキャノピー越しに轟き、ストーンは一瞬“死”さえ覚悟した。

ストーンが瞬間的に後ろを振り向くと、そこには炎上して墜落す

る英軍のサンダーボルトがあつた。その近くには、大きく旋回するライトニングの姿があつた。ボウルズ軍曹の機だ。

「感謝する軍曹。貸しが出来たな」ストーンは感謝の限りを尽くし、無線機のハンドマイク越しに言った。返答は間も無くストーンの元に届いた。

『ええ、大きな貸しですよ中尉』ボウルズの苦笑いを含みながら告げた言葉に、ストーンも思わず笑みを漏らした。

海軍基地進攻（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ハリファックス制圧戦

ハリファックスの湾岸施設では、鉄格子に阻まれたM3戦車の大隊が無理矢理キャタピラで格子を踏み潰して進入していた。その後ろから、第1機甲師団の歩兵隊がM1ガーランドライフルを構えながら突き進む。

空には垂直離着陸型の陸軍多目的輸送機『イーグル』が、二翼のローターを高速で回転させながら低空での飛行を続ける。ガスタービンエンジンから放出される低く単調な音が辺りに響き、英国兵が頭上を見上げた。

上陸部隊でLTVに搭乗していた兵士は、セント・マーガレッツ湾からイーグルに乗り、海軍施設の制圧部隊として派遣されていた革椅子から腰を上げ、大きく揺れるヘリの内部で、壁に付けられた取っ手で身体を支えながら立ち続ける。ヘリが姿勢を保ち、2基のターボシャフトから放たれる熱風を肌を感じつつ、開かれたドアから地上を見下ろした。

「全員、ロープ降下だ！」

隊長の声が機内にこだまし、兵士はドアからロープを下へと落とした。隣からはブローニングM1919の乾いた銃声が轟いている。

「GO!GO!GO!!!」

上官に背中を叩かれ、兵士は屈んでロープを手に掴む。

兵士は納得したかのように苦笑いを漏らしながら、降りた。

——浮遊する。何とも変な感触だな。兵士はロープを一心に握り締めると、雑多な地上へと足を降ろしていく。疾風が身を包み込み、弾丸が鼻をかすめる。

体勢を整えつつ、兵士は地面に足をしっかりと踏み締めた。銃弾飛び交う地上界では、防衛拠点として施設一角の倉庫を手に入れた米陸軍第1機甲師団のM3戦車が37mm砲を英軍のMk.1に向けて射撃しながら、上下に動き続けていた。

兵士はM1ガーランドを握り、姿勢を低くしながら湾岸を駆け抜ける。波止場すれすれをライトニングが飛び、M3が咆哮し、戦艦の艦砲射撃が果てし無い爆音を迸らせた。

「前進だ！」

甲高い声とともに、M3戦車がガソリンエンジンを轟かせながら、37mm戦車砲とブローニングM1919機関銃から無数の銃弾を放って突き進む。凄まじい音と同時に、M3戦車の後方部から激しいエンジン音が噴き乱れ、兵士はとつさに後部へと駆け込んだ。戦車内部から男の野太い声が不気味なノイズを編集されて付けられたが如く、外へと響いている。屈強な鋼鉄の巨軀は軋みを上げて、舗装された地面を突き進んでいった。ガソリンの刺激臭が兵士の鼻に付く。

ふと足を止め、兵士はM1ガーランドの銃身を外へ出した。軽い金属音が空気を切り裂き、銃弾が敵兵の胸元へと放たれる。

兵士は突如、M3戦車から飛び出し、土囊へと駆け込んだ。敵本隊とは僅か数十メートル程しか離れておらず、米陸軍砲撃隊のM3榴弾砲が集中砲火を浴びせ掛ける。強靱な腕を上へと張り上げ、兵士はM1ガーランドライフルの照準を敵兵の右脚に向け、発砲した。刹那、敵兵は絶叫して横たわる。

M3戦車の37mm砲と、ライトニングの機銃掃射が敵陣に襲い掛かり、地上数十メートル範囲が掃討された。

その後、戦車大隊と上陸部隊の猛攻は続き、午前中に海軍施設は制圧された。その朗報はすぐにスプルーアンスの元へと届いたが、スプルーアンスはためらいがちに勝利のガッツポーズをするのみで、その後の処理や継続する戦闘へと目を向けていた。

……まだ仇取りは完全に終わっては無いな。

スプルーアンスはそう確信せざるを得なかった。

1941年11月22日pm17:08

イギリス連邦領カナダ。ノバスコシア州ロング・アイランド島。
ハリファックス市はアメリカの占領下となる。

米軍側戦死者数 約800人

英軍・加軍側戦死者数 約3000人

『ハリファックスに居たのは、ノーフォーク攻撃を行った英国艦
隊であると推測される』スプルーアンス・レポートより』

ハリファックス制圧戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ハル・ノート

1941年11月23日Am10:25

ワシントンD.C.

駐米大使の野村吉三郎と、特命大使の来栖三郎はリンカーン・リムジンの後部座席に肩を並べて腰掛け、車窓からワシントンの壮麗な景色を見据えていた。日系人の運転手が巧みにハンドルを捌き、タイダルベイスンを弧を描くようにして駆け抜けていく。

タイダルベイスンには薄い氷が張り、その周りには痩せこけた桜の木が囲むようにして立っている。

「……心しなければならんだろうな」

来栖はワシントン・チャンネルの河畔に視線を向けながら呟いた。米英間における関係悪化は既に世界へ大きな衝撃を与えている。ドイツ・フランス・イタリア・ギリシャは英国によって掌握されており、英国とソ連は中立条約を結んでいるのだ。

しかし、日本には英国の接触は未だ無かった。

「そうでしょうな。この機に重大な変わり目が生まれるはずですよ」
野村は首を下へと傾けながら言った。

やがて、リムジンはワシントン・チャンネルを越え、ナショナル・モールへと足を踏み入れた。真つ先に2人の視線に広がったのは、ワシントン記念碑の堂々たる風格と、その白き巨躯であった。天空の彼方まで突き出ているワシントン記念碑は、ワシントンの象徴だ。アメリカ歴史博物館が見えた頃、おぼろげながら一つの建物が目に映る。行政官邸——いわばホワイトハウスだった。

しかし、車はそこへは向かわず、周りを旋回しながらコンスチチューション・アベニューを駆け抜けて、リンカーン記念堂の壮麗な建物が眼一杯に広がった。しだいにリムジンの速度が落ち始め、記

念堂を抜けた23ストリートを道なりに進んで行くと、唐突にも車は停まった。

窓の取っ手を回す音が後部座席に響き、運転手が帽を脱いで外に挨拶しているのが見て取れる。外に居たのは軍服に似た紺色の制服を着込んだ屈強な男で、腰元の鉄棒をブンブンと振り回しながら、後部席の窓へと顔を近付けて車中の様子を確認すると、手振りで行っていいと運転手にサインを交わした。

リンカーン・リムジンはそこで完全に停まり、運転席のドアが開く音が響く。

やがて、運転手が後部席のドアまで近付き、外からドアを開けて2人の男を車から降ろしていく。

2人の前には、一つの壮健な建物が堂々と立っていた。

アメリカ合衆国国務省。

その一角のオフィスの前に、野村と来栖は招かれていた。ピシツとしたスーツを着た中年職員が苦笑いを浮かべながらドアに拳を打ちつけ、2人の来訪者の到来を中の人間に知らせる。

「……どうぞ」

渋みの入った声がドア越しに響き、職員は一言挨拶を済ませ、足早に立ち去っていく。

まるで金庫の扉を開けているかのような重々しい感触を感じながら、野村はドアノブを慎重過ぎる程に回していった。最初に野村が入室し、続いて来栖が足を踏み入れる。2つの足音が室内に反響しつつ、2人は部屋の奥へと歩を進めていった。

部屋の奥には、温かな光が差し込む窓と、そのすぐ前に陣取るオーク材のデスクが置かれ、横には合衆国国旗が金属製のポールに結び付けられて立て掛けられていた。

「大使、よくいらつしました」

デスクに腰掛けていた男—— 国務長官コーデル・ハルは、堂々と

した姿勢を崩さず、革椅子から立ち上がって笑顔で握手を交わした。2人も緊張したムードから脱し、気持ちよく挨拶を交わす。顔面蒼白に近かった来栖の顔は平静を保ち、野村と来栖はハルの促しからデスク前に置かれた2つの革椅子へと腰を下ろした。

ハルは口籠りつつも、デスクの引き出しの上段を取っ手を引き、中から一通の封筒を取り出した。嚴重に堅く結ばれた紐を解き、口を開ける。

中から出て来たのは数枚の用紙。

ハルはそれをデスクへと置いて、2人に見せた。

前段近くには、『極秘文書』の文字が刻まれ、『試案にして法的拘束力無し』との言葉が続いていた。それには思わず2人も顔を見合わせ、戸惑いの表情を浮かべるしかなかった。

「あくまでも法的拘束力はありません。ですが、これが日米間に大きく関係するのは確かです」

ハルはあくまで——と、ですが——の部分強調しながら告げた。2人はさらに用紙に目を通し、下へ下へと視線を落としていった。2人の目元には皺が浮かび始め、渋い表情が浮かんでいた。

ハル・ノート——と呼ばれるそれは、日本にとっては過酷を強いる案件が多かった。人道的には正しくても、結果としては数十年の歳月をかけて完成させた日本の“先進国”としての地位を崩壊させるものであり、その時から今日でも論争が続いている。他にも、外務省が『試案』という部分を意図的と思える形で消されて天皇に提示されていたり、草案者のハリー・ホワイトのスパイ容疑だったり、ハル・ノートには何かと裏の部分が多かつたりする。

しかし、このハル・ノートはまた訳が違った。

突如勃発した米英間の戦争は肥大化の一途を辿っており、英国はヨーロッパ・東南アジアなどの地域の掌握を着々と進め、ソ連とは中立を保っている。このまま進めば、国際的にアメリカが孤立する事は目に見えており、それを何としても阻止したいルーズベルトは、

国家全体の利益と命を考え、日本との軍事同盟締結を決意したのだ。
った。

前日22日、議会で徴兵制登録義務年齢数が18歳から45歳にするという案が可決した頃、ホワイトハウスではハルとルーズベルトが最終的な調整を済ませ、一致で新規案を書き上げたのだ。

『日米協定新規案内容』

- ・日米は軍事同盟を締結し、対英共同戦線を張る。
- ・対英戦争中、米国は航空揮発油を年間100万キロリットル提供する。
- ・日本は南部仏印から撤兵する。
- ・日米両国の通商関係は資金凍結令以前の状態に戻す。
- ・この協定は30年間有効とする。

全体的に新規案は暫定協定案に近く、日本との一時的な同盟関係締結を目先の問題とし、後に戦力を増強し、最終的には大規模な対日戦争に持ち込もうとルーズベルトは考えていた。同盟締結が実現すれば、日本を堤防として利用し、背後から迫るオーストラリア・東南アジア・ソ連の勢力を抑え、かつ日本の戦力を削ぐ事が出来る。さらに、太平洋戦力の半分を東海岸防衛に向かわせた為、同盟を結ばずに日本と戦えば、太平洋戦線はアメリカ側が危機的状況に陥る可能性が高いという理由もあった。

ハル・ノートは野村と来栖の手により、日本へと伝えられると、枢密院での協議の末、昭和天皇へと滞りなく伝えられると、さらなる協議と軍部の末、結論が出揃った。

1941年12月7日

日本側がハル・ノートを受理し、日米軍事同盟が締結す。

ハル・ノート（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第一航空艦隊

1941年12月28日

マレー沖50マイル。

星々のベールが漆黒の空を包み込む中、空母『翔鶴』の艦橋では、茫洋たる深き海洋に目を向けていた1人の男が居た。心臓の鼓動が高くなり、しだいに体が暖かくなっていく。その男——南雲忠一中将は、虚空から現実へと舞い戻ろうとしていた。

突如決定した『日米同盟』に戸惑いを覚える者は少なくなく、南雲もまた、その1人だった。

軍部は艦隊の編成・配置替えを急遽進め、第一航空艦隊を東南アジアの対英戦線へと投入していた。アメリカ海軍太平洋艦隊の第3艦隊との共同戦線を担っている。

世界初と呼ばれる第一航空艦隊の機動部隊は、航空機が普及した这个世界では唯一の存在とまではいかなかった。しかし、日露戦争時に発足した第一航空艦隊は、日本製のダヴィンチの翼改良機と、レシプロ機を搭載して戦争中で多くの戦果を残している。その能力は高く評価され、さらなる戦力拡張と、最新技術の導入が進んでおり、世界屈指の強さと経験を持ち合わせた機動部隊なのだ。

空母『翔鶴』を主とした第五航空戦隊を主翼とし、第一・第二航空戦隊。そして第一艦隊がこの機動部隊の護衛を務めていた。

けたたましいサイレン音が鳴り響き、翔鶴の甲板上が慌しくなる。闇に染まった空母上に真紅の点が浮遊し始め、やがて1機の巨大な戦闘機が動き始める。

その戦闘機——九九式艦上ジェット戦闘機。通称『神風』は、日本海軍の主力ジェット戦闘機だ。全ての軍用機は名称に皇紀下二桁

を冠する規定になっており、この機は皇紀2599年——つまりは1939年に正式採用された。この機には世界では初となる試みである——ガトリング砲が搭載されており、その火力は絶大的なものであった。

ガトリング砲の歴史は古く、明治以降、すぐに輸入されたガトリング砲は日露戦争時に日本海軍のダヴィンチの翼に搭載されて、世界初の実用的対地対艦攻撃ヘリとして登場し、華々しい成果を上げた。極限までに絞られた軽量素材を基に造られ、独自に開発した小型モーターにより、機体に負荷を掛けない電動式での攻撃を可能とした。また、大型の機体とガトリング砲の重量を支える為、神風の両翼は湾曲しており、それによって十分な飛行を可能としているのだ。

しかし、現実には速度上昇を実現する為、ガトリング砲を取り外した機体も少なくない。

翔鶴にはこの神風が40機程艦載されており、零戦や九九式爆撃機と肩を並べている。

第一航空艦隊の艦載ジェット戦闘機『神風』のパイロット、山川清二大尉は待機命令から翔鶴の甲板上に立ち尽くしていた。ムズムズするベージュ色の頭巾を被り直し、上空を旋回する友軍の偵察機をぼんやりと眺める。

「なんとも変な気分だよ」

山川は隣に腰掛けていた別隊の長を務める矢田大尉に告げた。矢田は思わず苦笑いを漏らし、同調するように小さく頷いた。

「それはそうだ。すぐ前までは敵同然だったんだからな」

矢田は垂れたこうべを上げ、水平線の彼方に見える米海軍の第3艦隊を見据える。空母ヨークタウンと戦艦アリゾナの重厚な巨軀が、おぼろげな輪郭を形成して2人の視界に広がっていた。ペンシルベニア級戦艦のアリゾナは真珠湾攻撃での標的となり、沈没の運命を辿るはずだったが、現在は第3艦隊に所属している。

突如鳴り響く音と共に、2人は顔を見合わせた。甲板上の足音と鈍い動作音が目立ち始め、零戦の宋一二型エンジンの轟音が響き渡った。

2人は足早に自身の機へと駆け寄り、操縦席へと駆け上る。

神風のジェットタービンエンジンは低く単調な音を放ちながら、ゆつくりと歩を進み始める。山川は操縦桿に両腕を固定し、それからすぐに計器類のチェックを済ませた。山川はほくそ笑み、満足そうな吐息を漏らし、ゆつくりと目を瞑った。

……やれる。

虚空の中でそう呟くと、山川は静かに目蓋を開いた。

激しい衝撃が山川の胸部と頭を揺さぶり、キャノピー越しに広がる前方の視界にのみ、その視線を固定する。歯をきつく噛み締めながら、神風は歩道にでも乗り掛けた車の如き衝撃を底部から感じ取り、背部のジェットタービンを拡張させた。

神風は飛翔する。

艦橋から、南雲中将は飛び立った神風編隊を見据えていた。その隣には零戦編隊も列を成して突き進んでいる。

南雲はその光景を焼き付け、記憶の淵に詰め込んだ。

第一航空艦隊（後書き）

ご意見。ご感想お待ちしております。

Operation: Projection (突起作戦)

1941年12月28日Am02:15

マレー沖

第六艦隊第一潜水戦隊に所属する伊号第十五潜水艦は、ついに英国海軍東洋艦隊の存在を確認し、全艦隊に電報を送った。それから間も無くして、第一航空艦隊の神風飛行編隊が出撃し、米軍との共同作戦『オペレーション・プロジェクション』を開始する。

作戦の根幹は、シンガポールに集中する英軍戦力を壊滅に追い込む事にあり、日本陸軍と米陸軍の上陸・東洋艦隊への攻撃・シンガポールへの空爆が主となっていた。

——午前二時三十七分。『プリンス・オブ・ウェールズ』型戦艦一隻発見ス……——

「第一潜水戦隊より入電。英軍艦隊に動きありとの事です」空母翔鶴の艦橋にて、参謀長草鹿龍之介少将が眼前に立つ南雲中将に告げた。

「了解した。残った半機を急速発進させる」

南雲はかぶりを振って答えた。その刹那、金切り声のようなサイレン音が艦橋をこだまし、漆黒の空に数十機の航空機編隊が姿を現した。

——翔鶴の12.7cm高角砲が火を噴き、空を切り裂く。水平線の彼方には、英国海軍巡洋艦『レパルス』と戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』。そして、複数の駆逐艦が姿を現す。翔鶴の三時の方向に展開していた第一艦隊の戦艦『金剛』が海洋の要塞が如く、無数の砲弾をぶちまけた。

金剛はアウトレンジ戦法を持ってして、35.6cm砲を咆哮さ

せる。砲弾は黒き海洋を滑空し、プリンス・オブ・ウェールズの艦首前に巨大な水柱を立ち昇らせ、鋼鉄の巨軀を大きく浮かび上がらせた。そのすぐ近くには、急速発進していた九九式艦上爆撃機が金星エンジンを震わせ、250kg爆弾を艦橋直下に投下する。

爆炎と轟音が艦橋を崩壊させ、船体に大きな穴を開ける。

その周域に展開していた日本海軍主力戦闘機『神風』は、重厚なガトリング砲の砲身を合わせ、無数の弾丸を艦尾へと食らわせた。すぐ近くでは、巡洋艦レパルスが38cm砲を轟かせ、翔鶴へと砲弾を差し向ける。が、それは外れてしまっていた。怒りでも感じたが如く、金剛は咆哮をレパルスへと轟かせた。

レパルスは重厚な巨軀が砲撃によって湾曲す。

呆気なくやられたレパルスは、弱々しく海域から撤退を開始した。

シンガポールは日英同盟の破棄後、イギリスによって防御陣営の強化がなされ、東洋におけるジブラルタルと称される程であった。海に面する南側には重砲群とトーチカ群が構築され、北部はマレー半島が広がっており、それが天然の要塞として機能する。

史実では、日本陸軍は準備砲爆撃無しに強襲上陸作戦を開始し、多くの被害を出したが今回は訳が違い、戦闘の所要時間が関係なく米軍の大規模な支援も受けられるとあって、軍部は当初案を一部修正させた作戦を持ってして強襲上陸を行う事を結論付けた。

午前三時。B-17フライングフォートレスを主力とした爆撃編隊がコタバルの海岸線に展開するトーチカ群や英印軍第8旅団を集中爆撃。沖合いには戦艦『カリフォルニア』と多数の巡洋艦が展開し、激しい艦砲射撃を海岸へと浴びせた。

また、ライトニング編隊により、英空軍を牽制しつつ制空権確保にも繋がり、積極的な制圧爆撃が容易となる要因の一つである。

水平線の彼方より太陽の温かな温もりが差し込んでくる中、米軍の水陸両用車『LTV』、そして多数の上陸用舟艇が滑らかな海面を駆け抜け、コタバルの海岸を目指す。その中には、日本の小発動艇や特大発動艇といった舟艇も混じっていた。

空には、米陸軍の垂直離着陸機『イーグル』とともに、よく似たヘリが飛行していた。

そのヘリ――『九九式航空輸送機』は、大日本帝国陸軍の主力航空輸送機である。イーグルのように、ガスタービンエンジンを用いたティルトローター機で、初期型機はイーグルの基礎ともなっている。

大日本帝国陸軍第18師団の嶋澤二等兵は、コタバル上陸部隊の一員として小発動艇に乗り、上陸を進めていた。

小さなさざ波が立っているのみだったため、上陸は容易なものとなり、大規模な空爆と艦砲射撃を受けた第8旅団は撤退しており、攻撃を受けずに無傷で全部隊が上陸を終えた。イーグルと九九式航空輸送機が空を覆い尽くし、LTVが鋼鉄の体を砂浜へと乗せる。

舟艇から降ろされたM3軽戦車や、九七式中戦車が駆動して砂浜を激震させる中、嶋澤も小発動艇から降り、砂浜へと足を踏み入れた。

コタバルの海岸は穴ぼこと黒煙、そして異臭に覆われていた。嶋澤は地面から目を反らしたかったが、何処までも広がるその光景は視線を誘い、恐怖に目を見開く。そして、瞬時にしてその惨状は具現化し、鉄片や醜塊となつて横たわっているのだ。

「気味が悪いか？」

所属する分隊少尉の杉本は汗を混じらせた嶋澤の顔を見て尋ねた。嶋澤は喘ぎ息を静かに漏らしながら、銃身の下がっていた三八式歩兵銃を高く掲げ、自分が大丈夫であると伝えた。

O p e r a t i o n : P r o j e c t i o n (突 起 作 戦) (後 書 き)

ご意見・ご感想お待ちしております。

コタバル攻略戦

1941年12月28日 pm 12:36

上陸を終え、荷物の積み降ろしを完了させた米日上陸部隊は、コタバルの北へと進撃を進める。

コタバル北部には漁村トンバットがあり、上陸部隊の第一制圧目標である『トンバット補給基地』が存在し、海岸線の防衛陣地から撤退した歩兵第8旅団が逃げ込む様子が、偵察機からの報告により、上陸部隊に伝えられていた。

コタバルの他、シンゴラ・パタニにも上陸作戦がとり行われている中で、コタバル上陸部隊の侵攻は最も速く進むはずであったが、英空軍の拠点であるコタバル飛行場から飛び立つ英軍機により、その速力は低下しつつあった。これまで日米軍を甘く見ていた英軍は、米軍による夜間空爆から周囲地域から航空戦力の増援を要請しコタバル飛行場へと送り込んだ。結果、周辺地域の制空権を支配し、米軍爆撃編隊が迂闊に近付けない状態が朝頃から続き、部隊侵攻率も停滞した。

また、モンスーンの影響から午前十時頃から豪雨が続き、第二波の上陸部隊の舟艇群が荒れた海の影響により、上陸出来ない状況となり、イーグルや九九式航空輸送機の飛行も中止されていた。

第25軍司令官の山下奉文中将は、晴天の霹靂とも言える豪雨が降り注ぐ中、九五式小型乗用車に乗り、コタバル海岸部からトンバット補給基地へと向かっていた。周りには九七式軽装甲車や九七式中戦車が軒を連ねている。

山下中將が車窓から外を見ると、幾つかの民家が立ち、木製の小型船が海岸に並べられていた。

——不気味な静寂。それは一瞬の内に消し去られ、銃声と爆音に包まれた。

轟音が立ち、九七式中戦車の九七式57mm戦車砲がボロボロの民家に砲身を向ける。山下中将の頭上には怒りからの雲が停滞しているが如く、憤りを覚えつつ英印軍への制圧射撃を命じた。隣に座っていた兵員が慌てた様子で重厚な無線機越しに座標を半ば叫ぶ形で告げ、上空を旋回していた友軍戦闘機により、敵が潜伏すると予想された地点に機銃掃射が浴びせられる。

徒歩で移動していた嶋澤二等兵の分隊は、日本陸軍の機甲部隊防衛の為、周囲をパトロールしていた。突如勃発した戦闘の結果、嶋澤は三八式歩兵銃を高く掲げ、銃口を民家近くに設置された土囊へと向ける。

弾丸は空気を切り裂き、猛速で突き進む。

銃口からは鈍い火薬の臭いが漏れ出し、凄まじいスピードで飛翔した弾丸は風を纏いながら、土囊に隠れていた英兵のヘルメットのど真ん中を撃ち抜いた。

「八時の方向、敵兵2名！」

分隊長杉本の声が豪雨のトンバットに轟き、周囲に展開していた歩兵の三八式歩兵銃が左を向く。弾丸の嵐が2人の英兵に襲い掛かり、無垢な英兵の身体に無数の弾痕が具現化した。

激しい戦闘は数時間に渡り続いたが、英軍歩兵第8旅団は奇襲を行ったにも関わらず、第25軍の堅陣を崩壊させるに至らず、逆にその戦力を削がれる事になった。

1941年12月28日pm20:01

コタバル飛行場では、英国陸軍歩兵第8旅団のケイ准将が飛行場内の兵士達の撤退準備を着々と進めていた。午後にトンバット補給基地を日米軍に制圧されて以降、コタバル市内の防衛線が徐々に破壊され、飛行場への敵軍到着は目に見えるものとなっていた。

ケイ准将は総力戦に打って出ようとも考えたが、上陸部隊の戦力

は予想を超えており、それだけの余裕は歩兵第8旅団には備わっていなかった。早朝から行われた大空爆により、飛行場滑走路の一部と大半の航空機が破壊されている以上、航空戦力も僅かなものだ。かといって、周辺地域からの航空支援は当てに出来ず、このままでは飛行場防衛すらままならないと准将は確信していた。

その予想は当たる。

午後八時、B-17の大編隊がコタバル飛行場の上空に姿を現したのだ。漆黒の雷雨の切れ間から、B-17は大量の爆弾を一気に投下した。

それを区切りに、第25軍と米陸軍が雪崩込み、飛行場の敵兵は恐れ戦いて敗走し、大量の輸送車両群が軒を連ねて敵兵を大急ぎで乗せ、撤退を始めた。

その刹那、B-17編隊の爆撃が飛行場の貯蔵燃料タンクに直撃した。

——とてつもない轟音と、巨大な深紅の火柱が上空に立ち昇る。

漆黒の雲に覆われた飛行場の端片が、地獄の猛火に包まれて不気味に赤く染まり、太陽の如く飛行場を赤々と照らした。

火柱が為、周辺の建物は烈火に包まれて崩落する。

一向に降り止まない鉄砲水と火柱から溢れ出す黒い煤が地上を覆いつくす中、第25軍の戦車隊が鈍い音を放ちながら滑走路を爆進し、徘徊する敵兵を蹴り殺した。

嶋澤二等兵はその後が続いて突撃する。逃亡を図る印兵を三八式歩兵銃に取り付けた三十年式銃剣でそのはらわたを突き刺し、止めを刺す。背後で九七式7.7mm重機関銃が咆哮を立て、絶叫が迸った。火柱から飛行場の各所で誘爆が起る中、戦闘は続く。

1941年12月29日Am01:42

コタバル飛行場は日米上陸部隊により制圧された。

英国陸軍歩兵第8旅団が南部へと敗走を続ける中での勝利である。

ずぶ濡れになった嶋澤に黒い煤が纏わり付いて、顔が真っ黒になつていた。

嶋澤が喜びから辺りを見渡しても、同じような人間が多数を占め、全員が泥に顔をつ込み、その後に木炭の灰を擦り付けたかのような顔になっていた。

飛行場では、豪雨を降らした雲が消え、今もなお炎が燃え続けている。黒煙が漆黒の雲に代わって飛行場の上空を停滞し続けている。「よくやったぞ！」

山下中將は歡喜を上げ、兵士達を賞賛した。

日米共に、上陸部隊の損失率は僅か数%に留まっており、その成果は大本営や米軍側にも高く評価される所となった。飛行場の損害は著しいものであったが、それでもコタバルの英軍戦力を大きく削いだ為、目標は完遂したといって良かった。

午前六時。

コタバル市内に華々しく入城した日米上陸部隊は旭日旗と星条旗、そして張り裂けんばかりの歡声によって地元民に受け入れられ、この上陸作戦は成功に終わるのだった。

——コタバル陥落す。

コタバル攻略戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

兵器紹介 1

▼『九九式航空輸送機』

九九式航空輸送機は大日本帝国陸軍によって開発された垂直離着陸（VTOL）輸送機だ。兵員展開の他、九七式軽装甲車や九五式軽戦車といった軽装甲車両の空輸が可能。また、九八式12・7mm機関砲といった強力な武装が施されており、軽装甲車や兵員を降ろしてからも戦闘地域の空から地上友軍の近接航空支援が可能で、基となるイーグル機よりも一部能力が優れている。

陸軍司令官の多くはこの機に乗り、空からの指揮を行う事が多い。

○仕様

- ・全長 18 m
- ・ローター直径 12 m
- ・航行距離 700 キロ
- ・最高積載量 8 t
- ・エンジン 雷電（雷撃型改良発動機）型ガスタービンエンジン
- ・最高速度
- （通常時） 300 キロ
- （ヘリモード時） 500 キロ

▼『九九式艦上ジェット戦闘機（神風）』

九九式艦上ジェット戦闘機は大日本帝国海軍の主力ジェット戦闘機だ。その構造は米軍機『ライトニング』を基とし、三菱重工業によって生産されている。国製雷撃エンジンと軽量素材により、機体の軽量化に成功している。

世界初の実用型ガトリング砲を搭載したジェット機であり、九八式20mm航空機関砲が機体底部に搭載されており、絶大な火力を誇っている。しかし、このガトリング砲が重りとなる為、神風両翼は湾曲した構造となっており、この構造によって巨大なエンジンとガトリング砲の重みを分散化させている。

○仕様

- ・全長 13m
- ・翼面積 35?
- ・航行距離 500キロ
- ・エンジン 雷撃型ターボジェットエンジン
- ・最高速度 920キロ
- ・固定兵装 九八式20mm航空機関砲

▼『エジソンエアロ・ライトニング』

エジソンエアロ・ライトニングはアメリカ合衆国の航空機メーカー『エジソン・エアロ社』が開発した世界初の実用型ジェット戦闘機だ。1930年代に製造が開始されたライトニングは、現在200機以上が太平洋、本国、東南アジア等に配備されており、ジェット機の半数のシェアを占めている。

武装は機関銃のみだが、ロケット弾といった多彩な副装備を誇り、機体強度は日本・英国機よりも強いが、その速度は両機に劣っている。

○仕様

- ・全長 11.4m
- ・翼面積 25?
- ・航行距離 800キロ

- ・エンジン 雷撃型ターボジェットエンジン
- ・最高速度 900キロ
- ・固定武装 イスパノ・スイザHS・404

▼『エジソンエアロ・イーグル』

エジソンエアロ・イーグルは米陸軍の兵員輸送型垂直離着陸（VTOL）機だ。世界初の実用型兵員輸送機で、十数名の兵員輸送を得意とし、速やかな輸送が可能である。

通常時は兵員輸送のみだが、M3榴弾砲や小型軽装甲車の輸送も可能で、輸送・地上制圧・航空支援といったあらゆるタイプの作戦においてその実力を発揮する。

○仕様

- ・全長 17m
- ・ローター直径 12m
- ・航行距離 800キロ
- ・最高積載量 5t
- ・エンジン 雷撃型ガスタービンエンジン
- ・最高速度
- （通常時） 350キロ
- （ヘリモード時） 550キロ

▼『グロスターサンダーボルト』

グロスターサンダーボルトは英海空軍の主力ジェット戦闘機だ。ライトニングを基に開発されたサンダーボルトは、軽量素材や構造の変化が行われており、速度はライトニングを若干越えている。

しかし、装甲の軽量の結果として防御面の性能が低下しており、機銃攻撃などには多少弱い部分がある。

○仕様

- ・全長 12 m
- ・翼面積 26.7?
- ・航行距離 900 キロ
- ・エンジン 雷撃型 MK. ? ターボジェットエンジン
- ・最高速度 1000 キロ
- ・固定兵装 イスパノ・スイザ HS. 404

兵器紹介1（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ジットラ・ライン

1941年12月30日

コタバル上陸作戦の一方、タイ王国領内に位置するシンゴラに上陸した日本陸軍第5師団は、中立的な形を取るタイの働きにより侵攻速度が低下していたが、日米間との話し合いの結果、29日の午後頃に日本軍の通過が許され、無事にタイ国内を前進していった。

佐伯搜索部隊に別機動隊を加えた佐伯挺身隊として前進する中、タイ国境近くに到着すると、英軍の砲撃が激しくなった。その眼前には、英軍が構築した防衛陣地『ジットラ・ライン』が映った。

起伏の激しい地形、強固な陣営、多数の兵員からジットラ・ラインは英軍司令部の中では、日米軍には突破できないと判断していたが、史実においてはいとも簡単に突破されてしまう。

史実と同じく、ここでもその強固な陣営の突破が試みられていた。

1941年12月31日 Am 01:00

ジットラ南部の上空には、日本陸軍の『九九式航空輸送機』が旋回しながら飛行を続けていた。ヘリコプターは大きく傾き、想像以上の速さで漆黒の空を突き進んでいく。

輸送機内部では、機壁に付けられた輪型の取っ手を握り締めながら、眼下に広がる鬱蒼としたジャングルに目を瞠る佐伯静雄大佐の姿があった。佐伯大佐の隣には、機内をにわかには照らす白熱電球から放たれる光に輝く九八式12.7mm機関砲の鋭い砲身が、左右のプロペラから響く耳をつんざくような轟音にその身体を震わせている。

「閣下、挺身部隊準備完了しました」

付近のベンチに座っていた通信兵が、背負っていた重厚な無線機

のハンドマイクを掲げながら佐伯大佐に告げた。

「了解。攻撃開始を伝える」

佐伯大佐は腰元に左手を置きながら言った。通信兵はすぐさま無線機越しに攻撃開始の合図を高らかに伝えていった。

すると、ヘリは突然機体を激しく揺さぶり、その重厚な機体を湾曲させながらジャングルの奥深くへと羽ばたいていく。佐伯大佐は取っ手にしがみ付き、ドアガナーの兵士は九八式12・7mm機関砲の銃身にもたれかかり、激しい衝撃から身を支えた。

九九式航空輸送機は大きく翼を羽ばたかせ進む。

機体に立つ佐伯の眼の先には、宙に浮かぶようにして進む第3中隊の九七式中戦車と、その砲塔から放たれる深紅の火球が映りこんでいた。

ジットラ・ラインが炎に包まれる中、漆黒の空に厄介な連中が姿を露見する。

「くそッ……。バッファローめ……」

F2A-3——通称バッファローは、元々米国製の戦闘機であったが、英国が購入し改良したものである。マレー半島に多数配備されたバッファローは日本製の零戦や隼に大きく勝るだろうと英空軍は考えていたが、史実では経験と性能の両面において、敗北して多数が撃墜されている。

九九式航空輸送機は、眼前に迫るバッファロー編隊から距離を取らんと機体を大きく傾け、速度を上昇させる。パイロットは怯まずに低空飛行を開始し、機体はジャングルすれすれの地域を飛び始めた。

「奴を落とせるか？」佐伯大佐は、漆黒の空に浮かぶバッファローを指差しながらドアガナーの兵士に尋ねた。

「いや……はい……恐らくではありませんが……」

ドアガナーの兵士は不安げな声色で隣に立つ佐伯大佐に答えた。

現在、九九式航空輸送機の様子は、バッファローの最高速度同等にまで上昇しており、その気になればバッファローを追い抜く事さ

え夢ではなかった。固定兵装のドアガンたる九八式12・7mm機関砲の持つ絶大な火力を発揮出来れば、いくらかの敵に対処出来る。しかし、実質戦闘機をヘリが撃ち落とすといった話は聞いた事が無く、ミサイルといった誘導兵器を搭載していない輸送機であれば、なおさら問題だ。

唯一の頼みの綱と言えば、近辺に接近中の日本陸軍戦闘機『隼』編隊からの航空支援であるが、通信状態が不安定なのか、通信兵の背負う重厚な無線機からは、鈍いさざめきしか聴こえなかった。

ドアガナーの兵士、新川軍曹は九八式12・7mm機関砲の砲身に焦点を合わせた。胃もたれと軽い耳鳴りが体を蝕む中、新川は漆黒の空に浮かび上がる数機のバツファロー戦闘機を見据える。

「視界不良……銃器に異常無し」

新川はそう呟きながら、機関砲をバツファローの鋼鉄の体躯に合わせる。

刹那、照明弾が天高くに立ち昇り、漆黒の空に一つの太陽が浮かんだ。新川の眼下では、九七式中戦車の主砲から放たれる火球と、その周りをまるで衛星の如く纏わり付きながら地上すれすれを滑空する弾丸の光が迸っており、その先には紅蓮に染まったジツトラ・ラインの防衛陣があった。

照明弾の光から、バツファローの姿を新川は完全に視認出来た。新川の指先は痺れを切らし、今か今かと咆哮の時を待っている。

——耳をつんざく轟音がジャングルの空に響き渡る。

弾丸は煌々と輝きを放ちつつ、夜空へと満天の流星を降りしきらせた。バツファローは堪らず空域から旋回して迂回する。

新川の任務はここまでだった。あくまでも撃墜が主任務ではなく、一時的牽制が掃射の目的である。この機に乗じ、隼編隊は空域に侵入していた。そもそも、機関砲であろううなかるうともヘリが戦闘機を撃ち落とすというのは無理があったのだ。

大きく傾く機体到新川の腰元に巻き付けられたハーネスが強く締

まる。

体勢を崩した新川は機関砲に身を置き、衝撃からの転倒を防いだ。
「よくやったぞ軍曹。勲章ものだよ」

隣で見据え続けていた佐伯大佐は、新川軍曹の顔を一瞥しながら告げた。新川は嬉しさと安堵の表情を浮かべながら、機関砲に寄りかかり、黒く染まる空を凝視しながら喘いでいた。

開かれたドアからは、バツファローが漆黒の空で煌々と深紅の光に包まれるのが見て取れ、背後には隼編隊が接近し、12・7mm機関砲から無数の弾丸を放っているのが確認出来た。

1941年12月31日Am11:47
ジットラ・ライン崩壊す。

ジットラ・ライン（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

マレー沖海戦

1942年1月2日Am6:19

マレー半島東沖

大日本海軍第一航空艦隊は、英海軍Z部隊による猛攻を受けていた。上空にはバツファローとサンダーボルトが展開し、雷撃を護衛任務に就く第二艦隊の金剛に加える。

サンダーボルトから射出された魚雷は深き海洋にさざ波を立たせながら進み、金剛の鋼鉄の巨軀すれすれを駆け抜ける。奇襲に成功していた英国空軍の攻撃により、金剛の右舷近辺には戦艦『棒名』の沈み行く姿が見て取れ、煌々と紅蓮の炎が艦橋を燃やし続けた。

空母翔鶴。

緩んだ軍帽を脱ぎ取り、汗で濡れた頭部を南雲中将は刺繍された布巾で拭い取った。空を照らす曙光は温かなぬくもりを翔鶴の艦体に照らし、甲板上に当たった光は煌々と輝き、神風の整備を担う小坂軍曹の持つレンチを照らした。小坂が機体の底部に体を入れるごとに、照らされていた手は輝きを失い、光の色合いが徐々に変わっていく。

まもなく轟音が響き、小坂は機体の下から抜き出た。

暗黒の世界から光の世界へと戻った小坂は汗が背中を流れ落ちるのを感じた。レンチを握る右手が痛むが、残りの全神経は、整備された神風に向けられていた。

——大丈夫だといいが……。

ターボジェットの不具合から事故の続出が度々起こっている神風は、まさに博打機——とも言えた。実際、英軍より攻撃されて撃墜

されるよりも、機体の事故で墜落する機の方が多かったりするのだ。
小坂はしゃがみ込み、工具箱を手取る。背後では、神風から放たれる生暖かい風と、ターボジェットから響き渡る絶え間無き轟音が立っていた。小坂は工具箱の留め金を外し、中にレンチをしまいこんだ。

「準備完了か？小坂軍曹」

唐突にも背後から野太い声が響き、小坂は振り返る。

そこには、神風のパイロット山川清二大尉が立っていた。飛行帽を握り締め、笑みを浮かべながら尋ねる。

「既に完了していますよ大尉」

「そうか。空の具合は？」

小坂大尉は空を見据えつつ、かぶりを振った。

「悪いですね。今にでも日が消えると思いますよ」

そう確信したのは、翔鶴の彼方。水平線沿いに浮かぶ漆黒の積乱雲が見えた為だった。強い風が吹き始め、小坂は肌にそれを感じ入っていた。少なくとも、スコールにはなりそうだ。

山川は再度、小坂に何かを伝えようとしたが、口籠ってそのまま神風へと歩み行った。

第二分隊の隊長として、山川は先頭に立って飛行を続けていた。
九九式ジェット戦闘機——神風は、前方から吹き荒れる疾風を纏いつつ、突っ切る。ただそうするしかないが為。母艦たる翔鶴を守る為にだ。

キャノピー越しに、ポツリという鈍い衝撃音が響く。

そんなばかな……。もう降り始めたのか……。

頭上を浮遊する積乱雲から落ちる雨粒は、しだいにその数と速度を増して神風に襲い掛かった。風は強さを増しており、疾風の渋い音が単調に響く。

「全機、攻撃用意」

前方に見え隠れするバッファロー編隊。それが見えた為、山川は警戒を始めた。それ以外には、眼下の海洋を浮標するプリンス・オブ・ウェールズとレパルス。そして多数の巡洋艦のみが見えていた。味方本隊とは距離を取っている為、ここからは自分達の最大限の力を発揮しなければならない。

山川は大きく目を見開き、息を切らしながら、銃器の照準をバッファローに合わせる。豪雨と疾風吹き荒れる中、九八式20mm機関砲の口が開き、咆哮を放った。

一機……。また一機とバッファローが堕ちていく。

口火の切られた20mm機関砲は轟きを上げ、激しい掃射を与え続ける。英軍機の未来が断ち切られていく中、神風は咆哮しながら空を飛ぶ。

「くそッ！サンダーボルトか」

バッファローが華々しく散る中を、数十機の英軍ジェット機——サンダーボルトが駆け抜ける。つややかに光る銀翼はまるで剃刀の刃が如く、大空を切り裂いて突き進む。

山川の瞳は凍り付く。「全機、戦闘用意」

翔鶴の甲板上から、小坂軍曹は怯えた目で空を見据えていた。時々落ちて行くバッファローの姿が見えると、自然に小坂の顔に笑みが浮かび、脈打ちながら心臓が激しく鼓動を打ち始める。

「よし、いいぞやれ！」

空を切り裂く20mm機関砲の弾丸が見えた時、唐突にそれが起こった。

突然、視界が水の壁に阻まれ、凄まじい水飛沫が甲板上に降り注ぎ、海水が甲板に流れ込む。水壁が消えた時、水平線の彼方にプリンス・オブ・ウェールズの巨軀が姿を現す。その横には、レパルスが展開していた。

「速力25ノット。距離2万メートル。撃て!!」
艦長伊集院の叫び声とともに、金剛の35・6cm砲が咆哮を上げる。

砲弾は紺碧の海洋を滑空し、英海軍の新鋭戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』の補修された艦橋に再度攻撃を加えた。

伊集院大佐は拳を固く握り締め、ガッツポーズを上げる。35・6cm砲は休む間も無く、砲撃を続行した。

砲撃を受けるプリンス・オブ・ウェールズの頭上には、九九式艦上爆撃機が飛行し、大量の爆弾を与える。爆発は連鎖を巻き起こし、その規模をどんどんと膨らませていった。

王太子は悶絶し、絶叫する。

プリンス・オブ・ウェールズは魚雷4本、爆弾3発が直撃し、金剛による砲撃による甚大な被害も被っていた。天高く立ち昇る黒煙は浮標する積乱雲に吸い込まれて、消え去った。

これまでに日本軍の力を見くびっていた司令長官。トーマス・フィリップス中將は、その結果として狂い始めた歯車によって構築された運命という名の末路を進む事になる。砲撃を受けた艦橋の中でフィリップス中將は背後に倒れこむリーチ艦長の体を背負い、艦橋を下っていく。

やがて、艦橋から脱出したフィリップス中將の眼前に、救助の為に左舷に横付けされた駆逐艦ジュピターの姿が現れた。

ジュピターから救出の為に乗り込んできた1人の兵士が呆然と立ち尽くすフィリップス中將の姿を見つけ、大急ぎで歩み寄る。背中にはリーチ艦長が朦朧とした様子で訳の分からない声を上げていた。

「閣下、代わりに……」

兵士がリーチ艦長を背負おうと背後に回り込もうとした瞬間、焼き爛れたリーチの顔がにわかに上がり、震える右手を上げて兵士を止めた。

「いいんだ……艦と運命を共にしたいんだよ」

リーチ艦長は血の混じった胆を艦上に吐き散らしながら、弱々し

く告げた。

「いや……その……しかし……」

「やめておいてやれ」

フィリップス中將はリーチを降ろし、兵士に告げた。

「……では中將。ジュピターに――」

兵士がフィリップス中將にそう言おうとした瞬間、中將は手を振り言葉を遮った。

「ノーサンキュー」

それが最期の言葉。

兵士の脳裏に焼き付いたその言葉は、これからの2人の運命を表していた。

空の上。

そこでは、激しい空中戦が繰り広げられていた。

サンダーボルトが強烈な疾風を纏いながら神風の背後を取り、イスポノ・スイザHS・404で弾丸を叩きつける。

「回避行動を取れ！」

英軍機に圧倒されつつある神風編隊を、何とか山川は救いたかった。

弾丸飛び交う空域を、深緑の翼を羽ばたかせながら凄まじい速さで突き進む。背後にはサンダーボルト2機。前方にはバッファロー1機が迫り来る。それを何とか避けようと、山川は操縦桿を大きく引き上げて停滞する積乱雲の中に突っ込んでいった。

背後からは、訳も分からず攻撃するサンダーボルトから放たれた銃弾が飛び交うが、まったく的外れのそれは問題ではなかった。むしろ積乱雲の中を突っ切るとというのが問題であった。

神風が風に煽られ、機体が軋みを立てる。

後ろにびったりと纏わり付いていたサンダーボルトは既に姿を消しており、山川は大きく右に旋回して雲から脱出した。

「おいおい……嘘だろ……」

山川のすぐ前に、サンダーボルトの右翼が姿を見せる。目と鼻の先に面していたサンダーボルトを前に、山川は操縦桿を大きく引き上げた。底部がサンダーボルトのキャノピーにかすり、火花と轟音が飛び散る。

神風は大きく左に旋回し、サンダーボルトの背後に回り込んだ。それからすぐに山川は20mm機関砲を咆哮させ、無数の銃弾で敵機の機体に幾つもの穴を開けた。サンダーボルトのターボジェットエンジンから黒煙が立ち昇り、爆発が巻き起こる。

サンダーボルトが堕ちていく。

その下には、巡洋戦艦レパルスが居座っていた。サンダーボルトは深紅の炎に包まれながら、猛スピードで堕ちていく。

刹那、激しい衝撃がレパルスから立ち上がり、黒煙が空へと上がる。

それは、魚雷による攻撃の結果だった。

レパルスが傷付いている中で、サンダーボルトは速度を増して堕ち続けた。訳も分からぬまま、レパルスの艦橋に直撃した。

轟音が響くと同時に、レパルスは沈み行く。

背後に沈む——プリンス・オブ・ウェールズとともに。

1942年1月2日Am8:33

巡洋戦艦『レパルス』及び戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』

沈没。

戦死 フィリップス中将、リーチ大佐。

マレー沖海戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ジョホール・バル侵攻

1942年1月24日 pm 13:27

マレー軍最高司令官のアーサー・パーシヴァル中将の命により、マレー半島の英印軍全隊が撤退を開始した。英印軍は、橋梁の爆破や道路の寸断を始め、撤退の時間稼ぎを続けていたが、日米軍はイーグル兵員輸送機や、九九式航空輸送機の輸送能力に対しては無力で、近衛師団や第5師団は輸送機をフル活用し、輸送可能である九七式軽装甲車や九五式軽戦車を主体とし、自転車部隊を用いた機械化師団として再編成され、撤退を続ける英印軍をいち早く追うのだった。

退却を図る英印軍を追い詰める最大の行動は、ジョホール・バル強襲だ。

第5師団と近衛師団は、英印軍の撤退を足止めし、シンガポールへの侵攻ルートとなる『コーズウェー』爆破を阻止すれば、史実以上に迅速なシンガポール侵攻が可能となる。

その為、両師団は大胆かつ合理的な作戦展開を進めなくてはならなかった。その一つとなるのが、米海軍の艦隊による艦砲射撃だ。作戦遂行の為、ジョホール海峡には、米海軍第3艦隊の戦艦『カリフォルニア』と多数の駆逐艦が展開し、作戦支援に務める。

時は尽きていく。

ジョホール・バル市内では、マレー半島各所から撤退して来た英印軍部隊が、着々と撤退準備を進めていた。装甲車と戦車が轟きを立て、兵士達の足音が地面を揺らす。

シンガポールの司令部からは、『撤退』のみが打電されてくるのみだ。

パーシヴァル中將はようやく事態の深刻さに気付き、行動に移したものの、末端部まで伝わる事も無く、それまでの間は混沌の時が続いていた。

多くの兵が意気消沈しているのが、見て取れた。

——咆哮轟き、火柱が立ち上がる。

戦艦カリフォルニアの35・6cm砲が轟きを上げ、乾いた砲撃音と同時に砲弾を発射。そして、全てが吹き飛んだ。

一度、市内の上空には紅蓮の玉が舞い上がり、不気味な音を立てながら進んでくるB-17の大編隊に対抗する。その近くに居た護衛機ライトニングは猛スピードで空を切り裂きながらに進み、ジョホール・バルへと一気に急降下した。

黒煙と紅蓮の炎、漆黒の点が空を覆いつくす。

ジョホール・バルは今や、戦場となり変わっていた。

近衛師団の師団長である西村琢磨中將は、空から部隊を指揮していた。

九九式航空輸送機の大編隊がジョホール・バル市内の上空を低空飛行し、ファストロープ降下で次々と兵士が降りて行く。やがて大勢の兵員で埋まった市街地では、無数の銃弾が飛び交うようになった。

その降下部隊の一員。三好二等兵は、西村中將を乗せた九九式航空機の姿を見据えつつ、三八式歩兵銃を高く掲げながら市街地を進撃していた。

「三時の方向に敵兵！」

分隊の仲間が絶叫する中、三好が銃身を右へと傾けると、その場は騒然とした。

突如として轟音が響き渡り、九九式航空輸送機の九八式12・7mm機関砲を用いたドアガナーが、激しい機銃掃射を敵兵の隠れる土嚢へと浴びせ掛けたのだ。砂煙が立ち込め、土嚢がゴロゴロと崩

れていった。

九九式航空輸送機を用いた空からの近接航空支援は、日本陸軍によって新たに確立された戦術の一つだ。最大の用途は、重厚な建物に隠れる敵兵や、地上に展開する敵軽装甲車への攻撃で、その成果は日露戦争時から日本海軍によって証明されている。一刻を争う白兵戦において、戦闘機や重砲による攻撃は必ずしも敵勢力を削ぐ要因になるのは難しかったが、VTOL機の普及はそれらの問題を解決した。誘導兵器が完全に確立されていないこの世界においては、なおさらである。

三好が航空支援に感謝の意を述べる中で、唐突にも空に一つの点が姿を現す。

やがてその点は大きさを増し、どんどんと接近する様子が三好の眼から見て取れた。

——ライトニング。

焦げた臭いを放ちながら、米海軍主力機が迫りきていた。友軍機ではあったので、三好はまったく気にしないようにしようと思っていたが、その異様な高度には疑念を抱いていた。

ライトニングが空を駆け抜け、激しい疾風が三好達と空を旋回する西村中將を乗せた九九式航空輸送機に襲い掛かった。輸送機は体勢を崩して、空を無造作に旋回していた。

——刹那、火砲が九九式輸送機を襲う。

「しがみ付け！落ちるぞおおおおッ！！」

西村中將の甲高い声と同時に、右翼のターボシャフトが鈍い衝撃音を放ち、炎上する。

戦慄した搭乗員達は慌てふためきながら、掴める所になんとか手を伸ばして死に物狂いでしがみ付いた。西村中將は苦悶に顔を歪め、歯を食い縛った。

パイロットが固定された操縦桿に手を伸ばしても、機体は安定しなかった。「くそッ！上がれ上がれ！」

狂った衛星のようにぐるぐると回転する九九式航空輸送機は、身も凍るようなおぞましい轟音を立てながら、落ちていく……。

三好の耳に、戦慄の音が響き渡った。

ジョホール・バル侵攻（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

西村中将救出作戦

……眩い光が重く閉まる目蓋から漏れて視界を明るく照らす。

西村中将は生きている喜びを噛み締めながら、冷徹たる床から身を起こした。酷い耳鳴りと口元にこびり付く真紅の染みを除けば、いつもと変わらなかった。

起き上がった西村の眼前には、唐突にも身が湾曲した部下の姿が映りこんでいた。剃り上げられた後頭部のザラザラとする触覚を肌を感じつつ、紅蓮のローブにでも包まれたようにして、周りに赤い液体の海を造り出しながらも、その姿は極々自然体であった。……全治しそうに無い程湾曲し、崩壊し、心臓の鼓動が止まっている所を除けばだが……。

後悔と哀しみに満ちた西村の瞳から、一筋の涙が零れ落ちる。くぐもったうめき声を上げながらも、冷静沈着な風貌を形成しながら。「どこだ！」

茫洋たる蒼空。白塗りの建物。そして、凄惨たる九九式航空輸送機の骸を見据えながら、西村は叫ぶ。

西村は腰元へと手を伸ばし、ブローニング拳銃の鋭い銃口を様々な方向へと向ける。

突如、身を襲う寒気に西村の体は硬直した。右わき腹から滴る温もりのこもる液体が、軍服に赤々とした染みを形成していた。

クソッ……。これはまずいな……。

悶え始める腹部に違和感を覚えつつ、震える足を叩き起こして歩を進めた。漏れ出した血が太ももへと滴り落ちて、体毛を深く染める。両手でブローニング拳銃を構えながら、西村は背後から感じる熱気に妙な胸騒ぎを覚えた。

後ろを振り返ると、そこには折れたターボシャフトが舗装されていない地面に突き刺さっていた。

ターボシャフトをまじまじと見据える西村の目に――異質な光景

が映った。

燃料が漏れているのか？

その鋼鉄の体躯より漏れ出す漆黒の血液——航空揮発油——またの名を航空用ガソリン——が、地面に黒い点を浮かび上がらせていた。

元から着色されているガソリンは、不気味な漆黒の体を震わせながら、地面に一筋の流れを形成し、崩れた機体の胴元の下を進み、もう一つのターボシャフトへと向かっている。

そのターボシャフトからは——炎が立ち込めていた。

1942年1月24日 pm 14:51

溝上大尉率いる分隊は、西村中將を乗せた九九式航空輸送機が、敵軍の対空火砲によって撃墜された事を実際に見ていた。戦慄の表情を崩さない三好二等兵は、誰よりも衝撃を感じ、呆然としている。

「しつかりしろ！三好」

溝上は言い、三好の肩に手を置いた。それでもしないと、次の行動に進めない。

三好は我に帰って周りをきよろきよろと見渡しながら、両手に握られた三八式歩兵銃の銃身を振り回す。

「救出に行くぞ。生存者が居ればいいがな……」

溝上少尉の背中には、不安からの風貌が漂っていた。研ぎ澄まされた眼で辺りを見渡しつつ、墜落現場と思われる地点を探す。それはすぐに見つかった。空に上がる黄土の煙と異様な黒煙が、のろしが如く空へと駆け上っているのだ。

溝上を先頭に、三好と別部隊を含んだ多数の兵士がついて行った。民家と民家の間。細い裏路地を重厚な装備を身に着けながら突き進んでいく。その総重量はゆうに3〜40キロを越えている。常に金属の擦れるような音が響き、遠くからは艦砲射撃の咆哮が微かに三好達の耳に入った。

20メートルを進んだ地点で、遂に敵兵との戦闘が始まった。細

い路地を不利と考えた溝上は民家の裏手、寂れたドアを足で蹴り飛ばして中へと駆け込んだ。

「全員、注意しつつ入れ！」

言われるがまま、三好は中へと慌てながら入った。窓から敵の銃弾が潜り込み、味方の兵士の頭を吹き飛ばす。

激しい銃撃は止まぬかに思われたが、一瞬の内に止まった。敵兵が一気に銃弾を装填しているのか、それとも罨か。そんな事を考えずに、いくらかの兵士が窓から三八式歩兵銃の長い銃身を突き出した。そして、瞬時に弾丸が放たれ、敵兵の体に被弾した。

絶叫が轟く。

三好が姿勢を低くしながら頭を上げると、窓から慌てて逃げる印軍兵の姿が映り込んだ。印兵は敵とは言えない程弱かったが、それはあくまでも英軍によって利用されているからの事で、英兵の代理として死ぬなんて真っ平御免と逃げたのだろう。

溝上はその頭を上げ、立ち上がった。銃弾の止んだ静寂の外界へと足を踏み入れ、外の様子を考察する。

「もういいぞ」

溝上の声を聞き、兵士達から安堵の息が漏れ出した。もちろん、三好も例外では無い。

分隊は再び隊列を組み直し、行進を再開した。

突然響いた銃声に、西村は神経を過敏にしながら周りを見渡した。激しい銃撃音は既に止まっていたが、同時に甲高い声が轟く。耳鳴りのせいか、それが日本語であるかはいまいち確認出来なかった。とにかく逃げなくては……。

西村は右脚を引き摺りながら、度々後ろを振り向きながら逃げ始めた。感情では負け犬——弱虫とは思っているものの、本能は“逃げろ”と叫んでいる。

「はあはあ……くそッ……」

喘ぎ息を立てながら、西村が逃げるその時、唐突にもそれは起くる。静謐の世界に突然爆音が響き渡り、鉄片が宙を舞いながら突進したのだ。それは、右翼のターボシャフトから漏れたガソリンが、左翼のターボシャフトの炎に引火した為だった。激しい轟音と熱風が吹き乱れ、思わず西村は地面に突っ伏した。立ち上がり振り返ると、煌々と燃え盛る紅蓮の炎が部下の骸を燃やしていた。

今や、九九式航空輸送機の前形は崩れ落ちている。

西村はこれに不安を感じていたが、さらに不安な物事を覚えていた。この爆発で、敵に気付かれたかも知れないのだ。その不安は的中し、多数の足音が迫り来る。

クソッ……ここまでなのか？

西村の意識は果てし無い暗闇に包まれたが如く、消沈する。やがて、手に握られたブローニング拳銃の銃口がにわかではあるが――自身の頭に近付いていた。

唐突にも響く爆発音に、三好は驚愕した。こんな音を聞いたのは初めてで、嫌な感触がにわかに胸へと浸透していく。

溝上大尉の甲高い声とともに、分隊の足音は激しくなった。カシヤカシヤと金属の擦れる音が大きくなり、足音の重みも変わっていた。そして、その音は進む事に増していくのだ。

「もうすぐだ！」

溝上大尉は鋭い直感から事態の収束が近い事を感じていた。

やがて三好の眼前に、紅蓮の炎と漆黒の巨大な塊が映りこんだ。

「中将！何処ですか？」

溝上は胸を張り上げながら絶叫に近い声で言った。比較的広いその広場は、舗装されていない民家に囲まれた一種の空き地のような場所だった。漆黒の塊はそのおぼろげな輪郭から日本陸軍の九九式航空輸送機である事が確認出来る。

その塊——のすぐ後ろから、一つの人影が飛び出ていた。
「中将ですか？」
溝上が近付くと、その正体が露になる。

——それは、変形した焼死体だった。

西村中将救出作戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

足跡の先

1942年1月24日 pm 15:10

溝上大尉は、地面に横たわる湾曲した焼死体に目を瞠っていた。

顔は身元の分からない程焼け爛れており、それが誰であるか知る者は皆無であろう。

「大尉！これを……」

唐突に響いた三好の言葉に身をひるがえすと、そこにはある痕跡がくつきりと映り込んできた。

足跡——それは、重要な手がかり。

誰とも分らないものであり、当初は逃げた印兵のものと考えられたが、溝上は逃げたルートや、その足跡が日本陸軍の軍靴のものに近い事から、それが九九式航空輸送機搭乗員の誰かだと考えられた。

ただ一つ、心配な点があった。

その足跡の右側が、斜めになっていたのだ。恐らく、それは足跡の主が右脚に負傷を負っている為に引き摺った結果だと考えられた。「なんともまずいな……」穏やかであつた溝上の声は、こわばっていた。

生存者が負傷している点を考えると、タイムリミットはそう長くなかった。だが、問題はそれだけではない。生存者を早期に戦闘地域から離脱させる為には九九式航空輸送機が存在が不可欠であったが、空域が危険という理由から、大半の機が離脱しており、航空支援の為に留まっている機体も燃料切れや弾薬補給を理由に撤退する可能性が高かった。分隊には無線機が用意されていた為、輸送機とのコンタクトは出来るものの、速やかに発見して連絡しなければ、徒歩での離脱を強いられる事となり、想像以上の危険が待っていると推測された。

足跡を辿っていく溝上分隊。

その先に待っていたのは、一つの大きな建物であった。

建物は英印軍の野戦病院で、既に捨てられていたようだった。重厚な白塗りのその建物は、壮厳たる姿を振り撒いていた。

「……突入準備」

三八式歩兵銃の銃身がにわかに高くなる。

紺碧の海がおぼろげに見える中、溝上の合図と同時に三好達は怒涛の如く、中へと入っていった。

最初に三好の目に入っただのは草臥れた毛布、モルヒネの空き瓶、そして血染めの包帯が一式。床には腐敗した人間の遺体がまるで物の如く床に重ねて置いてあった。

うつとおしく付き纏う八工の群れを手で払いながら進む三好の眼前に、奇妙な光景が映り込んだ。黄ばんだ包帯が道を形成するかの如く落ちている床。そして、床に付いている僅かな砂だった。それが意味するものを、三好は何となく理解しつつあった。

「誰かいるのか？」

三好は前に進み出て、不安そうな表情を浮かべながら言った。

——微かな足音が、タイルを震わせながら響く。

その足音の主は、三好達のすぐ近くに居た。スプリングの飛び出た簡易ベッドの先に立ち尽くす1人の男は、紛れも無い西村中将その人であった。中將は上半身裸の状態で、右わき腹部分には黄ばんだ包帯が巻きつけられており、それが新鮮な血液によって赤々と染められている。両腋には半ば割れている松葉杖が固く締められている。

「……やっと助けが来たか……」

西村中將は安堵の息を付きながら言った。

「そうです閣下。早速で申し訳ありませんが、ご足労頂けますか

？」

溝上は軍人らしいキビキビとした口調で告げた。

……三時半を回った頃か。

西村中将は、野戦病院の窓から空を見据えながら呟いた。鎮静剤としてモルヒネを服用し、痛みは少し引いてはいたが、血の止まりは悪かった。右わき腹からの出血は簡易的止血法ではそれ程の効果は無いようだ。

連絡を済ませた分隊は、救助の九九式航空輸送機が到着するまで、中将を護衛しながら建物に籠っていた。いつ敵に襲われてもおかしくない状況では、迂闊に動くのは危険である結果だ。

野戦病院の裏手には、使われていない庭園があった。そこには枯れた花々が細々と咲き誇っているようにして姿を保っていた。

突然、爆風が庭園に舞い上がり、花が吹き飛ぶ。

寂しげな庭園には、唐突にも九九式航空輸送機の鋼鉄の巨躯が立つており、ターボシャフトから生暖かい空気を噴出していた。

疾風吹き荒れる中、西村中将は溝上大尉と三好二等兵に支えられながら、姿勢を低くして庭園を駆け抜けた。ドアガナーの握る九八式12.7mm機関砲が庭園中に砲身を向けており、至近距離での生存はありえなかった。2人に支えられて西村は九九式航空輸送機に乗り込み、冷徹な椅子に腰を下ろした。わき腹がずきずきと痛み始め、血液が漏れ出す。

「よしいぞ！」

溝上の声とともに、九九式航空輸送機は徐々に上がっていく。

九九式航空輸送機が青空に舞い上がると、溝上は三好を率いて野戦病院内へと入っていった。

足跡の先（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

シンガポール上陸戦

1942年1月31日 pm 20:30

ジョホール王宮の大日本帝国陸軍第25軍戦闘司令所では、シンガポール侵攻への準備の為、最後の調整が進められていた。長机の周りにはオーク材の椅子が並べられ、そこに第5師団・第18師団・近衛師団の作戦参謀といった責任者の面々が腰を下ろしている。

その中央には、司令官である山下中将や先日の戦闘で負傷した西村中将が堂々たる風貌を表しながら座っていた。

「静粛に……」山下中将の渋い声と共に、一同は口を紡ぐ。

戦場とは思えない異質な静寂に包まれる中、山下中将は口を開き始めた。

「知つての通り、二月三日をもって我が軍はシンガポールへの侵攻を開始する。諸君には力の程を出してもらいたいのだ」

山下中将は端を切り、話を続ける。

「作戦は成功し、コースウェーは温存出来ている。しかし、我々はすぐにでも行動に出なければ、敵の思うつぼとなることを知っておいてもらいたい。迅速かつ的確な作戦を頼む」

離し終えた後、生まれた静謐の世界は、山下中将の後ろに立っていた参謀長の鈴木宗作中将の声とともに消え去った。

現在の陸軍地上戦力は約4万で、その戦力はシンガポールの英軍の半分程であった。戦車は150台、舟艇は100隻、重砲140門。そして九九式航空輸送機は130機にも及ぶ。

これらの戦力は、やはり英軍に比べると低かったが、米軍の戦力を合わせるとその数は優勢になっており、制空権確保も時間の問題であった。また、先日の海戦により、虎の子のプリンス・オブ・ウ

エールズやレパルドといった艦艇を多数失っている為、海洋戦力の面でも優位に立っていたものの、大口徑砲要塞陣地を排除しない限り、海軍艦艇の援護はともに受けられない。

その為、まずは要塞陣地を撃破する必要性があった。

1942年2月3日Am05:27

朝霜が降りるジョホール・バル。

第18師団に属し、先日近衛師団の西村中將を救出した三好は、対岸に見える光景をまじまじと見据えていた。軍砲兵の甲高い声と同時に、乾いた砲撃音が轟いて弾薬の刺激臭が鼻孔へと吸い込まれ、ムズムズした感触が頭を駆け抜ける。

「てえええええ！」

叫び、砲撃、叫び、砲撃。

準備砲撃と航空部隊の空爆が海岸を覆いつくす中で、空に九九式航空輸送機が舞い上がった。ターボシャフトの熱気が地面に降りかかり、風圧で砂埃が宙を舞う。搭乗している三好は、地上がほとんど遠のいていく光景に目を見開きながら、色々な所を見た。

コースウエー。

海峡を繋ぐその道路を、九七式軽戦車の車両群が通行していく。そして、その下では複数の艦艇が列を成してジョホール海峡を駆け抜けていった。

「三好、銃座に着け」

後ろに座っていた分隊長溝上の言葉を受け、三好は重い腰を上げて九八式12.7mm機関砲の元へと歩み寄った。ゴム樹脂と革で造られたハーネスを腰元に付けて床に留め金を掛け、銃器を構えながら外へと身を乗り出した。紺碧の海洋と無数の黒点、そして対岸を襲う砲撃の土煙に目を睨りつつ、警戒を継続する。

異常無し……かな。麻痺した意識の中では、日常茶飯事の光景ばかりであった。

「射撃用意！」

溝上大尉の甲高い声とともに、九八式12.7mm機関砲が唸りを上げた。遙か彼方の上空で、姿勢を整えられた九九式航空輸送機から数多の火球が地上へ降り注ぐ。

30秒後、機体は海岸上の窪んだ地点に着陸し、爆風を吹き荒らす。

「行け行け行けええええええええええ！」

合図と同時に、兵員の半数が銃弾飛び交う戦場へと降り立って行く。残った半数の中には三好と溝上の姿があり、三好は随時12.7mm機関砲の砲身を回しながら警戒しつつ、制圧射撃を繰り返した。トーチカに降り注ぐ機関砲射撃はコンクリートの壁を上手く突き破り、オーストラリアの機関銃兵を滅ぼした。

制圧射撃が続く中、九九式航空輸送機はゆっくりと空へ舞い上がった。機体は大きく右へと傾き、三次を縛るハーネスが腰元に食い込む。

微少の痛みを感じながら、三好は援護射撃を放ち続けた。この時、準備砲撃によって海岸上に展開するオーストラリア軍の大部分に甚大なダメージが出ていたものの、しぶとく生き残っていた。

空へ上がった九九式航空輸送機は、別分隊を降ろして次の地点へと向かっていた。爆音に包まれる海岸は無数の兵士と軽戦車が暴れている。海には機関銃掃射によって沈没した上陸用舟艇が多数浮標していた。

第一波。計3000人にも及ぶ兵士によって始まった上陸作戦は、好調とは言えないスタートだった。海岸上に設置された機関銃陣座による攻撃が舟艇を襲い、多くの兵を死に至らしめたのだ。

その部隊に属する三好二等兵は、今や千発以上にも及ぶ弾丸を海岸に撃ち続けていた。同乗していた分隊の兵士をそこで降ろし、班としての行動をスタートさせた。残った兵員は別の地点へと向かい、

そこから上陸を始める。

上空を駆け抜ける九九式航空輸送機は、唐突にも静止した。どうやら作戦ポイントに到着したようだ。と溝上は心の中で呟いた。

「降りるぞ！」

どんどんと機体が降りて行く中、機体のタイヤが完全に地面に接触し、鈍い衝撃を迸らせた。三好は機関砲に手を置きながらも、腰元に付けられたハーネスを解き放つ。そして、溝上の合図と同時に兵員が次々と降りて行った。

班全員が即時に匍匐体勢を取り、三八式歩兵銃を掲げる。後ろからは九九式航空輸送機の疾風が吹き荒れ、生暖かい空気が背中を走った。

「十二時の方向に制圧射撃！」

頭上を弾丸がかすめて行く中、三八式歩兵銃が轟きを放つ。

刹那、頭上を隼がかすめ、そのすぐ後ろにホーカータイフーンが纏わり付いて駆け抜けた。イスパノ・スイザHS・404から火球が放たれ、隼から炎が立ちあがった。

そして、隼が墜落する。

轟音と土煙を巻き上げながら、防衛陣座を蹴散らして隼が墜ち、爆炎が舞い上がる。そして、その背後に纏わっていたホーカータイフーンのエンジン音が無邪気にも響き渡りながら、朝霜を切り裂いていた。

激戦の続く中。対岸のジョホール王宮では、参謀長の鈴木中將がシンガポール島に目を向けて立っていた。その隣には、山下中將が立っている。

突然、対岸の空に光球が舞い上がり、煌々と輝きを放った。

「上陸成功の合図です！」鈴木中將は目を爛々と輝かせながら山下中將に告げた。その光球は信号弾で、第5・第18師団の上陸成功の合図だ。

「予想より早いな」

山下中將は感心した様子で言った。

信号弾はなおも輝き続け、シンガポール最初の勝利を証明し続けた。

シンガポール上陸戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ブキテマ高地の戦い

1942年2月3日 pm 23:05

第18師団作戦司令所。

上陸作戦成功後、師団長牟田口廉也中将の元に、1人の男が訪れた。

「失礼します」

唐突に現れたのは、作戦主任参謀の辻政信中佐だった。辻中佐の右脇には、一通の封筒が抱えられており、きつく封がなされていた。

「辻中佐。どうした？」

牟田口中将は呆然とした様子で言った。

「山下閣下より伝令です。これを……」

辻中佐はそう言いながら、右脇に抱えられた封筒を差し出した。牟田口中将は静かに頷くと、封を解いて中身を確認めた。中に入っていた書類を見るや否や、牟田口中将は難色を示し、口元が自然としかめた。

「僅か2日でブキテマ高地を制圧しろと？」

「そうです閣下。ご検討の程をよろしく……と山下閣下がおっしゃっております」

辻中佐の言葉を聞き、ますます牟田口中将の顔色が悪くなった。

「消耗が激しいこの状態では、この条件は厳し過ぎるぞ……」

不安と怒りが入り混じった声を聞き、辻中佐は一瞬たじろいたが、その体勢を戻した。早朝の上陸作戦により、師団は戦車十数両と将兵数百人を失っており、弾薬や燃料も少ないこの状況では、牟田口中将の返答は当たり前と言える所であった。

1942年2月5日 Am 02:01

攻撃3日目。

各主要陣地や飛行場。防衛線を突破した大日本帝国陸軍第25軍は、ついに『ブキテマ高地』へと足を踏み入れた。既に日米軍は制空権、英軍の弾薬や燃料。そして水源の掌握に成功しており、シンガポールにおける戦況は確実に日米側が優勢であった。

しかし、日米双方とも物資の不足が続いており、英軍の増援と物資が到着する前になんとしてもシンガポールを制圧する必要がある、その為にもブキテマ高地に侵攻し、市内への侵入を行う必要があった。

第18師団と第5師団と近衛師団。そして米国陸軍第1歩兵師団が侵攻を開始した。戦車隊を中心とし、イーグルと九九式航空輸送機による航空支援を受けつつ、高地を突き進む。

上陸作戦に参加していた三好は、溝上大尉率いる分隊に参加し、この作戦に務めていた。

漆黒の闇に包まれる高地を、三好は重々しい足取りで進んでいく……どこに敵が居るんだ？逃げたのか？

異様なまでの静寂に、三好は妙な胸騒ぎを感じていた。生まれてからこの上無い畏怖と不安が両手に表れ、自然と三八式歩兵銃が震えを上げた。重厚な戦車の駆動音が闇を切り裂き、闇間からおぼろげな赤い球体が2つ、姿を見せる。

進んでいる中、突然漆黒の空に火球が姿を現す。

それは、どんとどんと下へ下へと落ちていき、やがて地上に接する。

——唐突に響き渡る土煙。

月明りに照らされた高地に、爆発と凄惨たる絶叫が舞い上がる。

刹那、三好の身体に不気味なエネルギーのさざ波が押し寄せた。

「砲撃だあああああああ！」

誰が叫んだのか分からなかったが、それは事実として受け入れられた。兵士達は攻撃に逃げ惑い、パニックから見えない敵が居ると

思われる方向に銃弾を浴びせ掛けた。すぐに絶叫が響き渡るも、その現場には日本兵の遺体しか残っていない。

夜空には対空火砲が鮮やかな光を放ちながら突き進み、VTOL機を次々と墮としていった。砲撃はなおも続き、爆音と煙が舞い上がり続ける。

こうして、戦いの幕は上がった。

第5師団と第18師団。そして第1歩兵師団は逆境に立たされていた。

ブキテマ高地侵攻と同時に敵の砲撃の下にさらされ、身動きが取れなくなってしまったのだ。それは、英軍にとっては最後の防衛作戦であり、最終防衛ラインであった。

第5師団の三好二等兵は、その猛攻にさらされた歴史の証人として、砲火の中を姿勢を屈めて駆け抜けていた。既に友軍による反撃の砲火が英軍重砲陣地に行われていたが、敵戦力を削ぐのには多くの時間が必要である為、敵軍の砲撃は続行されている。

見えない敵との戦いも続く。

各所に展開する英軍兵は闇を隠れ蓑にし、師団への攻撃を行う。命中精度こそ悪かったが、物量では英軍の方が優勢であり、砲撃支援でも英軍が上手である。

とにかく第5師団と第18師団は、身の保持を優先しつつ、砲火の中を進むしかなかった。

戦闘開始から3時間。突如、砲撃が止む。

あまりにも唐突過ぎて、三好を含めた将兵達は呆気に取られて口をあぐりと開けた。

その中、第5師団の前方。ブキテマ高地の彼方に数人の人影が姿を現した。徐々に人影は三好の元へと近付いていき、その姿がはっ

きりと視認出来るようになる。

「誰だ！」

溝上大尉は三八式歩兵銃の銃身を掲げ、人影に構えた。

人影は慌てた様子で身振り手振りで抵抗の意志は無い事を伝え、純白の白旗を高地の空に高く掲げた為、溝上らは銃口を降ろし、その人影に近付いた。

その人影——英軍の使者は交戦の意志は無く、降伏する事を伝えた結果、そこで戦闘が終結した。

降伏の白旗は風にはためき、曙光を浴びて煌々と輝いていた。

フキテマ高地の戦い（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

シンガポール陥落（前書き）

総数11話に渡りましたが、ようやくマレー・シンガポール戦が終結します。

シンガポール陥落

1942年2月5日 pm 13:40

ブキテマ高地北方に位置するフォード自動車工場は、戦時とあつて通常業務を休止し、民間人は退去していた為、静寂に包まれていたが、今日は訳が違った。日本陸軍と米陸軍によって選り抜かれた交渉の場としての機能を十分に発揮しようとしているのだ。昼間の眩い光が雲間から差し込んで降り注ぐ中、英軍軍使の一行が工場へと到着する。

それは、英軍司令官のパーシヴァル中将、ニューギビン少将、そして通訳人が1人だ。ピシッと乾いた軍服に身を包み、一同整列をしながら工場内へと入っていく。

山下奉文、鈴木宗作、馬奈木敬信、杉田太一郎、ダグラス・マッカーサー。

工場内の一角。事務所に設置された交渉の場には、層々たる顔触れが集結していた。それはまるで太平洋方面に席を置く軍人の名士録を見ているかのようであり、英軍軍使一同は驚愕した。事務所内には重々しい空気が流動し、息の詰まるような惨状に陥っている。

「どうぞ……」

山本中将の言葉は背後に立つ通訳人によって変換され、パーシヴァルの耳に伝わる。

英軍軍使達は空けられたオーク材の椅子に座り、なんとか腰を落ち着けようと視線を下に反らしていた。山下中将とマッカーサー中将のいぶかしげな表情を見れば、誰でもそうしてしまうだろう。

「先刻、送られた軍使に渡した要求は見たかね？」

マッカーサーの言葉が静謐の部屋に反響しながら伝わる。

「ええ……一応ですがね」パーシヴァル中將は言葉を詰まらせながらも言った。

山下中將は足元に置いてあつた封筒を手に取り、卓上に滑らせながら置いてパーシヴァル中將の元へと送る。パーシヴァルはそれを確認しながら、正面に座る山下とマツカーサーの顔を見据えた。

「見た通り、具体的な降伏要求書だ。その要求の一つとして、まずは全兵士の武装解除をし、シンガポール及びマレー半島から全面撤退してもらいたい」

山下中將は軍人らしい鋭く尖つた口調で告げ、パーシヴァルを見据える。

「了解したが……これはあくまでも停戦のつもりなのだよ……」

パーシヴァル中將はかぶりを振りながら、目を閉じて言った。

そんな様子を見たマツカーサーは酷く興奮した様子で乱暴に椅子を押しつけ、唐突に立ちあがろうとしたが、隣に居た山下中將は手振りですそれを静止し、なんとかマツカーサーの怒りを抑え付けた。

「もう一度聞く……貴軍は降伏するんだな？」

山下中將は鈍く唸るような声色でパーシヴァルに告げる。

「一部の兵力の駐在を認めて貰いたい」

パーシヴァルの的を射ない発言に、山下とマツカーサーの怒りは頂点に達した。

「降伏の意思があるかを伝えて欲しいと言っているのが分からないのか？『イエス』か『ノー』で返答を」

山下中將の怒りに燃えた眼と畏怖感を覚えさせる声色に、パーシヴァルの心臓の鼓動が急速に速まり、異様な汗が噴き出してきていた。その隣には、怒れるマツカーサー——噴火寸前の火山が立ち尽くして鋭い眼光で睨み付けていた。

「イエス……兵力の駐在を求む」

パーシヴァル中將は渋々ながら、その言葉を漏らし、なんとかその場を落ち着かせた。

「了解。駐在は検討しよう」

1942年2月5日 pm 17:00

パーシヴァル中將が調書にサインし、停戦する。

こうして、南方方面における一局面の戦闘が終わりを告げた。

後、山下中將の「イエスカノーか」という発言は日米両国において、世間一般で流行語となるが、それが日本男児の誇りを示したと解釈する者も居れば、偏屈黄色人の戯言だと批判する者も居れば、恐喝的発言であり、やっている事はチンピラと変わらないと言う者も居た。特に、米国内では批判と誇張のタネとして、風刺絵や反戦記事のテーマとして多く使われた。

この停戦の背景には、英軍の物資不足や拠点の欠如が大きかったが、最も大きな要点となったのは、水の供給源を日米軍が確保した事にある。

しかし、この頃の日米軍は物資不足と対立関係の末、敗北寸前まで追い込まれていた。特に日米対立は大きく歴史に残される事となった。戦闘の大半は日本軍によって行われ、制圧拠点や撃破数も大きかったが、米軍の空爆や艦砲射撃といった支援が無ければ成功しない作戦も多くあり、双方が勝利宣言を掲げたいと、躍起になっていた。

特に、今回は初の南方戦線の勝利とだけあり、差別主義者たるマッカーサーは、絶対に二番手として日本に甘んじる気は更々なかったが、それが余計米軍の損失を増やし、日本軍の優位性を強調付けることとなった。

そして、今回の停戦交渉が行われるが、その中心となったのは、日本軍であった。

少なくとも、それが対英戦争における内側世界での日本軍初の勝利であった。

シンガポール陥落（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

長達の悩み事

1942年2月6日

ダウニング街10番地

首相執務室では、チャーチル首相が普段通りの執務をこなしていた。しかし、その顔色は思わしくなく、気味の悪い位落ち込んでいるようだった。

その理由にあるのは、南方戦線の大敗であった。

シンガポールを日米軍によって占領された為、南方での頑強な基盤が崩れつつあり、支えるだけで精一杯の状態になると予測されている。また、虎の子のプリンス・オブ・ウェールズといった艦艇を失った事により、国内における内閣支持率も低迷し、英軍内の士気も低下しつつあった。

このままでは英国は失意の淵に立たされる事になるであろう……。キューバ産の葉巻は味気無く、手元に置かれたウイスキーは意味を成さない。

チャーチルにとっての快楽は敗北の味で薄く染まりつつあった。

しかし、現状はイギリスの手の中にはあった。

イギリスは中立条約を締結したソ連と共にヨーロッパへの侵攻を開始し、東西からの挟み撃ちで僅か数週間の内に全土を掌握する。結果として、イギリスは世界における多数の領土を手に入れた事となり、アメリカの国際的孤立を推進させていた。

カナダ戦線も若干ではあるが、英軍側の方が優勢で、米国領となっていたモントリオールやケベックを占領下とし、米国本土への侵攻を始めるのだった。

米国は防衛線を張って迎撃を図ったが、さすがの米軍も広大な国

境全体をカバー出来ず、一部地域から、英軍が本土への侵攻を果たしていた。

また、東海岸上陸も、ニューヨーク侵攻は順調に進んでいた。結果として、全体での戦況は英国側が優勢であった。

「欲張りな奴らめ……」

ワシントンのホワイトハウスでは、日本側によって唐突に送られてきた書類を見たルーズベルトが、いぶかしげな表情を浮かべながら呟いていた。戦況が思わしく無い状況と、差別思想が入り混じった声色は、畏怖すら感じさせられた。

『追加案：第六項に乗っ取った提案』

書類の冒頭に書かれたその文章は、日本にとっての一種の生命線である。

ハル・ノート案締結前、日本はこの案を結ぶ為に一つの案を提出し、それを加えない限り同盟は結べないと伝えた。

それが第六項——“対英戦争中、米国は日本の状況を理解し、積極的に提案を受け入れる”であった。

この第六項は、具体的でなく、それを実行する判断も難しいという曖昧なものであったが、暗黙の了解が如き拘束力を持っている。

それが、対英戦争であった。

ルーズベルトは、日本をソ連・東南アジア・オーストラリアに対抗する太平洋上の防波堤として考えたが、それを実行する為には同盟の続行が必要であり、幾らかの提案は呑まなければならなかった。また、ハルノート案は締結後、法的拘束力が働いているので、それも上手く作用する事となり、日本側の提案は積極的に呑まなければならなかった。

日本側が提案したのは、当初日本が提出した『乙案』の修正案で

ある。

それは、“米国は、日本に対して必要資源が得られるよう、協力を行う”という事であった。ひれは事実上の資源要求であり、具体的では無かったが、法的拘束力は作用していた。その他にも幾つかの提案が付いており、米国製兵器の購入権や技術の提供、マレー半島及びシンガポールにおける支配権も含まれていた。

ルーズベルトとしては呑みたくない提案ではあったが、戦況の点を見ると結ばざるをえない提案であり、追加案提示の数日後に、必要資源と一部兵器の購入権。そしてマレー・シンガポールにおける支配権を米側と共同で一部期間認めるという事を伝えた。

長達の悩み事（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ミッドウェー強襲

1942年5月5日 pm 23:41

ミッドウェー島周域

島内の米海軍基地。その一角に天高く立ち誇る監視塔では、ジョン・アッシャー軍曹が監視員として漆黒の空に目を光らせていた。太平洋での対英海戦が少なかった為、アッシャーを含めた兵士達はここが一番安全だと思い、軍部の人事に感謝すら覚えていたのだ。

漆黒のカーテンに包まれた外界は視界の働きをさせず、闇のみが広がっている。聞こえるのは兵士達のふざけ合いと、静謐に包まれた海のさざめきのみだった。恐らく今日も何事無く時が過ぎていくだろう……、とアッシャーは思った。

その刹那の事だった。暗黒の世界の彼方——水平線の向こう側から、何かが近付いて来ている事に、アッシャーは気付いた。

どうせ補給艦が何かだろう……。

アッシャーは全く気にせず、その艦艇を見過ごした。正体不明の艦艇は闇に潜んだまま海原を突き進み、ゆっくりと此处、ミッドウェーへと向かって来ていた。

「バンバー。今日はここに増援の艦艇が来るのか？」

アッシャーは妙な胸騒ぎを覚え、隣で警戒を続けていた男に告げた。

「いや……そんな予定聞いてないが……」バンバーは低い声で言った。妙な事を聞くもんだな……。

闇の切れ間から進む艦艇に、アッシャーはこの上ない畏怖を確信していた。不気味なその艦艇から、空へと複数の黒点が舞い昇ると、それが高速のスピードでこの島へと向かって来る。

「嫌な予感がするな……」

「何が？」

アッシャーの独り言に、バンバーが不思議そうに尋ねる。

「それが何だか訳が分からないんだよ。いわゆる直感って言う奴だ」

やがて——不敵な笑い声のような——低く単調な音が空から降り注いだ。呆気に取りられて2人が上に目を向けると、無数の戦闘機が低空飛行で基地の空を覆い尽くしていた。

『総員！戦闘準備！』

重厚なスピーカーから降り注いでくるぐもった声は、まるで洞窟に入った風が内部の壁に反響して出来た不気味な音のようで、兵員達は慌てふためいた。

夜空にはサーチライトの眩い光と対空火砲の閃光が迸る。

そして、その空の合間を縫うようにして、正体不明の戦闘機が飛行し、大量の爆弾と機銃掃射を豪雨の如く降り注がせて、基地中に爆炎と絶叫を生み出す。

監視塔の一つ。基地南側を監視していたアッシャー軍曹は、愕然としながら監視塔を駆け下り、轟音響き渡る滑走路をひたすら駆け抜ける。そして土囊の積まれた陣地へと滑り込み、対空砲の銃座に座って無数の銃弾を漆黒の空に叩き付けた。

「気を付ける！」

背後から付いてきていたバンバーの声を聞き、思わずその方向に振り返ると、業火に包まれた戦闘機が対空砲陣座に突っ込もうとしている事が分かった。

銃座という縛めから逃れ、アッシャーは大きく宙を舞う。

次の瞬間、業火に包まれる戦闘機が対空砲に直撃し、蹴散らしながら滑走路を激走する。金属と地面が擦れ、火花と黒煙が飛び盛り、50メートル程直進して停止した。

激痛を覚えつつも、何とか逃れたアッシャーは、そのまま墜落し

た戦闘機の元へと歩を進める。30秒後、バンバーと共に到着したアッシャーは大破する戦闘機に目を据える。戦闘機の前方は大きくへこんでおり、左翼は寸断されてなくなっていた。

崩壊したキャノピーからは、正体不明のパイロットの横たわった遺体の姿が見え、アッシャーはその遺体を外へと出した。

「……イギリス海軍か？」

軍服に付けられた国旗は紛れも無き英国旗であり、その機体も英海軍主力ジェット機『グロスターサンダーボルト』であった。アッシャーは愕然とした様子で呟いた後、その機体をまじまじと見つめた。

1942年5月5日。

こうして、ミッドウェー戦が始まりを告げる。

敵はオーストラリア海軍を主力とし、英海軍を加えた大艦隊であった。空母『フューリアス』『ヴィンディクティヴ』『イーグル』『フォーミダブル』『インプラカブル』から成る機動部隊であり、これまでの英海軍の編成を考えると、最も航空戦力を重視した編成となっている。

これだけの戦力を揃えてミッドウェー攻略を果たす最大の目的は、ハワイ攻略である。太平洋において、英米間の海戦はまったく行われてこなかったが、この時期を機に英国本土はアメリカの主要拠点であるハワイを掌握し、戦力の削減と同時に西海岸への侵攻を目論んでいた。

南方戦線において、マレーとシンガポールを失ってから失速を続け始めているイギリスにとっては、負けられない戦いであった。

ミッドウエー強襲（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

東條強襲

1942年5月6日Am11:24

ワシントンD.C.

ルーズベルトの1日は、慌しく始まった。前日の英軍によるミッドウェー奇襲を受け、午後から閣僚会議が予定され、ラジオによる国民への説明もスケジュールに混じっている。痺れて何も感じない足を両手で奮い立たせ、行政府官邸のスタッフに協力して貰って車椅子へと身体を乗せようとした時、全ては勃発した。

突如、オーバルオフィスの強固な扉に拳を打ち付ける音が響き、スタッフの1人が入ってくる。

「大統領。御来客がお待ちです」

御来客？全く脳裏によぎらないスケジュールの前にルーズベルトは不思議そうな表情を浮かべ、開いた扉間から見える男達の姿を凝視した。

……日本人か？

独特な黄褐色の肌と漆黒の髪を見た所から、ルーズベルトは確信した。

「とりあえず入室を……」

「分かりました」

スタッフはそう言いながら頷くと、来客の待つ扉の元へと歩み寄り、オーク材の扉を静かに開ける。それから少しの間も空けず、来客と名乗る男達が堂々たる表情を浮かべて入ってきた。

「——始めまして……大統領閣下」

軍人らしい鋭く尖った声が、ルーズベルトの耳を駆け抜けた。

その男——を見たルーズベルト大統領は驚嘆の表情を浮かべ、その人物の顔をまじまじと見据えた。まさかそんな馬鹿な……、こん

な事ありえない……。

「ミスター・トウジョウ？」

ルーズベルトの目前、デスクの前に立ちつくしていたのは、東条英機総理であった。

ワシントンの心臓部は急激に縮こまる。

突然現れた謎の人物——東条英機の来訪によってだった。ピシッとプレスの利いた軍服と胸元に付けられた勲章の数々。そして鼻元にたくし上げられた黒髭と黒縁眼鏡こそ、それを示す証だ。日本国のしたたか者であり、軍閥僚内のエリートである。

東條がこうしてワシントンに赴いたのは、2月の追加案の結果からだった。どの案も微少しか叶えられておらず、日本国内や軍部の間では同盟破棄や抵抗の動きが強まってきていた。これらの勢力や思想、そして日本の事を考えた結果として、東條は強制的な首脳会談——『背水の陣会談』を計画し、実行されたのだ。

今回、東条英機はワシントンの米海軍施設で行われる新型戦闘機『F-81ウルヴァリン』の見学の為と称して米国本土への来訪を米国政府に頼み、それを目くらましとして強行的に行政官邸へと突入し、大統領との強行会談を図ったのだ。実際、あまりにも危険な賭けではあったが、計画は成功、これまで頑なに断られてきた大統領との会談に至った。

「一体どうしたと言うのだ？」

ルーズベルト大統領は愕然としながら言い、東條の後ろに居た通訳人が訳して伝える。

「ぜひ会談を望みたい……」

東條の言葉は通訳人を介してルーズベルトへと伝えられる。

「何が望みなのだ？」

「……ぜひ、追加案の見直しを頼みたい」

ルーズベルトは鼻で笑い、辛辣な視線を東條へと傾けた。ミッドウェーといった色々な案件があるというのに、まだ悩み事を増やす

気なのか？

「提案は呑んだ。まだ望むのか？」

通訳を介し伝えられた言葉に、東條は渋い表情を浮かべる。

「無論望む。あれは呑んだとは言えないし、我々にも考えはある」
東條の比類無き視線と、刺々しい口調にルーズベルトは一瞬たじろいたが、不機嫌そうな表情は崩す事は無かった。

「考え？」

「そうだ。先日、英国から連絡があつた。“全てを無に帰し、友好を築きたい”」

その言葉は事実であつたが、東條は友好を結ぶ気はそこまで無かつた。白人の言う“友好”とは、首輪を付けられ、爪や体毛を塗り取られ、お得な動力として未来永劫働かされる——と言う事なのだ。少なくとも、それが米国に対する交渉の駆け引きとしては申し分無い交渉言葉だつた。

「それでどうする気だね？」

ルーズベルトは言葉を詰まらせながら言つた。

「無論、友の為にミッドウエーの地へと赴く事になるでしょう」

「ほお……」

東條の言葉は確実な成果を上げ、ルーズベルトに痛恨の一撃を与え続ける。

万が一、要求を吞まずに同盟破棄を行えば、日本はすぐにミッドウエーへと戦力を傾け、英軍との共同戦線を張る——という手筈となつていた。太平洋上には第1航空艦隊を主とした攻撃艦隊が展開している。

逮捕すらありえる状況ではあつたが、既に言葉は暗黙の了解が如く——拘束力を付けつつあつた。

「第六項を覚えておられますか？」

唐突な東條の言葉に、ルーズベルトは不思議そうな表情を浮かべる。

「あれは曖昧な定義であり、必要性はありませんが——強い者程

使い易い案なのですよ。分かりますか大統領？この状況で強い者が誰かという事を……」

通訳によって東條の冷厳な口調は失われ、真意性は低下したものの、それでも言葉の力は強く作用し、ルーズベルトに悪寒すら覚えさせた。

ルーズベルトが呆然とする中で、東條は一通の封筒を取り出し、中の書類を手渡す。

その内容とは――

- ・米国は、日本に対して必要資源を提供する。
 - ・エセックス級空母を初めとした艦艇・航空機の提供。
 - ・軍事技術の積極的提供。
 - ・マレー半島及びシンガポールにおける支配権。
- であった。

この他にも、幾つかの要求があり、ハワイやフィリピンといった地域での米軍施設の使用権や、経済発展の推進も含まれていた。また、“平等的人権の約束”も添えられている。

日本にとって、これは最期の賭け――背水の陣とも言える行動ではあったが、日本にしてみれば、英国との同盟締結というカードがあった為、挑む事となる。

こうして、ワシントンを騒がせた一大騒動はルーズベルトが折れる事から収束し、極秘事項として封印される事となるのだった。

『5月の嵐』事件。

日本側の提案を米側が合意し、収束する。

（アメリカ国防総省解禁情報より――1971年）

東條強襲（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ミッドウェー海戦

1942年5月10日 pm 21:19

鋼鉄の巨躯に海原は震え、20.3cm砲が夜の空気を切り裂いていく。

巡洋戦艦『オーストラリア』は、容赦無く太平洋の海原に砲弾の嵐を叩き付け、その優位性を築いていく。その鋼鉄の怪物を――空母エンタープライズに乗艦するウィリアム・ハルゼー中將は、艦橋からその光景を見据えていた。史実では相次ぐ太平洋戦線の連戦により、皮膚病を患ってミッドウェーには参戦しなかったが、この歴史において、ハルゼー中將は歯槽膿漏で頬を傷めたのみだった為、海軍は第16任務部隊を率いて最前線での戦闘を委任する。

空母『エンタープライズ』を基とし、右舷に重巡洋艦『ソルトレイクシティ』と駆逐艦3隻。そして、左舷に『ノーザンプトン』と駆逐艦3隻によって構成され、幾つもの航路で紺碧のさざ波を創りながら前進するのだった。

「陣形を維持し、ライトニング及びワイルドキャットを発射せよ」ハルゼーの言葉を聞き、隣に居た参謀長は静かに頷いた。

それから僅かな時間が経つと、空母の甲板上が慌しくなり、薄光が漆黒の夜空へと漏れ出す。甲板上では米海軍主力ジェット機『ライトニング』とレシプロ機『F4Fワイルドキャット』が轟きを上げながら、エンジンを発動する。

プラット・アンド・ホイットニーR-1830ツインワスプエンジンと、雷撃型エンジンが低く単調な音を響かせる中、両翼が月光に煌き、鏡の様に夜空の星々を映し出した。ワイルドキャットのパイロット、デクスター・アリンガム中尉が使い古した革手袋をきつくはめ、キャノピー越しから見える紅蓮の海原に目を睽った。その

直下には、空母『ヨークタウン』の残骸が深く沈んでいた。

「発進準備！」

甲板上の整備士は、重厚なキャスターを押して戻し、綺麗にした。突如の轟音。その正体はオーストラリアの艦砲射撃であった。水柱がエンタープライズの艦首を押し上げて、鋼鉄の大地を揺るがした。

「うおっ!？」

車輪が揺れ、機体が悲鳴を上げてアリングムは思わず驚いた。

左舷のノーザンプトンが乾いた砲音を轟かせる中、ワイルドキャットは飛翔する。近辺に展開するライトニングと共に突き進み、水平線の彼方に見える鋼鉄の怪物へと銃口を向けた。

5月10日pm21:47

ミッドウェー南側の海域にて勃発した海戦は、英軍の方が若干優勢であった。第16任務部隊を主体とした第3艦隊は、ライトニング20機、バッファロー15機、ワイルドキャット13機を投入し、迎撃として向かわせる。

一方、攻撃を受けていたミッドウェー基地からは、B-26マローダーとB-17フライングフォートレスを中心とした大爆撃編隊を発進させ、英海軍への反撃を先導した。

英海軍東洋艦隊上空へと到達した第16任務部隊の第1攻撃機隊——は、巡洋戦艦『オーストラリア』と空母『イーグル』、そして複数の駆逐艦の存在を視認し、攻撃準備を進める。アリングム中尉は操縦桿を引き下げて急降下し、オーストラリアの艦首へと機銃掃射を浴びせ掛けた。

ツインワспエンジンの作動音と対空砲火の単調な振動が重なり合い、鼓動が連動する。

クソッ……回避行動を取らなければ……。オーストラリアから放たれる対空砲火に目を瞠りつつ、にわかに口から酸素を吐き出し、仲間の機——という希望の灯を頼りに、その身体を大きく右へと傾

けた。

「サンダーボルト……」

アリンガムは前方から突き進むサンダーボルト編隊を見据えながら言った。後方の第6爆撃機隊の事を考えながら、搭載された機銃の銃身を高速のジェット機に向け、無数の弾丸を解き放った。

炎上するサンダーボルト——は金属の擦れ合う音を響かせながら、その機体を湾曲させて、オーストラリアの右舷海域へと墜落した。海面にさざ波が立ち上がり、紅蓮の猛火が漆黒の夜空に煌々と輝きを放つ。

攻撃の束の間、対空火炮群の全砲身が撃墜を果たしたワイルドキヤットへと向けられ、暗黒の空に50万カンデラの投光が舞い上がる。

唸りを上げて弾丸を撒き散らす対空火炮群は、まるで猛牛の群れが如くワイルドキヤットへ一心に砲撃を浴びせ、アリンガムの右腕に深い傷を負わせた。呼吸が憊くなり、生暖かい空気が心身を包み込むと、右肩と背中に引き攣るような激痛を与える。

汗でずぶ濡れになった革手袋が煩わしく思う中、砲撃を振り切りながら本隊の姿を探した。サンダーボルトの機影が友軍の姿を遮っている。刹那、右腕に激しい痛みが襲い掛かったアリンガムは、操縦桿を大きく引き上げて機体を上空へと押し上げると、再び機体角度の調節を行い、サンダーボルト編隊を切り抜けた。

このままじゃ不味いな……。

蒼白になりつつある顔を投影されたキャノピーから確認し、氷のように冷たくなる右腕をリネンのハンカチできつく締め上げ、動脈から溢れ出す紅蓮の血を抑え込んだ。

悶絶の疼きに身体を思いつきり押し上げ、何とか体位を安定化させると、アリンガムは本隊の編隊へと参入し、再び共同での作戦展開を始めた。出血から朦朧とする意識を拳からの痛みで叩き直しながら、殆ど戦闘不可の状態での事であり、流石に危険だとアリンガム自身は考えていたが、少なくともオーストラリアを撃沈しなければ

はどうしようもなかった。

「最後の最後までやってやるさ……」

収縮する肺に空気を押し込み、息を吐かせると、照準器に視線を合わせた。一気に降下する仲間の中に混じり、アリンガムも急降下する。

対空火砲は容赦なく仲間を傷付け、翼を吹き飛ばした。アリンガムの乗るワイルドキャットは抜群の操作技術によって友軍機の残骸を潜り抜け、砲火によって形成された弾幕の中を突っ切った。

傷が疼き——身体が凍え立つ。

アリンガムは激痛に耐えながら、オーストラリアへと突撃する。

付近に展開していた第6爆撃機隊が空爆を艦尾目掛けて浴びせ掛け、アリンガムは再び身体を奮い立たせた。熱風と轟音がワイルドキャットを振動させて、アリンガムの負う傷口を余計開かせていく。

「くそ……こうなれば……」

アリンガムはワイルドキャットの速度を上げて——突撃した。爆風が艦体を吹き飛ばして、強烈な閃光と衝撃をオーストラリアへと叩き付けた。

それから間も無くして、オーストラリアは撃沈した。

エンタープライズの艦首にて、ハルゼー中將は齒槽膿漏で口元を歪ませながら、最初の勝利の報を真剣な眼差しで聴いていた。『第1攻撃機隊——及び第6爆撃機隊：巡洋戦艦オーストラリアヲ撃沈ス』。

ミッドウェー基地では、既に修繕作業が進みつつあり、このまま敵艦隊を抑えておけば、さらなる航空支援を受けられるようになり、少しの間でも米軍側が優勢になる事が出来る……。それまでは確実な防衛陣を形成しなければならぬのだろう……。ハルゼー中將は心の中で呟いた。

「このままペースを落とさなければいい」

ハルゼー中将は参謀長に告げた。

「しかし閣下、敵側は戦力を集結させつつありますので……」
「分かっている」

参謀長の言葉をハルゼーは手振りで遮った。要は時間の勝負なのだ。

「我々にも増援は居るだろ？」

ハルゼーはそう言いながら軽くウインクをして見せ、親指で艦首後方——水平線の彼方に見える複数の艦影を示した。それは日本海軍第1航空艦隊だった。先日、『5月の嵐』事件にて、東條総理が配備しておいて隠し玉である。

「日本人は用意周到なようだな」

ハルゼーの言葉に、参謀長は深く同意していた。しかし、その胸には何とも言えない薄気味悪さが、後味悪く残っているのだった。

「ともかく、イギリス人にパンチを食らわせてやるう」

ハルゼーは威勢良く言い、痛みが疼く歯茎に顔を顰めた。

南雲艦隊——と称される第1航空艦隊は、2月のマレー沖海戦勝利から大きく戦力の補強された艦隊として、躍進を続けていた。第1航空戦隊と第2航空戦隊、そして第5航空戦隊によって編成された艦隊内には、新型空母『蛟龍』が導入されている。空母には九九式航空輸送機も搭載している所から、1日以内での大規模兵力の上陸を可能としており、その規模から世界最高峰の上陸部隊としての能力を兼ね備えているのだ。

輸送機が搭載されているのは、『5月の嵐事件』——もしくは『背水の陣会談』において、日米軍事同盟が決裂した場合に即時ミッドウェー上陸、制圧を想定した結果である。

「米海軍第3艦隊、第1次攻撃を開始したとの事です」

草鹿参謀長は、打電されてきた電信文を読み上げ、前方に立つ南雲中将に伝えた。南雲はそれを無言のまま聞いた後に、命令を下し

た。

「航空機の発艦を開始し、側面より米軍機を援護せよ」
空母『赤城』の艦橋に南雲の言葉が轟いた。

数十分後、発艦準備を済ませた戦闘機が飛び立った。編隊の主力は『神風』が担う。

概要としては、九九式ジェット戦闘機『神風』16機、零式艦上戦闘機15機、九九式艦上爆撃機20機が赤城、加賀、蛟龍より発進し、第2・3・5航空戦隊含め、計120機が出撃し、オーストラリア海軍含めた英海軍東洋艦隊に迎え撃つ。

側面より向かうのは、既に戦闘を開始し、警戒心を強める米海軍の対空火砲陣に攻撃されないようにする為であり、第16・17任務部隊を大きく迂回し、東洋艦隊の右側面へと到達する。

右側面へと展開する第2攻撃機隊の隊長、山川清二少佐は、マレー沖海戦での活躍が評価され、一階級特級していた。神風機を操り、戦場の空を駆る強者として、今回の第1次攻撃へと参加した。

「サンダーボルト視認」

慣れた手付きで照準器にサンダーボルトを乗せ、合わせる。

そして——九八式航空機関砲を咆哮させた。サンダーボルトの両翼には無数の弾痕が創造されて、エンジン部分から黒煙が立ち昇り、その動きが低下する。それから間が開かない内に、英海軍のジェット機は四方八方に鉄片を飛び散らかしながら、堕ちていった。

彼の目前には英海軍の空母『イーグル』の姿が漆喰の闇の中から垣間見えるようになり、九九式艦上爆撃機が爆撃を準備する。時代遅れ——とも言えるイーグルであったが、対米戦の為に改修工事がなされており、複数の装甲が加えれていた。

神風はあらゆる機に対し、絶大な火力で押す事が出来るが、そのスピードでは優位に立てない場合もある。サンダーボルトもそんな相手に分類されており、対応出来ない事もある。

今や、その状態に神風編隊がなされようとしている。イーグルよ

り急速発進した6機のサンダーボルトは最高の性能を発揮し、神風の背後へと回り込んで銃撃を行った。その眼下では、イーグルからの対空砲火が放たれ、夜空を切り裂きながら神風や九九式艦上爆撃機を墮としていった。

軌道修正しなければならぬ……。――

山川少佐は機体を大きく旋回させながら、イーグルへと近付いて行った。投光器が闇を切り裂き、日本機の姿を次々と白日の元に追いやって簡単に鎮圧した。

前方に展開する陣が少しづつ切り裂かれていく中で、その中心を山川の乗る神風が突っ切り、イーグルの寸前へと近付いた。九八式航空機関砲の掃射が甲板上の航空機や乗員を滅び去り、業火の中に艦上が含まれた。

突如、爆発。

航空機より漏れ出した航空用ガソリンが蒸発し、爆発す。

空母イーグルが炎獄に包まれるのは言うまでもなく、消火活動虚しく翌朝には自沈した。

ミッドウェー海戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

戦艦大和咆哮す

1942年5月11日Am11:37

大日本帝国海軍の第1航空艦隊が到着して以降、戦況は米軍側が大いに有利となっていた。英豪海軍合同の東洋艦隊は、巡洋戦艦『オーストラリア』及び空母『イーグル』を失い、先鋒隊の陣形は総崩れとなり、米軍の急降下爆撃によって、壊滅寸前にまで追い込まれる。

米海軍第16・17任務部隊の右翼方向には、第1航空艦隊が展開している。

空母『赤城』を主体とする第1航空戦隊を中心とし、第2・5航空戦隊が扇状に展開する中に、ひときわ目立つ艦艇が一隻、大艦隊の中に潜んでいた。

それが、戦艦『大和』である。

航空技術が発展したこの世界においても、『大艦巨砲主義』は台頭している。最も大きな要因としては、航空機が存在を否定する大英帝国の影響が強かった。無論、英国海軍の影響を受けた大日本帝国海軍においても例外的ではなく、結果として生まれたのが『大和』であった。しかし、信濃は建造される事なく、航空主義を推進させる海軍は空母増設を強く進めた。

大和第1航空戦隊の前方に展開され、猛々しい風貌を英艦隊と米艦隊に見せ付ける。雲間から漏れる光を受けて、46cm砲が輝きを放つ。

突如、大和の砲門が火を噴いた。

乾いた砲撃音と強い刺激臭が潮の香りに混じり合い、渋い匂いを辺り一面へと降り注ぐ。そして遥か彼方——水平線の彼方に見える

船団の間近に巨大な水柱を創り出した。

「精度……は流石だな。当たり前とも言っ所だろうか……」

赤城の艦橋より、南雲中将は腕組みをしていぶかしげな表情を浮かべながら呟いた。大和はその巨軀を大きく震わせながら、紺碧の太平洋を突き進んでいった。

「閣下、方位15度200呎より敵攻撃機隊及び爆撃機隊が接近中との事です」

草鹿参謀長の言葉に、南雲中将は渋い顔を作り命令を下した。

「航空機を発艦、迎撃を開始せよ」

発艦準備を進める翔鶴艦上より、第1次攻撃に参加していた山川清二少佐は、神風の性格を理解する小坂軍曹の整備を眺めつつ、左舷に展開する大和の鋼鉄の巨軀をまじまじと見据えていた。その後では、小坂のレンチが鈍い金属音を放ち、手腕を奮っていた。

「……少佐、完了しましたよ」

オイルが付いた右頬を手の甲で拭い取りながら、小坂は山川少佐の肩を叩いて言った。

「そうか……」

「ええ、でも気をつけて下さい」

小坂の忠告を胸に留めながら、山川は愛機である神風へと飛び乗り、堅木のような感触を覚える座席に腰を据えた。

艦隊上空。長々とした入道雲が浮標する蒼き大空を、扇状に展開した第2攻撃機隊が飛行する。その隣には、零戦より構成された第1航空機隊と九九式艦上爆撃機を主とした第6爆撃機隊が続き、その眼下を大和がガードしながら展開する。

まさに海を浮標する鋼鉄の要塞である大和は、艦首で海原を切り裂きながら、突き進んだ。

5分後、山川の操縦する神風が友軍のライトニング機と並んで飛

行し、英艦隊の上空へと到達しようとしていた。山川は頭巾を締め直しながら、無線機が発する機械音に耳を傾けていた。

そろそろか……。

胸の中で時間を数えていると、その衝撃は直にやって来た。弾幕の形成される蒼色の空を切り裂きながら進む中で、底部から砲火の轟音と爆風が機体を押し上げる。

呆気にとられて下を見てみると、既に3機程のライトニングが撃墜され、黒煙を纏わりつかせながら下へ下へと堕ちて行く光景が映り込み、それと同時に無数の敵機と海原を埋め尽くす大艦隊がバツクに捉えられていた。

「やられる前にやれて所か」

機体は疾風を纏いながら垂直降下して、空母『フォーミダブル』の右舷へと急速接近する。

刹那、対空火砲陣からの集中砲火が右後方の零戦の翼を突き破り、空を切り裂く。砲撃の厳しさを痛感した山川は機体を大きく上昇させ、九八式航空機関砲を激しく咆哮して艦尾に甚大なダメージを与えた。

空母フォーミダブルの艦長、ビゼット大佐は空に虚しく上がる対空砲火を艦橋の窓から見つめながら、接近する零戦や神風といった戦闘機への対応策を練っていた。

「艦載機を急速展開し、防衛線を――」

ビゼット大佐が参謀に命じようとした瞬間、激しい衝撃が艦体を襲い掛かり、ビゼット大佐は体を崩して冷たい鋼鉄の床に倒れ込んだ。

一体何事だ!?

ビゼットが身体を起こして艦橋から左舷を見ると、水平線より接近する鋼鉄の巨人――大和がフォーミダブルに急速接近し、46cm砲による艦砲射撃を行っているのが見て取れた。大和の咆哮は遠方から響き渡り、空母艦橋にまで鈍く小さい音を響かせていた。

危機を感じたビゼットは急いで艦を撤退させようとしたが、既に遅かった。対空砲の応戦虚しく、九九式艦上爆撃機による至近距離での爆撃が甲板を襲い、激しいダメージを与えたのだ。

爆撃を受けた部分——は大きな窪みが形成され、その深さは尋常では無かった。しかしながら、鋼鉄の装甲と構造上の観点から、沈没は免れた。

「報告！燃料庫及び機関室が大破しました！」

大慌てでやって来た将兵の1人の言葉に、ビゼットは頭がフリーズしそうになった。実際空母内では、蒸気管の破裂と燃料庫の爆発により、艦内の艦載機庫で大規模な火災が発生し、6人の死者を招いている。また、付近から接近する爆撃機隊の更なる爆撃により、居住区間においても火災が発生していた。

「いかなさいますか？」

参謀の言葉に、ビゼットは眉間を顰め、ゆっくりと口を開いた。

「総員退艦を伝え——」

声を切り裂く轟音。大和は咆哮し、砲弾は海面を滑空しながら突っ切ると、フォーミダブル右舷に直撃し、爆発する。砲弾は鋼の壁を突き破り、機関室から弾薬庫を抜けて全てを粉碎した。

再度、砲撃。

ビゼットは艦橋より、フォーミダブルに連なって航行し続けている重巡洋艦『ホーキンス』が爆炎を放ち、その巨軀を激しく揺さぶられて傾く光景を目の当たりにした。

多くの乗員が散り散りに逃げ惑う中、ビゼットは力尽きたようにして艦橋の床に腰を付け、胸に十字架を切って避難の成功を祈った。前方に立つ参謀は悲しげな表情を浮かべながら、尋ねた。

「……艦長、退艦を」

「その心配はご無用だ。運命を共にする」

「いえ……しかし……」

ビゼット大佐は手を上げて参謀の口を止め、要らぬ親切である事を厳かな様子で伝え、退室を静かに望んだ。参謀はビゼットと艦に

敬礼し、
急ぎ足で艦橋を後にした。

戦艦大和咆哮す（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

ミッドウェー海戦終結

1942年5月11日 pm 17:01

『大和』前甲板より、新嶋少尉は自沈し黒煙を漂わせる英海軍の空母『フォーミダブル』が音を立てて深き海洋に沈み行く姿を見ていた。艦首に纏わり付く波は切り裂かれ、航路が切り開かれる。

笛音が唐突に響いたかと思うと、時間足らずに46cm砲が激しく咆哮して、前方に展開する英軍東洋艦隊に対して、猛撃を繰り広げた。猛々しい光が波間を縫いながら大和へと降り注ぎ、それと同時に水平線の彼方の空へ灰煙が舞い上がる。

「索敵機より打電、——インプラカブル級空母を一隻見ゆ。方位17度、100哩地点」

参謀長の報告を聞き、高柳大佐は静かに頷いた。

慌しく動く兵員達の足音は、46cm砲の轟きによって掻き消され、一同が思わず耳を塞いだ。耳鳴りと煙臭が蔓延する中、彼方より閃光が放たれ、オレンジ色の炎が海上に現れた。

火球と黒煙が立ち昇る光景を見つつ、新嶋少尉は戦いの中での高揚感を感じていた。が、同時にそれが虚空である事も悟っていた。不動の地位と万物を滅ぼす力を持つ——はずだった大和であったが、インプラカブルに対しての攻撃は、一発も当たっていなかったのだ。インプラカブルは確かに炎上していたが、その近くには無数の米軍機が飛行し、大量の爆弾を落としていた。左舷には砲撃による痕跡は無く、巨大な水柱が生まれた結果として生じる大きな渦の波が紺碧の海洋——インプラカブル左舷海域に誕生しているのだ。それが大和の巨軀が海を切り裂きながら進む内、徐々に分かる様になっ

ていく。

インプラカブルは空爆により撃沈し、深き海洋へと沈むのだった。

ミッドウェー海戦勃発より5日。

英豪軍は空母3隻を失い、敗走の道を辿る。

この海戦を機に、太平洋方面における支配力を英国は奪取され、破竹の勢いで進撃を続けていた英軍の動きも徐々に低下していくようになるのだ。

一方、米側は空母『ヨークタウン』を喪失、航空機200機以上を失うという手痛い勝利に終わる。日本側は空母一隻が中破するものの、喪失艦艇は米軍に比べると少なく済んだ。そこには、米海軍の差別思想と日本海軍上層部の思惑が大きく繋がっており、双方共に「支援重視」を掲げた為である。

こうして、一局面の戦闘が終結し、次なるオーストラリア方面の戦争が始まる事となる……。

ミッドウェー海戦終結（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

歴史年表

▼航空技術誕生期

- ・ 1496年 レオナルド・ダ・ヴィンチが人力ヘリコプターを発明。16秒間空を飛ぶ。
- ・ 1501年 友人チエーザレ・ボルジアの元をダヴィンチが訪れ、航空技術の発展の為、軍事利用にと人力ヘリを売り込む。
- ・ 1521年 教皇レオ10世が人力ヘリを『悪魔の異形』と批判。

○ 『航空機』 宗教弾圧始まる。
各所で宗教裁判。

魔女狩りの要因となり、男性科学者が多数異端尋問に。

・ 1612年 ガリレオ・ガリレイ『ダヴィンチの翼』論文。
革新的航空技術。第1回審問所審査において、ローマ教皇庁邪聖省より注意勧告。

・ 1616年 地動説と共に、第2回異端審問所審査。
・ 1636年 第3回異端審問所審査により、終身刑（直後、再審査により軟禁に減刑）

▼英国への渡来

・ 1559年 カトリック教会より独立『イングランド国教会』設立。
・ 1615年 論文『ダヴィンチの翼』が国内に普及。イングランド国教会はこれを弾圧、一部人間を宗教裁判に。

・1703年 ロンドン王立協会、アイザック・ニュートンが会長に。『ダヴィンチの翼』を基に一大プロジェクトを設立。

▼アメリカでの航空技術導入

・1774年 ベンジャミン・フランクリンが米国へ実用型ヘリ『ダヴィンチの翼』を持ち込む。
・1775年 大陸軍発足。レキシントン・コンコードの戦いにおいて、初導入。

アメリカ合衆国独立戦争勃発。

・1781年 ヨークタウンの戦い。英軍降伏へ。
・1812年 米英戦争（第2次独立戦争）勃発。
・1814年 終戦。五大湖周域及びケベック・モントリオール地域占領化。

▼航空革新期

・1853年 日本に黒船来航。艦艇サスケハナに搭載されていたダヴィンチの翼が浦賀の空を飛び、一大騒動に。

・1868年 明治天皇即位。陸軍、ダヴィンチの翼を導入。
・1877年 西南戦争において、陸軍がダヴィンチの翼で爆弾投下攻撃。

・1894年 日清戦争勃発。ダヴィンチの翼投入。
・1889年 オットー・リリエントールが世界初の固定翼機発明。
・1902年 ライト兄弟がライトフライヤー号完成。

・1904年 日露戦争勃発。

・1905年 バルチック艦隊に対し、日本海軍のダヴィンチの翼武装機が上空より攻撃。

・1908年 ニコラ・テスラがVTOL基礎機発明。特許取得後、米国に滞在していた日本政府高官により特許が買収され、設計図が日本へと伝わる。

・1910年 エジソン研究所『航空部門』設立される。

・1919年 ヘンリー・フォードの共同出資により、『エジソン・エアロ社』設立。

同時期8月、レシプロ機開発。

・1925年 アルベルト・アインシュタイン、オットー・リリエンタールが入社。

・1927年 VTOL機『イーグル』開発成功。

・1928年 米陸軍、イーグル導入。

・1929年 アメリカ合衆国空軍設立。

・1932年 実用型ジェット戦闘機『ライティング』開発成功。
米陸軍が導入。

・1939年 大日本帝国海軍が九九式艦上ジェット戦闘機『神風』導入。及び九九式航空輸送機導入。

▼米英戦争

・1940年 英国がジェット戦闘機『サンダーボルト』開発成功。

・1941年 ボストン強襲。

米国、報復としてカナダ侵攻。

12月7日 日本がハルノート案承諾

○日米軍事同盟成立。

12月28日 マレー半島に対し、日米合同軍上陸。

・1942年

2月5日 マレー・シンガポール戦争 英軍と停戦。

5月5日 英豪艦隊 ミッドウエー奇襲。

5月10日 ミッドウエー海戦終結。

ソ連参戦

1943年1月7日

事は一週間前まで遡る。

1942年12月29日午後八時頃、モスクワに滞在していた佐藤駐ソ連大使の元に一通の書類が手渡され、唐突にもある事が告げられるのだった。

それが、『ソ連対日宣戦布告』であつたのだ。

中立条約を一方的に破棄し、宣戦布告を行つた31日から間もなく、極東方面ソビエト軍が満州及び南樺太に対する侵攻を開始。怒濤の如く雪崩れ込んできた軍勢の圧倒的な数の前に、関東軍の一部防衛線が突破されてしまう事となつた。

西方面では、侵攻してくるソ連機甲部隊を迎え撃つ為、第三方面軍を展開。第30軍を除いた全軍が展開し、多数の重砲陣を形成して大規模砲撃を行い、各個撃破を続けて徐々に戦力を削ぐ事に集中した。樺太方面では、第88師団が迎撃を先導し、少しでも時間稼ぎを行えるよう、攻防を繰り返した。

1943年1月12日 pm 19:07

エジプト/スエズ運河

紺碧の海原が広がる地中海をインド洋から阻むスエズ運河は、イギリスの所有物として米英戦争開始後から軍備拡張が続けられ、今や要塞と言える代物にまで成長していた。スエズさえ落とせば、イギリス本土に対する日本軍侵攻が容易となる事は明らかである。

しかし、真の意図は別にあつた。

1942年7月、ある計画が日本陸海軍内で発足した。これは対ソ連戦争を想定したものであり、即時首都モスクワへの侵攻を実行させる為、どうすればいいかという所から来ている。その計画はシミュレーションの域を出なかったのだが、11月頃から現実味を帯びてくるのだ。

11月20日、ソ連の情報提供者より、対日宣戦布告が12月の下旬に発布される事が伝えられる。

これは英国との極秘会談において、スターリンとチャーチルが決定した事であり、戦線が危ぶまれつつあるイギリスにとっての悪あがきの一つであった。

この計画の真髓にあるのが、その情報提供者——フルシチョフやマレンコフといった側近、さらに党内に潜む反超国家主義者達はスターリン体制を死という形で終わらせ、自分達による新体制成立を日米に約束させる代わりとして、『スターリン暗殺』を依頼し、その希望が叶えられれば即時日本との講和に移り、日米に対しての資源提供を行うと約束したのだ。

スエズ運河奪取の為、第1航空艦隊と第2艦隊、そして米海軍の第3艦隊の一部が展開している。この艦隊は前日より事前に解読容易な暗号文をわざと流しており、英軍側はこれら艦隊の目的を『モロッコ上陸』の先遣部隊として確定していた。43年に入って以降から、モロッコでは大規模な米軍上陸作戦が展開されており、同盟国日本もこの上陸作戦に参加すると大々的に報道していた。実際の所、それも隠蔽工作の一つであり、真の目的は黒海への進入であった。

スエズを抜け、エーゲ海を越えてボスポラス海峡を通ると黒海が広がっている。その黒海に面する地、オデッサ近域まで向かうのがこの艦隊の目的である。

奪取の先鋒を行くのは、第2艦隊第8戦隊の重巡洋艦『利根』、『筑摩』。その鋼鉄の巨躯は夕気を切り裂きながら突き進む。その後ろに第1航空艦隊の空母『飛龍』、『蛟龍』、『蒼龍』が着き、空を力バーしていく。

後方には、米海軍の新鋭空母『エセックス』が重厚な装甲を見せて付けている。

『モスクワの嵐作戦』始動す。

ソ連参戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

Operation: Storm of Moscow (モスクワの嵐作戦)

大日本帝国海軍の市場少尉は、重巡洋艦『利根』の冷やかな大地を駆け抜け、湾岸にこつた返す英軍重砲部隊の兵士に対する砲撃の合図を続けていた。首元に掛けられた汽笛が高々と鳴り響いたかと思うと、20.3cm砲が爆音を轟かせ、砲弾を解き放つ。

スエズ運河を煌々と照らすのは人工の光源——サーチライトだ。

投光が利根の巨軀を燦々と照らしたかと思うと、同時に無数の弾丸が蛇のようにのた打ち回り、鈍い衝撃と断裂音が響き渡った。

「左翼への攻撃を集中させ、航空支援を要請しろ！」

利根艦長の兄部為次大佐は雑音交じりの無線音が断続して響く艦橋の中で叫んだ。利根は定期的な間を取るが如く艦体を大きく揺らし、運河の周りを蛇のようになくねらせながら波を切り裂いて突き進む。窮屈なトンネルのように航路が制限されているスエズ運河において、大型艦艇の密集する艦隊というのは運河などにとっては最も厄介な物の一つであり、船は半日掛けて進む事が多いのだ。安全的な航行を果たす為には、運河周域の英軍防衛勢力を可及的速やかに撃破する必要がある、時間制限の限られるこの作戦においてはより素早く事を進めなければならない。

艦橋の外では既に日が沈んでいたが、巨大な鋼鉄の巨人達——の姿はおぼろげな輪郭から見て取れた。英軍戦闘機群が空を駆け、それを神風が追いかける。

空中から見ても、艦の姿は目を眩り、神秘的と言えるまでの力を放っていた。

英空軍は未だ日本軍に対する過小評価を変えておらず、空を舞う多くの機は旧型のレシプロ機ばかりであった。米海軍より輸入された新鋭機『F-81ウルヴァリン』に乗る鷹野少佐は、有り余る力を敵に分けてやりたいとまで考えていた。

F-81——愛称『ウルヴァリン』。

米海軍が開発した新鋭ジェット戦闘機であるこの機体は、『ライトニング』『神風』と比べ、機体が大きく縮小され、小回りの利く形になっている。小型機たるウルヴァリン最大の利点と言えばコストがそれほど掛からないという所だろう。軽量化を図る為、構造を工夫して素材を削る事で防御能力を維持しつつ、速度上昇を実現させており、エンジン自体もライトニング機と同様型を使用している。小さいながらも強い所から、兵士の間では小さくて獰猛なイタチ——クズリ（ウルヴァリン）と呼ばれているのだ。

空母『飛龍』の騒音が遠ざかるのを感じながら、鷹野少佐はウルヴァリンの木製の座席に深く腰掛けて頬に滴る汗を拭い取った。飛び立つて数分程で都市スエズへと到着して、重砲陣地に機銃掃射を浴びせ掛けた。先刻現れた英軍のグロスターグライダーターが紅蓮の炎に包まれ、スエズの空を背にして堕ちて行く。

……お笑いもいい所だな。

敵を舐める訳では無いが、鷹野は既に取って代わってお払い箱になったはずの旧型機に対して戦闘を行う事を好ましく思っていないかった。

いわば、実力の勝利ではなく性能の勝利なのだ。

その隣から、友軍の九九式艦上爆撃機が到着し、無数の爆弾をスエズへと落として行く。随分な爆音が響いたかと思うと、予想だにしない程強烈な閃光がキャノピー越しに差し込み、鷹野は思わず目を背けた。

「眩し過ぎる……」

閃光は絶え間無く続き、同時に黒煙が空へと昇る。

鷹野は少し心配になった。重砲陣の弾薬庫にでも引火したのだろうが、この爆発が運河にまで及んだ場合、航行に支障が生じるかもしれない。

無論、港湾整備の整ったスエズは絶対的占領価値を持ち、未来永劫使用出来る。この戦闘において最も重要な事は、英国に対し、高らかに勝利を宣言する事なのだ。引き分けや米国の二番手は許されず、完全勝利こそ祖国への最大の恩返しだろう。

攻撃を中断し、折り返しの攻撃を行う為に飛龍へと戻った。

流石に遠目でも凄いな……。

湾岸に燃え盛る紅蓮の炎獄は街の建物を漆黒の空を背景に照らし出される様は、まるで暗黒の世界に建造物群が宙に浮かび上がっているかのようだった。

翌朝、大日本帝国海軍の舟艇がスエズに上陸し、白兵戦が勃発する。

前日の火災から辛くも逃げおおせた英軍勢力は市内の野戦病院に立て籠もり、籠城戦を開始しようとしているようで、その裏手には迫撃砲陣と対空砲が展開、戦車まで用意しているという周到ぶりであり、上陸を指揮する本間正春中将は長期戦やむなしと感じつつあった。

曙光が差し込み、九九式航空輸送機の機影が大地をうねる。

第16師団に所属する峰少尉は分隊長として野戦病院攻撃隊に編入され、今まさに向かっている所であった。

この日の朝五時頃、空母『蒼龍』より飛び立つ九九式輸送機へと乗り込み、空の旅路に着いた峰は静まり返った空を大きく震わす輸送機のターボシャフトの轟音と、地上より立ち昇る火薬の香ばしい匂いに鼻孔をむずむずさせながら、鋼鉄の体躯を背にして固い座椅子に腰を置いていた。

時折かくわしい潮風の香りが機内に潜り込み、峰は渋い顔を浮かべる。

「もうすぐ着陸地点に到達します」

操縦士の声を聞き、峰は低い声色で「うむ」と答えた。

数分後、半円形の純白の広場が姿を現した。中央には消火活動で枯れ果てた壮麗な噴水が聳え、その噴水を囲むようにして、黒焦げになった兵士の遺体が並べられていた。

広場の頭上へと到達した九九式航空輸送機は唐突に身体を空に固定し、静止する。

峰は腰からハーネスを外し、深々と息を吸った。そして冷徹の床に飛び出た鉤爪にロープの金具を装着して一気に宙を舞い、身に任せて落下した。手の平がロープの摩擦で熱くなり、麻紐の擦り切れる音が内なる世界から外部へと漏れ出す。

重厚なブーツの裏が広場のレンガに接触し、音が鳴る。突如、焦げた臭いが鼻を駆け抜け、右足の先に横たわる戦場の真実——を目にする事となった。

O p e r a t i o n : S t o r m · O f · M o s c o w (モスクワの嵐作戦)

ご意見・ご感想お待ちしております。

バズーカ砲の初陣

広場へとファストロープ降下を果たした峰の眼前に映り込んだのは灰と化し、漆黒に染まった通りだった。焦げ臭さと潮の香りが鼻を駆け抜けて、峰は眉間を顰めた。

「例の物は持つてきているか？」

峰は背後に降下してきた部下の横山軍曹に尋ねた。

「はい、これですな」

横山は背中へと手を伸ばし、巨大な筒状の物体を取り出し、披露する。峰はその奇妙な筒をしげしげと眺め、今でも理解出来ない兵器に対し、畏敬の念を感じた。本当にこんな物が戦車を破壊出来るのだろうか……。

携帯式対戦車砲——通称バズーカで知られるこの兵器は、史実においては1942年末期のチュニジアに投入され、後の戦闘スタイルを一新させるきっかけを作る事となる。これまでは戦車に対抗出来る兵器は限られていたが、このバズーカ砲を持つてしても、当初は命中率、不具合、バックブラストによる位置の特定等、多くの問題点があった。

しかし、歩兵が戦車に対抗出来る手段としては、非常に有益な兵器と言えた為、爆発的に普及し、朝鮮戦争時にも使用された。

1942年末、日本が購入したバズーカ砲はスエズ戦に初投入される事となり、峰分隊にも支給されたている。

その重厚な砲口を見ながらも、峰は今だこの兵器の信用性に疑念を抱いていた。

100m程前進した所で、遂に峰は敵の立て籠もる野戦病院の元に辿り着いた。

元々は運河運営に携わる英企業の事務所としてその建物は使われていたが、日米軍のスエズ侵攻後、野戦病院として模様替えし、夜間爆撃によって指揮系統の崩壊した印兵やエジプト兵達により、籠城の拠点として今は使われている。

白塗りのレンガ製の建物は火災や爆撃にも耐え、今でもその荘厳な姿を維持していた。

「隊長、準備完了です」

バズーカ砲を携えた横山軍曹は声を顰めながら言った。

峰は静かに頷き、双眼鏡から野戦病院の様子を確かめた。病院前には英軍のバレンタイン歩兵戦車が一台、その隣には重装備の兵士が機関銃を構え、寄り付こうとする人間に対しては徹底した交戦意識を持ちながら、歯軋りを立てて警備している。

……ここで攻撃すれば、大変な事になるだろうな。

航空支援が無い事を考えると、戦車や地上支援部隊が全て到着してからので攻撃が妥当だと峰は考え、手を上げて横山のバズーカ砲攻撃を中止させた。

今にも崩れ落ちそうな建物の裏で、峰は友軍到着を待っていた。

刹那、無線の断裂音が響き渡り、機械的な声が重厚な無線機から流れる。

「さあ、さあ、いくぞ」

峰は言い、横山にバズーカ砲の準備を促した。遠くから響く戦車の轟きと、歩兵の連続する足音に心地良ささせ覚えながら、野戦病院の前方へと向かう。

横山は例の奇怪な筒状の物体を手に取り、肩に乗せて砲口をバレンタイン戦車へと合わせる。「隊長、準備完了です」

よし……。

峰は静かに手を上げ、その指先を戦車に向けた。

——60mmロケット弾が空を駆る。

強烈なバックブラストが背後から噴出し、峰の視界が白煙に包ま

れる。横山の右肘に発射の衝撃が大きく伝わり、その力の程を知る所となった。

発射音は即時に掻き消され、爆音に変貌する。

爆音は即時に掻き消され、絶叫に変貌する。

そして、絶叫は即時に掻き消され、戦車の轟きに変貌する。

それに続き、無数の足音が響き渡り、再度絶叫に変貌した。

足音が銃声と咆哮に変わるのとは間も無くの事であり、絶叫も付いてくる。

バレンタイン戦車は砲身が湾曲し、前部装甲が露出するという無残な姿に変貌しており、峰と横山は米国製の奇怪な兵器の実力を知る所となったのだ。

1月14日 pm 14:26

スエズ陥落

バズーカ砲の初陣（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

嵐の到来

1943年1月28日pm21:05

星々の幕が垂れ、紺碧のエーゲ海に壮麗なベールを映し出す。

漆黒の闇の中、鋼鉄の怪物達がその巨軀を震わせながら、波を切り裂いて海原を突き進んでいく。艦隊は重厚な海の化物を中心に、淡々とした海底を潜り縫う潜水艦と複数の駆逐艦を主翼にして、巨大な海峡を抜けようとする。

その名——ボスポラス海峡——は、今の彼らにとって非常にややこしい存在であった。

重航空巡洋艦『信濃』の艦長の加来止男大佐は、スエズ運河各拠点に点在する司令部と連絡を取りながら、ボスポラス海峡を通過していた。頭上に広がる夜空に一瞥をくれた後、加来大佐は吐息を漏らして静かに目蓋を瞑った。辺りは不気味な程穏やかな空気が漂っており、背を冬の夜風が駆け抜けていった。

信濃は元々戦艦として華々しく戦線に投入されるはずだった艦であったが、海軍内で湧き上がっていた航空主義の台頭によって空母への改造を果たされる事となり、1940年末から空母への改造が進む。

しかし1942年、情報提供者からのソ連対日宣戦布告を受けて発案された諜報計画により、当初空母として分類されるはずの信濃は『重航空巡洋艦』として分類が決定する。

その意図には、ボスポラス海峡における『モントルー条約』が大きく関わっていた。

1936年に締結されたモントルー条約によって、ボスポラス海峡では大規模な戦艦通行制限などの規制が存在する。その中におい

て空母の通行は許されず、条約を結ぶ日本はこの条約を忠実に実行しなければならなかった。

しかし、作戦において航空支援は必須であり、何より兵員を迅速に運ぶVＴＯＬ輸送機の実在は作戦遂行には欠かせない。その為、多くの航空機を搭載出来る信濃は規制されない重航空巡洋艦という分類にされている。

実際、信濃は改装によってVＴＯＬ機特化型空母として、空母『蛟龍』と並んで九九式航空輸送機の搭載数が多く、性能自体を例外とすればその意義を果たしており、兵力が小規模に限定されている今作戦では、重要な核を担っているのだ。

数時間後、オデッサ近海へと到達した独立艦隊——通称『北艦隊』は、米海軍の支援を受けながら、艦載機の発艦準備を進めていた。今回の特別任務により編成されたこの艦隊は、特殊な陣形を取りながら、黒海を浮標していた。

「北機関任務第一号、“モスクワの嵐作戦”……なんとも胡散臭いと思わないか」

第1小隊長、南野大尉は重々しげな表情を浮かべながら、ハーネスを巻き付けて隣に座り、九九式航空輸送機の発進を待つ小松少尉に囁きかけた。

どう答えればいい？

気まずい状況にでも陥ったかのように、小松は咳払いしながら答えた。「私には何とも分かりかねませんね……」

「訳が分からないのは無理も無い」

「大尉はいささか考え過ぎではありませんでしょうか？」

小松の当惑した声色を聞き、南野は鼻で笑った。「そうかもしれないな」

「まあ、今回の作戦は意図がよく分かりませんが……」

この北機関が設立されたのは僅か数ヶ月前で、海軍から精鋭が集められ、様々な分野の知識と訓練を行った。その中には、至近距離での殺害方法や爆破技術の訓練も含まれている。どれもこれも、全てが“モスクワの嵐作戦”遂行の過程である。

モスクワの嵐作戦の具体的な内容は、九九式航空輸送機によって兵員をモスクワまで空輸、情報提供をリアルタイムに受けながら、スターリンを確保、拘束、と手筈を整え、燃料補給を終えた脱出用の輸送機に乗り、即時撤退するというものである。モスクワまで旅路の間、九九式航空輸送機はミンスクといった地域でのソ連協力者による燃料補給を受けながら進む事になっている為、長距離の移動を何とか可能なものになっている。

あまりにも突飛過ぎる為か作戦を担う兵士の多くは当惑の表情を浮かべており、航空支援や物資、さらにはセヴァストポリに展開するソ連黒海艦隊が本艦隊まで到着する前に事を運ばなければならないので、作戦時間も限られるという悪条件の中、作戦が始まるのだ。

「……もうすぐモスクワに到着します」

九九式航空輸送機操縦士の声を聞き、夢現になっていた小松少尉は現実へと引き戻された。閉め切られたドアからは、猛々しく吹き荒れる冬將軍の咆哮が見て取れる。厳冷な機内に長滞しているせいなのか、身体の各所各所が痺れを訴えている。

「すみません、後少して寝る所でした」

小松少尉は居心地が悪くなったのか、咳払いしながら言った。

「いいさ。この寒さは体に応える」

「そう言っただけじゃ私も助かりません」

他愛無い会話が続く中、冬空を舞う九九式航空輸送機は、唐突に体を揺らして大きく下へと傾く。ドアの窓からは、おぼろげな建物の輪郭と複数の光球が映っていた。

輸送機がクレムリンの赤壁まで差し掛かった頃、突然機体がロー

プで縛られたが如く空中で固定され、静止する。南野大尉が重たげなドアを大きく開けると、激しい疾風と吹雪が機内へ流れ込んだ。

「降下用意！」

南野の叫び声とともに座っていた兵員9名が立ち上がり、開かれたドアの元へ歩み寄った。南野が外を見下ろすと、ジェット気流でさざ波の立つモスクワ川が映り込み、ターボファンから漏れる熱気が頬を伝う。

南野はロープ先端の鉤具を機体床の突起に装着し、留め具を掛ける。そして、ロープをしっかの握り締めて一気にファストロープ降下を敢行した。

身体が宙を浮く……。

これまで何度も行っていたが、それでも不思議な気分だった。

「続け！」

降下を続行する南野は、上を向いてターボファンの轟音に負けないうぐらいの声で叫んだ。その声を聞き、小松は続いて降下する。

「全員降下したな」

南野は広場に隊列を組む兵士達の顔を覗きながら告げる。

その頭上では、空輸を終えた九九式航空輸送機が撤退を始め、瞬時にモスクワの外へと姿を消してしまった。

嵐の到来（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

捕獲作戦

1943年1月29日Am02:35

モスクワ/クレムリン近郊

「こちら第1小隊、スターリンの位置は？」

『スターリンは車に乗り、モスクワ近郊のダーチャ^{別荘}へ向かっている。既にそちらへ向かっているはずだ……到着まで2分』

第1小隊隊長の南野大尉は、渋い顔で頷いた。

スターリンの臆病さは度を過ぎており、専用の大型車両には特別な装甲板が施されてはいるが、現代の米大統領が乗るようなリムジンのようにパンクしても駆動出来る技術は未だ作られてはいない。更に言えば、各国要人が普段着ている防弾スーツも開発されていない為、暗殺はバズーカ砲と幾らかの銃さえあれば簡単に出来るだろうと、立案者始め関係者一同は考えていた。

レンガ造りの建物裏に身を隠す中、一瞬吹雪が止み、雲間から月の薄暗い光が漏れ出して地上へと降り注ぐ。

今夜は世界がまるつきり違う。

待っている間、普段見る事の出来ないモスクワの街々を南野は目を見開いて見据えた。

南野は冷たい外気にさらされながら、道路を見ていると、遂に運命が訪れる。黒塗りの大型乗用車が3台、隊列を組んでモスクワの道路を走っていた。入り組んだ街路をくねる様にして進んでいく。

「……対戦車砲を」

その声が漏れると同時に、背後に待機する小松が背負っていたバズーカ砲を手に取り、肩に担いで隊列を組んで走る車の先頭車両に砲口を向ける。

家と家の合間から、ゆっくりとM1ガーランドを差し向ける。

M1ガーランドはスエズ戦より陸海軍に投入されたもので、条約の結果として配給された銃器である。南野の持つガーランドにはM84スコープがカスタマイズされており、スコープの照準は先頭車の運転手席を定めていた。

冬空の雲間から煌々と輝く月が顔を覗かせている。

南野は息を止め、スコープ照準を運転手にしっかりと合わせる。

『——ちら……司令部』

雑音交じりの機械音が背後より漏れ、南野は顔を顰めた。M1ガーランドの銃口を降ろし、通信機越しに相手側の会話を聞き取る。

『スターリンの乗る車両は——最後尾だ』

南野は再度体勢を崩し、M84スコープを覗き込む。淵には別部隊の狙撃手が見えている。薄暗い月明りに照らされて、最前列の車両の空の後部座席が見え隠れし、スコープの下部が車の駆動振動で微動した。

……2両目。

スコープを静止し、後部座席を確認する。

「スターリンは乗っていない」

南野は低い声で背後に展開する兵士達に伝えた。

中央車が通過させた後に、スコープの照準は瞬時に3両目の車両後部座席を向く。後部座席には黒いベールが覆われており、スターリンが乗っていると言う確証は得られない。

どうすればいい？

南野が考える中であれ、車両は走る。

別部隊のスナイパーも困惑しているのか、引き金を引こうとはしなかった。

チャンスは一度。それだけだ。

M84スコープはゆっくりと車両の前輪タイヤを向いて、静止した。隣にしゃがむ兵士達もスコープ非搭載のM1ガーランドや九九式短小銃も前後輪タイヤに銃口を向けている。

——同時に銃口が火を噴く。

タイヤは鉛玉の嵐にさらされ、痛快な炸裂音を解き放った。車はタイヤを失い、停止した。

ドアの開く音、銃声、爆裂音。

静謐の世界は瞬時に崩壊し、破壊の世界が生まれる。銃弾を嵐を掻い潜って、南野は小松とともにスターリンの乗る車両へと向かった。頭上すれすれを銃弾が駆け抜ける。

「開かないぞ！」

右手に迸る異質な衝撃を感じて南野は眉間を顰めた。

内部より掛けられた鍵によって開かないドアは、隔てている重厚な装甲板により、銃弾すら通さない。

刹那、近くで耳障りな声と開閉音が響く。その瞬間に南野の視界にスターリンと思わしき人物の敗走する背中が映り込む。

南野と小松は瞬時に謎の人物の足へとしがみ付いて、捕獲した。

うつ伏せになった謎の人物を抱え起こし、南野はポケットに入っていた白黒写真に目を向けた。月明りで不気味に照らされたその写真を見ながら、謎の人物の顔を一瞥した。

「こいつだ！」

南野は手際よく手錠でスターリンの両手を拘束し、銃弾の中を駆け抜けた。

銃撃地点より北へ200mの地点。

対岸を隔てるモスクワ川を背にクレムリンの壁が月明りに幻想的な映し出され、おぼろげな輪郭が露になる。

爆音吹き荒れる中、姿勢を低くして走る南野はスターリンを拘束しながら生き残った兵士達を連れて、待機中の九九式航空輸送機に飛び込んだ。

九九式航空輸送機は空を駆る。

ターボファンの轟音に包まれる中、モスクワの街は戦慄にさらさ

れた。対空砲火とサイレン音が夜気を切り裂き、機に搭乗する南野達の心臓の鼓動が速まった。その横では、スターリンが無表情で機内の鋼鉄の壁を凝視している。

南野は無線機のハンドマイクに耳を傾けた。

「こちら第1小隊。目標を確保した」

突如、重々しい沈黙が流れ、南野は不安を覚えた。

『了解。安全圏まで撤退。各所で燃料補給を済ませた後、信濃へ帰艦せよ』

作戦成功後の1943年3月23日。

日本軍によるスターリン誘拐の数日後に報告された処刑告知により、ゲオルギー・マレンコフがソ連共産党中央委員会書記長に就任する。ソ連暗殺グループに属するベリヤと共謀していたマレンコフは早速日本との講和を要求。日ソ戦の終結となった。

スターリンは1943年2月13日、移送された満州国の何処かで処刑された——と書類に明記されたが、その真相はまったく別物であった。

日ソ間の秘密会談にて日本側の交渉カードとなったスターリンの命——は、すなわちフルシチョフ、マレンコフ、ベリヤらの暗殺関与の事実、ソ連の闇、ソ連赤軍の軍勢力といった全ての情報を制するという所となり、日本側が格段に有利な形で進める事が出来た為、ソ連は多くの支援を約束した。

捕獲作戦（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

エリア55

1943年4月6日 pm 17:49

コロラド州デンバー

北緯39度51分41.96秒：西経104度40分23.44秒

大統領緊急避難施設

暗号名：『エリア55』

雄大なるロッキー山脈の麓に位置する都市デンバー。

その町の果てに建設されたのが、米国陸軍地下施設『エリア55』である。

何万々にも及ぶコンクリートと最新鋭の掘削技術による技術の賜物たるエリア55は、元々日本の戦略爆撃に対応する為、設営された施設であり、地下数百メートル地点に蜘蛛の巣状に広がるコンクリート地下壕群と新型レーダー設備。そして航空用にと秘密裏に開発が続くスーパーコンピューターを用いられた計算処理能力等、科学技術が満載されたこの施設は、1942年の米英戦争開始と同時に大統領の緊急避難施設——として想定され、更なる整備が続いた。1943年1月。

英軍戦略爆撃編隊によるワシントン空爆が開始された事を受け、ルーズベルト大統領はこの施設へと避難してきた。避難してきたのはルーズベルトに限らず、各省の重要官僚、閣僚、軍上層部も退避しており、今や『第2のホワイトハウス』として機能している。

地下三階。通称“シャドー・ハウス”と呼ばれるセクターの冷厳な廊下の天井からおぼろげな光を注ぐ白熱電球を仰視しながら、地下空間の中でルーズベルト大統領は普段の執務をこなしていた。外界と断ち切られた地下施設の中では、大統領デスクの木の匂いは助長され、ルーズベルトは羽ペンを下ろしてその香しい匂いを鼻孔へ

と流し込む。

車椅子を少し動かしながらうろついていると、鋼鉄の扉が突然開き、蒼白の軍帽とパリツとした制服に身を包んだ男が入ってくる。にわかに足を引き摺るその男は、合衆国艦隊司令長官と海軍作戦部長を兼任するアーネスト・キングである。負傷した足は、1月28日のワシントン大空襲で負った怪我によるもので、海軍内では療養する必要があるとの声も囁かれていたが、それ程の怪我でも無かった為、今でも兼任の執務をこなし続けていた。

「大統領。東海岸での件ですが……」

キングの青ざめた顔を見て、ルーズベルトの胸奥が揺らぐ。また悪い知らせではないだろうな。

「何があつた？」

「ニューヨークの防衛線が突破され、掌握された模様です」

キングの躊躇いがちな視線はコンクリートの壕壁の端を覗き込んでいた。

「やむなし……とは言えないな」

ルーズベルトの冷やかな声はキングの胸を突き破り、身を凍らせた。深き沈黙は後30秒間程続き、キングの視線は下に傾いたままだった。地下空間という事もあつてか、キングはルーズベルトの声が全方位から響いているかのような感覚に襲われている。

「ああ……聞かなかつた事にしたいものだよ」

「しかし……これは敵の物量作戦によるものでありまして――」

ルーズベルトの厳しげな瞳を見て、キングは口を紡いだ。

「またもや沈黙が続いたものの、キングは決死の覚悟とも同等に思えるように、口を開いた。」

「後一つですが……“30年計画”についてです」

「30年計画か……」

車椅子に据えられた足元のローファーが思わず軽やかな音を立て、ルーズベルトの顔色はにわかに和らいだ。今の娯楽と言えば、これ

ぐらいのものだろうな。

「軍備拡張は一部修正。英国駐留戦力は3%増とし、西海岸の防衛戦力は1%増です」キングは持っていたファイルを見ながら続ける。「更に、VTOL戦闘機の開発率は2%減。ロケットは+-ゼロです」

「反日キャンペーンは？」

「ロサンゼルスとサンフランシスコで展開中です。同時に愛国心刷り込み作戦も」

キングはそう言うのと、左手に持っていた一枚のポスターを取り出し、大統領デスクの上に敷き詰めた。ポスターには笑顔で注射を腕に差す日本軍兵士と、その横で日本刀が胸に差し込まれたマレー人らしき男が苦悶に顔を歪め、血を流しながら地面に倒れた姿が鮮やかな彩色で描かれている。

「日本兵の4分の1は麻薬を経験しており、その内4分の1が非人道的虐殺を行っている」……か」

中々上手く出来てるな。とルーズベルトは思った。事実はどうであれ、これなら日本人批判がより加速し、愛国心は増大していく。

30年計画——はハル・ノート新案製作時、ルーズベルトとキングらによって計画された対日戦争計画である。根幹は30年間の内に米国の軍事技術を驚異的に発達させ、陸海空軍の軍備増強。対英戦争終結後のヨーロッパ防衛戦力駐留。そして、愛国心と日本差別を同時に増大させる事である。

5月の嵐事件後、計画は一旦修正されたものの、それでも計画は続いており、ハル・ノート案期限切れと同時に戦争の火種を撒き、可及的速やかに日本へ宣戦布告するのが最終目標であり、ルーズベルトにしてみれば戦時中の暇つぶしの一つでもあった。

その計画の中において、現在大きく推進しているのが『日本兵批判』である。

太平洋・北アフリカ・東南アジア戦線において、日本兵が麻薬を

常用している。大虐殺を繰り返している。捕虜を認めず皆殺しにしている。ソ連と深く親密である。日本兵はマヌケであり、米兵の足を引っ張っている等々、助長や嘘を並べた反日キャンペーンはポスター、ラジオ、演説、反日結社、日系アメリカ人差別を媒介として蔓延しており、山下奉文の脅迫染みた降伏勧告もまた、計画の中で大いに役立っている。

「より助長してもいい。そうすれば国民の不満が政府に來ない」
ルーズベルトは至極普通の様子でキングに告げた。

「了解しました」

キングは低く頷きながら言った。

「……28年後が楽しみだ」

ルーズベルトは手を組み、デスクに広げられたポスターを見下ろしながら呟いた。

エリア55（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

Operation: Overlord (大君主作戦)

1943年12月18日 Am 05:03

イギリス/ロンドン上空

第82空挺師団のドナルド・スミス二等兵は、C-47スカイトレインに乗り、装備の再確認を進めていた。彼の任務において重要となるパラシュートに関しては、念入りに確かめる。

1943年1月のモロッコ制圧以降、ヨーロッパ各所に侵攻して次々と解放していった日米軍は、ドーバー海峡を越え、首都ロンドンへの直接侵攻を敢行し、実行したのだ。ここに通じるまでの道は険しかったものの、この作戦が成功すれば家族の元に帰ることが出来る。多くの兵士は信じており、戦争終結の為に米軍司令部は大胆な攻勢に打って出る事にした。

それが、空挺降下である。

1942年以降、カナダ・東海岸・東南アジア等の戦地で実行されたこの戦術は、イーグルや九九式航空輸送機のように対空兵器が満載された環境下において飛行不可能なものに対し、なんとか飛行して敵地に兵を送り込む事が可能であった。

司令部はクリスマス前に戦争を終わらせる為、6000人の空挺兵を投入。ロンドンでの戦闘が幕を開ける事となった。

「火砲の数が多過ぎる！」

揺れる機内の中、分隊長のレーガンは窓から垣間見える無数の砲弾と、上空へと向けられたサーチライト群を見て、思わず悲鳴に似た声を上げた。実際にその砲弾の嵐の中へと身を投じなくてはならないのだ。

——刹那、機体が引き裂かれる。

右翼が業火に包まれ、プロペラから不気味な響きが流れる。
そして、底が抜けた。

爆音とともに外へ投げ出されたスミスは、自分の身体が大きく回転し、世界が反転している事に気付いた。視線の先にあるのは空を飛ぶ無数の航空機であり、時折漆黒の雲が流れ行く。

……なんとか反転しないと。

身体をぐるりと回転させ、パラシュートに手を伸ばす。スミスの手は不意に引かれ、気付けばパラシュートはその雄大な翼の全貌を現している。空を飛ぶ航空機の気流のせいか、パラシュートが異様に流されている事に気付くのは、まもなくの事であった。

同時刻：ドーバー海峡

再編された本国艦隊を相手とするのは、大日本帝国海軍の連合艦隊。第1航空艦隊、第2艦隊、そして第6艦隊から成り、旗艦を『武蔵』とした大艦隊として戦闘に望む。

一方、本国艦隊は旗艦『ネルソン』を中心に『イラストリアス』『インドミダブル』『アーク・ロイヤル』『ヴィクトリアス』『ヴィンディクティヴ』という6隻の空母と40隻程度の駆逐艦、そして20隻の潜水艦が参加し、新たに再編されている。

本国艦隊司令長官ジョン・トーヴィは、この戦いの最初の日を思い出していた。

それは1941年10月3日、ボストン強襲の事である。

「……仕方あるまい。戦いは続く」

トーヴィは隣に居た参謀長に告げ、眉間を顰めた。脳裏に浮かぶのは、米空母や戦艦の沈み行く姿であった。

しかし、今やそれが反転しつつあった。

背後には日本軍の雷撃により、沈みつつある巡洋艦。前方には日本海軍の誇り、弩級の戦艦『武蔵』が46cm砲の矛先を巡洋戦艦

『フッド』へ向けている。

空を覆うは誇らしげなグロスター・サンダーボルト。その先には、九九式艦上ジェット戦闘機『神風』が迫り来ていた。

トーヴィを乗せる空母『イラストリアス』から発艦した第1攻撃機隊と第2・3爆撃機隊は、旗艦武蔵に向けて、進路を取っていた。その先頭に立つのは、ボストン強襲にも参加した古参兵、マクベイン少尉である。

一方の武蔵防衛を担う翔鶴の第1攻撃機隊を先導するのは、マレ―海戦やミッドウエーで戦果を上げ、多くの戦闘に参加してきた山川清二少佐である。

空を切り裂く二対のジェット戦闘機は、闇を切り裂きながら突き進む。やがて、接触するポイントまで到達すると、周囲の空気が震えを覚え始め、無数の火花が飛び散った。

――激突。

翼同士がかすり合い、航空機関砲が無数の銃弾を放ち、ロケット弾が空を舞う。

山川は唾を呑みこんで、操縦桿を握り締めながら肩を屈めた。機体は大きく湾曲し、上へ上へと昇って行く。キャノピー越しにジェットエンジンの振動が深く伝わり、戦闘の過酷さを物語った。

「流石にきついな……」

機体は疾風を纏いながら大きく旋回し、サンダーボルトの背後へと回り込んだ。瞬時に九八式航空機関砲が火を噴き、敵機の翼に無数の穴を開けた。同時にエンジン部分にも被弾しており、虫に喰われたような穴から航空揮発油が湯水の如く流れ落ちる。

そして、堕ちて行った――武蔵の上に。

同時に轟音が上がり、武蔵の巨軀の中心にポツカリと大きな穴が開いたが如く、大量の黒煙が一つの土塊のように固まり、低空へと浮標した。その塊を囲うようにして紅蓮の炎が立ち昇り、その被害の大きさを山下は痛感した。

惨劇はそれでは終わらなかった。

突如、海間から一直線に白線が形成され、不気味な音が静かに武蔵左舷へと迫っていた。

閃光が迸る。

流れるような動作で直撃した魚雷は武蔵の右舷に直撃し、ポツカリと大きな穴を開けた事を艦長朝倉大佐は、悲鳴に似た声で報告する下士官の声を聞き、知る所となった。接触したのは2発、両方とも左舷の中心部に向けて放たれており、何万ガロンもの海水が艦内へと流れ込んでいる。

「浸水区間を完全密閉し、なんとか時間稼ぎを――」

朝倉が話す中。流動の如く左舷へと魚雷が追撃するようにして激突し、爆発した。

武蔵は苦しそうに喘いでいるが如く、不気味な軋みと流水動音を響かせた。同時に、艦体が大きく左に傾き、朝倉は激しく転倒した。完全に狙い撃ちだな……。

敵の連続する雷撃から朝倉は最悪の想定を覚えずにはいられなかった。恐らく、英軍は左舷集中雷撃で艦自体を大きく左へと傾かせ、武蔵を転覆させる気なのだ。

「第1砲塔より浸水、及び機関区にも浸水被害あり。損傷甚大です」

報告にやって来た兵士は唐突にも告げ、朝倉は当惑と畏怖の表情を浮かべた。

「総員退去用意である事を伝えろ！」

朝倉の要求を聞き、武蔵の兵員の三門少尉は大慌てで艦橋を駆け下り、甲板上を疾走した。傾斜角12・3度にまで達する甲板の多くは荒波が流れており、同海域に展開していた駆逐艦『夏潮』が救助の為、接近しつつあった。

刹那、頭上をサンダーボルトが駆る。そのすぐ後ろから、神風が

迫っていた。

山川少佐はマクベイン少尉のサンダーボルトを追い詰めていた。回避行動虚しく、背後に密着する山川の神風は最高速度を記録し、風の鎧を周囲に纏う。

「これで終わりだ！」

九八式航空機関砲が火を噴き、サンダーボルトが悲鳴を上げる。突然、背後が爆発したマクベインは恐怖と驚嘆の声を漏らし、一筋の血が後頭部より流れ落ちた。苦しい血と汗の塩分が混ざり合った味が口内を満たし、背筋は焼け焦げている。気流がコックピットへと流れ込んで、激しい風圧に頭巾が舞い上がる。

ここまでかな……。

走馬灯が流れる間も与えず、機体は炸裂した。

その光景を武蔵甲板より見ていた三門少尉は、炎に包まれて墮ちるサンダーボルトの本体に目を見開いていた。四方八方に分裂した機片は武蔵艦尾に直撃する。

唐突に艦が上昇し、三門は滑り倒れた。唇から漏れる血を手で拭い取り、また疾走の時に戻った。

数十分後、武蔵。

総員避難用意勧告は既に総員避難命令に変更され、左舷に接舷した夏潮へと兵員の多くが退避し、武蔵からの避難を勧めていた。傾斜角は既に30度を越え、いつ転覆してもおかしくなかった。

艦橋では、艦長の朝倉大佐が冷徹の床に足を踏み締めながら直立不動の体勢で何時来てもおかしくない転覆の時を待っていた。

「さらば……」

決意を変えない朝倉は敬礼し、水平線の彼方より昇る日を見据えた。

それから間も無く、武蔵は左へと転覆した。

1943年12月18日Am08:27

武蔵沈没。

ロンドン中心部。

ビッグ・ベンを望むウェストミンスター宮殿の河畔、テムズ川近辺にスミス二等兵は着地していた。宮殿は事実上、政治の中心地では無く要塞として最初は機能していた為、米軍のロンドン大空襲に対しても庶民院が崩壊したのみに留まり、なんとか原形をとどめていた。

「……出来れば観光で来たかったな」

壮麗な街並みには似合わないバーナード・モントゴメリー率いる第6師団のチャーチル歩兵戦車がレンガ造りの車道を闊歩し、米国から購入したイーグル航空機がコマンドー部隊を乗せ、旋回する。

上空にはなおも空挺部隊のC-47スカイトレインが大きな翼を羽ばたかせ、無数の落下傘を落としながらロンドンの空を素早く回避していった。

「スミス！大丈夫か？」

囁めるような声が響き、右を振り返るとレーガン軍曹が手招きしながら「こっちに来い」とレンガ造りの建物に入るよう呼び掛けている。

ガラスの割れたショーウィンドウから覗かせるパンや菓子のレプリカを見る限り、そこがお菓子屋か何かである事が理解できた。

建物内に逃げ込んだスミスは、身体を屈めて外を見据えた。建物のすぐ近くをチャーチル歩兵戦車が通過していく。敵は6両の歩兵戦車と4台の兵員輸送車から成る部隊で、一列に隊列を組んで前進している。そして、そのすぐ後ろから馬と馬手が続く。

「王室騎兵の連中だ」

眉間を顰めながらレーガンが呟いた。

部隊が完全に通過した後、スミスはレーガンと合流を果たした分隊の面々数人とともに、鉄橋を抜けて本来の合流地点、トラファルガー広場を目指した。ビック・ベン、ウエストミンスター宮殿、ウエストミンスター寺院といったロンドンの三顔が軒を連ねる通りを時折現れる敵兵に銃弾を放ちながら駆け抜けていった。

間もなくして到着したトラファルガー広場では、ネルソン提督の記念碑を囲むようにして対空陣地が形成されており、空へ無数の砲弾を放っていた。

「見る！味方だぞ」

レーガンの指差す方向には、M1ガーランドを握り締めて必死に攻勢を続ける82空挺師団の面々が集まっていた。スミスはレーガンを追って近辺に造られている土嚢へと身を隠し、M1ガーランドで砲撃手を狙い撃ちにした。

戦闘開始から10分。事態は急変した。

対空砲の大半は活動を停止し、招かれざる客の対応の為に激しい銃撃戦が繰り広げられている。しかし、そんな中を突然チャーチル歩兵戦車が強襲したのだ。

それもチャーチル・クロコダイルだ。

火炎放射戦車であるチャーチル・クロコダイルは機関銃の代わりに火炎放射器を搭載しており、背部には火炎燃料を積んだトレイラーが付いている。主砲自体が存在する為、戦車としての機能も備えたチャーチル・クロコダイルは敵を砲撃と火炎放射で一掃出来るのだ。

唐突に現れたチャーチル・クロコダイルの存在に気付き、スミスは震え上がった。広場にはバズーカ砲も投下されていたものの、その体軀は畏怖を覚えさせた。

スミスはバズーカ砲を肩に担ぎ、狙いを定めた。

重厚なバズーカ砲から放たれた砲弾はチャーチル・クロコダイル

の正面に直撃したが、致命的なダメージに至らせるには及ばず、放射器から紅蓮の炎が空中を蛇のようにのた打ち回りながら放出され、土嚢を焼いていった。

同時に主砲も機能し、鋭い砲身はスミスの目先を向いていた。

……これでおしまいなのか？

チャーチル・クロコダイルの姿が昇るにつれて照らされていく。その刹那、上空を切り裂く一機のライトニングが姿を現し、爆弾を解き放ったのだ。

舞い上がる黒煙と爆音はチャーチル・クロコダイルの最期を示した。

背後のトレーラーは激しく燃え盛り、火柱が生まれて無数の火球がトラファルガー広場中に撒き散った。

スミスは激しく打ち続ける心臓の鼓動を抑えつつ、感謝の意を空に向けて述べた。

それから5日間、ロンドン各地で戦闘が続いた後、イギリス側の方からの降伏を受け、戦争は終わりを告げた。司令部の狙い通り、クリスマス前には戦闘は終結した。

そして間も無く、カナダも降伏をアメリカ側に申し出た。

こうして、米英戦争は終結した。

Operation:Overlord（大君主作戦）（後書き）

少し早いですが、後1話でこの小説は完結ですが、近い内に続編を新たに立ち上げたいと思っていますので、興味があればそちらの方もご覧下さい。

エピソード

1943年12月28日。

ロンドンで行われた無条件降伏調印式は滞りなく行われ、一つの戦争の区切りが付く事となった。イギリスは植民地の大半を放棄し、事実上帝国の崩壊に繋がった。

それから後に裁判がとり行われ、チャーチルといった面々は死刑判決を受け、イギリスは米国と日本の元に占領体制が敷かれ、米国は大規模な復興支援計画を敢行、イギリス各所に米軍基地が置かれた。

しかし、問題は多く、全ては4月まで遡る。

1943年4月1日。

東条英機、フランクリン・ルーズベルト、ベオルギー・マレンコフによる首脳会談（ヤルタ会談）が開始され、ポーランド問題が浮き彫りとなる。

英米戦争初期、英国との中立条約を結んでいたソ連は英国とともにヨーロッパ侵攻を開始。ポーランド東部を獲得したが、スターリン処刑後の日ソ講和後、日米との関係を形成。中立条約を破棄して英国への侵攻を表明し、ポーランド西側へと侵攻し全土を掌握する。ヤルタ会談においては、米国へと亡命したポーランド亡命政府がソ連の支援する共産党政権のどちらがポーランドの正式な政権になるかに対する話し合いが行われ、結果として共産党政権が正式な政権として認められた。

これらの問題が後の冷戦体制を生み出す要因となった。

1945年4月12日

ルーズベルト死去。

この日を期とし、日米間での関係が変化する。

『30年計画』もまた、大きく概念が変わる事となり、一つの時代が幕を下ろし、次なる時代が幕を開ける。

発展した技術と戦火の種、そして利益から生まれる戦いはそう遠くない内に起こり、日本はまた違う道を歩んでいく事になるのだ……。

エピローグ（後書き）

これで完結となります。

多々勉強不足ですので、おかしい箇所が多く、酷い内容であった事に対し、お詫び申し上げます。

続編の『大日本帝国冷戦期』を書く予定ですので、興味があればご覧下さい。

拙い作品でありましたが最後まで読んで頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0027m/>

米英戦争 ～レッド計画～

2010年12月16日17時10分発行